

平成二十四年度 博士學位請求論文

歌物語の研究

人文科学研究所

日本国日本大学文学部博士課程

吉田 多美子

平成二十四年度 博士学位請求論文

『歌物語の研究』

学習院大学大学院 人文科学研究科

日本語日本文学専攻 博士後期課程

近藤 さやか

目次

序論 「歌物語」について

六頁

第一部 『伊勢物語』の和歌と〈音〉について

第一章 第四十五段「蛩」

一〇頁

一、はじめに

二、「蛩」の表象

三、「雁」の表象

四、二首並列の和歌

五、影響関係

六、「ひぐらし」の存在

七、おわりに

第二章 第十三段「むさしあふみ」

一二頁

一、はじめに

二、東下りの理由

三、東下りの核・第九段

四、東下りの先の東国

五、京なる女

六、おわりに

第三章 第九段「みやこどり」

三八頁

一、はじめに

二、東下りの旅程

三、「みやこどり」の正体

四、「名に負ふ」ということ

五、おわりに

第四章 第二十三段「けこ」

- 一、はじめに
- 二、「笛子」説
- 三、「家子」説
- 四、『大和物語』の場合
- 五、第二十三段の和歌
- 六、おわりに

四九頁

第五章 伊勢物語の「音楽」

- 一、はじめに
- 二、『伊勢物語』に描かれる音楽・楽器
- 三、描かれない楽器「琴」——第二十三段の場合——
- 四、聴覚効果としての和歌
- 五、『源氏物語』に描かれた楽器「琴」——第四十九段の場合——
- 六、『伊勢物語』と『うつほ物語』における和歌と音楽
- 七、おわりに

六一頁

第二部 『伊勢物語』の実名章段について

第一章 「在原業平」——主人公「男」との関係——

- 一、はじめに
- 二、「後人注」の存在
- 三、人名の言葉遊び
- 四、名前を明かす物語——『うつほ物語』の場合——
- 五、「男」の名前を明かさないう意味
- 六、おわりに

七八頁

第二章 惟喬親王と紀有常―「友」と「供」―

九三頁

- 一、はじめに
- 二、紀有常と「ともだち」―第一六段・第三十八段における関係―
- 三、惟喬親王と紀有常と「男」―第八十二段における関係―
- 四、「狩り」と「やまと歌」
- 五、「友」と「供」
- 六、男性間における「友」
- 七、政治的關係に対する精神的關係「とも」
- 八、おわりに

第三章 崇子と多賀幾子―二人の「たかいこ」―

一〇九頁

- 一、はじめに二、崇子内親王三、女御多賀幾子
- 四、同音の名前
- 五、第三十九段たかい子登場前後
- 六、第七十七・七十八段多賀幾子登場前後
- 七、「たかいこ」の死
- 八、おわりに

第三部 『大和物語』について

第一章 〈前半〉の終段と物名歌

一二二頁

- 一、はじめに
- 二、『伊勢物語』との関係
- 三、第百四十段説・第百四十六段説
- 四、物名歌の意味
- 五、『大和物語』の物名歌
- 六、おわりに

第二章 贈答歌と和歌の省筆について

一、はじめに

二、初段の贈答

三、揃わない贈答歌

四、和歌の省筆

五、おわりに

一四二頁

第三章 『伊勢物語』と『大和物語』

一、はじめに

二、和歌と散文

三、名前と〈音〉

四、おわりに

一六五頁

終論

一七二頁

序論

「歌物語」とは何か

本論では、「歌物語」と呼ばれる作品である『伊勢物語』と『大和物語』を中心に、和歌と物語の関係、また仮名による言葉の果たす役割について考察する。

「歌物語」という言葉の用例を探ると、『栄花物語』巻第十四「あさみどり」の藤原道兼室（この時は藤原顕光室）が娘の出仕に際して、「あが君や、これをよきことにはあらず、人のせちにのたまふことなれば。故殿の歌物語を書きまうけて、御調度をして待たてまつりたまひしかど、御顔をだに見たまはずなりにしこと」(②一四二)と涙する場面に登場する。

和歌では、『相模集』の一八五番歌の詞書にある。

つ のくににすむこやの入道、歌ものがたりなどおほかた
にいふ人なりけり、かどのまへをわたるとて、いそぐ事
ありてえまあらず、なにごとかといひたれば

なには人いそがぬたびのみちならばこやとばかりもいひはし
てまし

これら平安時代の作品内では、和歌とそれに関した話という意味で使われている^(注1)。文学用語として「歌物語」という分類が使われるようになったのは、明治以降のことで、福井貞助によると、明治二十五年（一八九二）の大和田建樹『和文学史』に『伊勢物語』や『大和物語』を指して使われているが、普及させたのは、明治三十二年（一八九九年）に『国文学史十講』を刊行した芳賀矢一であるらしい^(注2)。

この「歌物語」なる形態は、折口信夫によって、人々に口頭で語られていたことが述べられ^(注3)、それを踏まえて益田勝美が、口承文芸段階の「歌語り」を基盤にし、「歌物語」となったことを説いた^(注4)。口承段階の歌語りから歌物語へ発展したものとしよう説明は現在刊行されている辞典類にも引き継がれている^(注5)。

歌物語の文体から口承的要素の反映を立証した阪倉篤義^(注6)により国語学的側面からの援護を受け、後に益田は、歌物語を広義の説話文学に属すると位置づけている^(注7)。実在の人物が登場するという点からも説話文学との接点はあるといえる。

歌語りについては、『枕草子』（三巻本）の第七十四段に、「有明などは、ましていとめでたし。笛など吹きて出てぬるなごりは、いそぎても寝られず。人の上ども言ひあはせて、歌など語り聞くままに、寝入りぬるこそ、をかしけれ」のような人の噂話と歌が

併せて語られているように歌の詠まれた状態をいうとされ、『紫式部集』九七に例がある。

かひぬまのいけといふ所なんあると、人のあやしきうた
がたりするをききて、心みによまむといふ

世にふるになぞかひぬまのいけらじとおもひぞしづむそこは
しらねど

『源氏物語』にも賢木巻・常夏巻・宿木巻に見られる。賢木巻では、光源氏と朱雀帝が話す場面にある。「よろづの御物語、書の道のおぼつかなく思さるることどもなど問はせたまひて、またすきずきしき歌語なども、かたみに聞こえかはせたまふついでに、(②一二四)」。常夏巻には、近江の君が早口であることの対比として語り口の重要さを述べる箇所にある。「ことなるゆゑに言葉をも、声のどやかにおし静めて言ひ出だしたるは、うち聞く耳ことにおぼえ、をかしからぬ歌語りするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたりさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどの、うち聞きにはをかしかなりと耳もとまるかし。(③二五四)」とあり、宿木巻では、薫と弁尼が亡き大君のことを語る場面で「故姫君の御事ども、はた尽きせず、年ごろの御ありさまなど語りて、何のをり何とのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける歌語などを、つきなからず、うち

わななきたれど語るに(⑤四五八)」とある。口頭で語られたものを聞く形態であったことがわかる。

口頭で語られた「歌語り」を記述作品化したものを「歌物語」という枠組みで説明されることが多く、『伊勢物語』は在原業平を思わせる「男」の一代記風にまとめた「歌物語」的性格なのに對し、『大和物語』は作品を通して特定の主人公を据えず、後半部は伝説・説話をまとめたものとなる内容から「歌語り」的性格と位置づけられる。

同じく、文学史上で歌物語と分類される『平中物語』も第十四段と末尾第三十九段に「平中」の名前が示されるだけであるが、一人の男を主人公にした点では『伊勢物語』に似ており、「また、この男」というように前後段の関連性を求める点では、より『大和物語』に類似する。平中というキャラクターについては『古本説話集』や『今昔物語』にも登場しており、益田が指摘する歌物語と説話文学との関係を考える題材となろう。

しかし、本論では、『伊勢物語』と『大和物語』の二作品から「歌物語」を考察していきたい。和歌とそれに伴う物語、つまり韻文と散文の関係は、歌集の和歌と詞書とは異なる。ともに和歌の詠まれた状況を説明するというものだが、歌物語では和歌が詠まれた後の展開も描かれることがあること、また物語の中に置か

れることにより、和歌の解釈を限定することにもなる。

また、散文と和歌の世界を繋げる言葉として言葉の役割も大きい。ある特定の言葉の持つ〈音〉から広がるイメージがある。和歌の修辞も掛詞や縁語など、限られた文字の中で言葉、特に仮名の持つ〈音〉が可能とするものである。漢字では意味が特定されてしまうが、仮名という表音文字が可能にする世界がある。

『伊勢物語』はその成立過程の問題から一つの作品として論じられることが今なお積極的に行われているとは言い難い作品であり、『大和物語』はゴシップ的と評される内容から『伊勢物語』以後の成立でありながらも、歌物語の前段階とされる歌語的の作品として作品としての価値は『伊勢物語』より低いとみなされている作品である。

歌物語とは何か。『伊勢物語』と『大和物語』という二作品から考察していきたい。従来、『伊勢物語』は成立論が問題とされ、一つの作品として読まれにくい傾向があった。本論では、石田穰二が初段と第二段の関係の緊密さを指摘したように^(注3)、前後の関係性を認め、一作品として考察することを目指す。また、『大和物語』は『伊勢物語』に比べ文学性が低いと評価されがちであるが、『大和物語』の方法を見直し再評価したい。

第一部では、『伊勢物語』の第四十五段・第十三段・第九段・

第二十三段を取り上げ、話の鍵となる言葉の〈音〉の効果に注目する。また、第二部では、『伊勢物語』の登場人物の固有名について考察する。第三部では『大和物語』の構成と贈答歌に注目し、『伊勢物語』の世界と併せて「歌物語」とは何かを考察する。

『伊勢物語』、『大和物語』、『竹取物語』、『枕草子』、『和泉式部日記』、『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集、『うつほ物語』本文は室城秀之校注『うつほ物語 全改訂版』(おうふう 一九九五年)による。また、各和歌集は新編国歌大観による。それぞれ、私に傍線等を付した。

【注】

三年）。

(注1) 『源氏物語』蓬生卷には「はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし」(②三三〇)があるが、歌と物語というそれぞれ別のものとして解せられる。

(注2) 『歌物語の研究』風間書房、一九八六年

(注3) 「歌及び歌物語」『国文学註釈叢書』第十五卷、

(注4) 「歌語りの世界」『益田勝美の仕事2』筑摩書房、二〇〇六年。
(初出は、「季刊 国文」第四号、東京文科大学国語国分学会、一九五三年三月)。

(注5) 『岩波古語辞典補訂版』岩波書店、一九七四年・『和歌文学辞典』桜楓社、一九八二年・『角川古語大辞典』角川書店、一九八二年・『和歌大辞典』明治書院、一九八六年などがある。

(注6) 「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐって―」『国語国文』第二十二卷第六号、一九五三年六月)。

(注7) 「歌物語の方法」『益田勝美の仕事1』筑摩書房、二〇〇六年。
(初出は、『古典とその時代V 説話文学と絵巻』三一書房、一九六〇年)。

(注8) 「伊勢物語の初段と第二段」(『文学論藻』第四八号、一九七

第一部

『伊勢物語』の和歌と〈音〉について

第一章 第四十五段「蛩」

一、はじめに

物語内における和歌解釈は、どこまで散文部分を解釈に反映させるかという問題を孕んでいる。同じ和歌であっても、詞書による詠歌状況の違いで意味が異なるように、物語内における散文と和歌の関係について注意する必要がある。

第一部では、『伊勢物語』の和歌と〈音〉、特に一般名詞の持つ〈音〉の効果の関係について考察する。まず、本章では、『伊勢物語』第四十五段の和歌を例に物語と和歌の関係を考えてみたい。

第四十五段は、大切に育てられていた娘が「男」に恋をするが、言い出せないまま病になり、ついに死の床で想いを打ち明ける。娘の親から知らされた「男」は慌ててやってくるが、女は死んでしまいい、その後、「男」の和歌が二首続く段である。

堀辰雄の「かういふ一段を読んでもりますと、何かレク牛エム的な、—もの憂いやうな、それでゐて何となく心をしめつけてくるや

うなものでいつか胸は一ぱいになつて居ります。(註一) という鑑賞で知られる段である。「レク牛エム的」とは、この段を簡潔に表現しているといえるが、その「レク牛エム的」雰囲気はどこまで段末の和歌の解釈に汲み取るべきだろうか。

「蛩」と「雁」は何を表象するのか、和歌が段末に二首おかれる意味はなにか。これらの問題について物語と和歌の関係をみながら『伊勢物語』の〈音〉について考察する端緒を開きたい。

二、「蛩」の表象

『伊勢物語』第四十五段(天福本)の本文は次の通りである。

むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男
ものいはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、
もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひ
けるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来
たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は六
月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけ
て、やや涼しき風吹きけり。蛩たかく飛びあがる。この男、見
ふせりて、

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ
悲しき

女の死後、「男」は「つれづれとこもりをりけり」と喪に服す。『令』の「喪葬令^{（注5）}」によると、死によつて喪に服するのは死人の縁者に限られているが、この男は娘の縁者ではない。「規定上は喪に服する必要はないのであるが、自分のために死んだ娘をあわれんで、縁者と同様に喪に服したのである^{（注3）}」とする説があるが、片桐洋一は、で『拾芥抄^{（注4）}』による死人のかたわらに坐つてしまふと三十日の間出仕できない点を挙げ、これを否定する^{（注6）}。

また、籠る場所についても、女の家をする説と「男」の自邸とする説がある。服喪ならば、女の家、触穢ならば、「男」の自邸と解されるが、ここでは、女と「男」の関係が親しいとはいえない点から触穢とすべきであろう。しかし、市原憲は、「ゆくほたる」歌が「いかにも女の柩の前で詠むにふさわしい^{（注6）}」として、空に昇りゆく蛍が亡き女の魂を可視化した歌であることを根拠に女の家を籠っているとする。

蛍について、魂を可視化した喩として詠む方法は、『後拾遺和歌集』巻第十九（雑五）神祇・一一六二番歌に和泉式部の有名な歌がある。

をどこにわすられて侍けるころきぶねにまゐりてみたら
しがはにほたるのとび侍けるをみてよめる

和泉式部

ものおもへばさはのほたるをもわがみよりあくがれいづるた
まかとぞみる

「蛍の光を魂の象徴とみる発想は、より古代的な信仰に発している」とみられる。しかし、実際には、前代の『万葉集』の時代の歌などにはほとんど例をみない。^{（注7）}と鈴木日出男が述べるように、蛍を魂に喩える発想は比較的新しいものであった。『古今和歌集』に詠まれた蛍は、漢詩文の影響も受け、「恋の思ひ」の掛詞として恋歌に詠まれ、夏の歌には登場しない。『後撰和歌集』巻第四・夏・二〇九番歌に、

桂のみこのほたるをとらへてといひ侍りければ、わらは
のかざみのそでにつつみて

つつめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

とあるこの和歌により、夏虫として認識されるようになった^{（注8）}。

では、和泉式部以前に蛍を魂と喩える例がないかというところ『古今和歌六帖』第六「ほたる」に「ゆくほたる」歌に続いて、四〇一二番に紀貫之の「夏の夜はともすほたるのむねの火ををしもたえたる玉とみるかな」と見立てる例がある。

そして、『伊勢物語』にも萌芽が見いだせる。『伊勢物語』中には、他に蛍が登場する段が二段ある。源至が女を見ようと車に蛍を入れる第三十九段の舞台は、皇女「たかい子」の葬送であり、第八十七段では、布引の滝を見た帰り、「うせにし宮内卿もちよしが家の前」で漁火を「河べの蛍かも」と喩えて詠む。『伊勢物語』では死者にまつわる場面で蛍が詠まれるのだ。そこには蛍を死者の魂としてイメージさせる雰囲気があるが、和泉式部のような自分の身体から離れ出たというような自覚的なものではない。第四十五段もそうした過渡期の段階にあると仮定するならば、女の柩から空に昇りゆく魂というような具体的なものではなく、男が自邸で見た蛍に女の魂のイメージを重ねたと考えられる。蛍を女の魂とみる説は、『伊勢物語評解』、『新日本古典文学大系』、『新編日本古典文学全集』、『鑑賞日本古典文学』などである。和泉式部歌ほどの明確な喩ではないものの、蛍を女の魂に重ねて詠む点に異論はない。一方で、雁を死者の魂とみる説がある。

三、「雁」の表象

石田穰二は『新版伊勢物語』（角川書店、一九七九年）で「娘の魂を雁にそよえて、秋風が吹いているから帰ってくるようにと、魂のよみがえりを願う歌であろう」といい、鈴木日出男は「諸説があつて一定しないが、この「雁」には亡き女の霊魂が込められているのに対して、「螢」は男自身の魂ではあるまいか。男の身からあくがれ出た魂が、女の魂とはじめて天上で邂逅する趣であるといえよう。^(註10)」として、蛍を「男」の魂とする。同様に、中野方子氏も蛍を男の魂の化身とするが、雁は常世と死者の国との往来が可能な存在であるため、女の魂を運ぶように頼むと述べる^(註10)。

蛍を「男」の魂、雁を亡き女の魂として、あるいは女の魂が既に常世にあるものとして解釈しているが、蛍を「男」自身の遊離魂とするには、後世の和泉式部歌の影響を強く受けすぎており、雁を女の魂とするのは時間的に早過ぎるのではないだろうか。つまり、「男」が「つれづれとこもりをりけり」と籠っているの、女が亡くなつてからまだそう時間は経っていない。仏教では中陰の四十九日の間は現世に留まるといふ考えのほずである。蛍（≪男≫）との邂逅を願ひ、雁に女の魂を投影する、あるいは、常

世からの使いとしての役目を頼むのは、既に女の魂が現世になく、常世にあるかのようになり、「男」の籠っている期間三十日と合わない。従って、蛭はやはり亡き女の魂が常世に向かうイメージを重ねたとすることが妥当である。

雁は一体何を表象しているのか。

「ゆくほたる」歌は『後撰和歌集』巻第五（秋上）二五二番に題しらずで「業平朝臣」の歌として収載されている。「伊勢物語」四十五段にも見えるが、物語がない場合は、秋を待つ思いを雁を待つ形で表わしたことになる。^(註1)とある通り、ここで表現されているのは秋を待つ思いのみである。同様に『古今和歌六帖』第六「蛭」四〇一番にも収載されている。詞書のない和歌だけでこの「ゆくほたる」歌を解釈するならば、蛭は夏、雁は秋の風物として、秋の訪れを待ち望むものとなる。では、『伊勢物語』の中でこの和歌はどのような解釈ができるだろうか。

折口信夫は和泉式部の歌の影響を受け、「何でもない夏の季節の蛭の歌が、こういう詞書を引き出ししてくる。そういう刺激を歌自身をもってしているのだ。^(註2)」として、蛭に魂の表象誘発要素があることを認めつつ、和歌に物語の解釈を持ち込まない。

雁は『古今和歌集』でも巻第四（秋歌上）二〇六番歌に

はつかりをよめる

在原元方

まつ人にあらぬものからはつかりのけさなくこゑのめづらし
きかな

というように、秋の鳥として詠まれ、『伊勢物語』第六八段には、住吉の浜で「男」が詠む歌「雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしの浜」があり、ここでも秋の代表的な鳥として詠まれている。第十段にも武蔵の国で女の「藤原なりける」母と「頼むの雁」をめぐる贈答があるが、この「雁」は女を指した表現である。

また、前述の通り、雁には魂を運ぶ使いとする説あり、『齋宮女御集』三五番歌が例に挙げられる。

しらつゆのきえにしほどのあきまつととこよのかりもなきて
とひけり^(註3)

父宮（重明親王）を亡くした秋を待っていると常世の雁も鳴き訪ねてくれると詠んでいる。

『勢語臆断』は雁が秋の渡り鳥であることから、魂もまた帰ってくるようによそえたものとし、塗籠本を本文とする『日本古典

全書』などにも引き継がれるが、竹岡正夫は、雁を魂と見る例が当該歌を収載する『後撰和歌集』に見られないことから否定している^{注14}。

「ゆくほたる」歌での雁には、女の魂や常世からの使いといった役割ではなく、秋にやってくる鳥として詠まれている。「使い」として雁の役割が成長していく過程の中にあるといえるだろう^{注15}。次に、この段の構成、和歌の配置について考えてみたい。

四、二首並列の和歌

この段は末尾に和歌が二首並列されていることから、『伊勢物語』中でも珍しい形とされている。塗籠本(『日本古典全書』による)では、この二首の和歌は次のようにそれぞれ別の段を構成している^{注16}。

塗籠本 第四十三段

昔、みやづかへしける男、すずろなるけがらひにあひて、
家にこもりいたりけり。時はみな月のつごもりなり。ゆふぐ
れに、風すずしく吹、螢など、とびちがうを、まぼりふせり
て、

ゆくほたる雲のうゑまでいぬべくは秋かぜふくとかりに

つげこせ 塗籠本 第四十四段

昔、すきものこのころばゑあり、あてやかなりける人のむ
すめのかしづくを、いかでものいはむとおもふ男ありけり。
このころよはく、いひいでんことやかたかりけん、ものやみに
なりて、しぬべきとき、「かくこそおもひしか」といふに、を
や、ききつけたりけり。まどひきたるほどに、しににければ、
いゑにこもりて、つれくとながめて、
くれがきなつのひぐらしながむればその事となくものぞ
かなしき

このような構成の違いから、成立の問題が問われてきた^{注17}。
つまり、どちらが先行するか先行するかということだが、本論で
は構成と表現の比較にとどめたい。

この塗籠本では第四十三段で「すずろなるけがらひ」として、
思いがけず死などの穢れに触れてしまい、家に籠らねばならな
くなった男が詠んだとして「ゆくほたる」の和歌がある。「みやづ
かへしける男」とされることから、穢れに触れ出仕できなくな
ったことが分かる。天福本より露骨な書き方である。

そうした状況で詠まれる「ゆくほたる」歌は、天福本のような「レ

クキエム」的雰囲気を持っていない。早く季節が移り、服喪期間が終わることを望んでいるようにも解釈できる。

続く第四十四段は天福本第四十五段に類似するが、当然、螢の場面と歌はない。「その事となくものぞかなしき」に、親しかつたわけではないが、自分を想ってくれていた女の死を、戸惑いながら悼む様子が表われている。

天福本の解釈においても「ゆくほたる」歌と「くれがたき」歌の二首は詠まれた状況が異なるのではないかという疑問を呈する論も『肖聞抄』や『闕疑抄』、『勢語臆断』などの古注からみられる。塗籠本では、別の段の話となっているため、こうした問題は生じていないが、天福本ではなぜ二首続けて和歌が詠まれるのだろうか。

二首歌が並列されるという例は『伊勢物語』中にないため、特異なものとして扱われがちだが、石田穰^{二注一}が第十六段の末尾との類似を指摘している。

むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のこともあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、な

ほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。

年ごろあひ馴れたる妻、やうやう床はなれて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたる所へゆくを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくを、いとあはれと思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう、いまはとてまかるを、なに」ともいささかなることとせせで、つかはすこと」と書いて、奥に、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり

かの友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までおくりてよめる。

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君をたのみ来ぬらむ

かくいひやりたりければ、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつ

りけれ

よるこびにたへで、また、

秋やくるつゆやまがふと思ふまであるは涙のふるにぞあ

りける

右のように、第十六段は、紀有常を中心にした段であり、出家した妻へ贈る物がないことを嘆く有常の「手を折りて」歌に対し、「友だち」である男の「年だにも」歌と贈り物がくる。これに対し、有常は「これやこの」歌を詠み、「よろこびにたへで、また」と「秋やくる」歌を詠むのである。

相手からの返歌を待たず、「よろこびにたへで」と二首目を詠むため、段末二首はどちらも有常の歌である。抑えきれない喜びという友だちへの感謝から二首立て続けに詠んだと解釈できる。つまり、「あまの羽衣」「きみがみけし」として、相手の贈り物を賞賛した後に、「つゆやまがふ」と涙して喜ぶ自分の感情を伝えている。

この第十六段では贈答歌であり、第四十五段はどちらも独詠歌であるという違いはあるが、抑えきれない感情の表出という点では共通するだろう。第四十五段も「ゆくほたる」歌で、蛩に亡き女の魂が昇天するイメージを重ね、秋の到来を雁に伝えてくれと詠み、「くれがたき」歌で「そのこととなくものぞ悲しき」という自らの感情を詠み上げる。

一首に収まりきれない感情を二首目に託しているが、それは一首目の和歌によって沸き起こった感情であり、自己陶酔的ともい

えよう。

また、この物語が「時は六月のつごもり」と設定されていることについて、関根賢司は「夏の終り、秋の訪れを待つ、絶妙な時日。二首の歌が併存しうる状況の設定である。」^(注19)と述べる。夏と秋の移り変わりの時期に、「ゆくほたる」歌は秋を待ち望む想いを詠み、「くれがたき」歌は、ゆく夏を惜しむ想いが詠まれている。こうした季節感是中国漢詩による影響が大きいことを確認しておきたい。

五、影響関係

蛩と雁が同時に詠み込まれている歌は珍しく、『和漢朗詠集』^(注20)巻上「蛩」にみられる許渾の詩、「蒹葭水暗蛩知夜 楊柳風高雁送秋」(蒹葭水暗うして蛩夜を知る 楊柳風高うして雁秋を送る)の影響が指摘されている。

また、この第四十五段の影響を受けたものとして『源氏物語』幻巻^(注21)の次の場面がある。

いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに、ほればれしくて、つくづくとおほするほどに、日も暮に

けり。蝸の声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを独りの
み見たまふは、げにぞかひなかりける。

つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の
声かな

蛍のいと多う飛びかふも「夕殿に蛍飛んで」と、例の、古言
もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知る蛍を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけ

り
(④幻巻 五四二〜五四三)

ここで光源氏が言う「夕殿に蛍飛んで」により、「例の古言」
が「長恨歌」であることが分かる^(注22)。幻巻は亡き紫の上を偲ぶ
一年が描かれ、ここに楊貴妃を失った玄宗皇帝の「夕殿蛍飛思情
然 孤灯挑尽未成眠」という嘆きが重ねられている。

上野理は、蛍をみて使者をしのぶことに「長恨歌」が媒介とな
っているとし、この『源氏物語』幻巻の場面から逆に、『伊勢物
語』第四十五段に「長恨歌」が影響しており、『源氏物語』はそ
の方法を正しく理解し、この場面を作り上げたのだという^(注23)。
泉紀子も絵画的視点から、「玄宗が庭の蛍を見る〈構図〉、その
中の玄宗の立場から感傷的に詠まれる和歌のありようと重なる
ように思われてくる^(注24)」と、第四十五段の成立に「長恨歌(絵)」

の影響関係を指摘している^(注25)。

和泉式部の和歌ほど可視化された具体的な魂として蛍が詠ま
れる以前に、「長恨歌」から死者を思い出ししのぶものとしての
蛍というイメージを持っていたことが確認できた。

最後に「くれがたき」歌についてみておきたい。

六、「ひぐらし」の存在

この段の最後に置かれた「暮れがたき夏のひぐらしながむれば
そのこととなくものぞ悲しき」という歌は『続古今和歌集』巻第
三(夏歌)二七〇番に「題不知 在原業平朝臣」とあるが、『伊
勢物語』から採られたものだろう。蝸は『万葉集』時代は夏と秋
の季節で詠まれていたが、『古今和歌集』では、巻第四・秋歌上
の二〇四番・二〇五番に二首、

ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげ
にぞありける

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし
と詠まれる秋の虫である。

この歌では「ひぐらし」を「日暮し」だけで解するか、虫の「蝸」

が掛かっているかどうかの判断が難しい。『闕疑抄』は「日ぐらし、すみて読なり。蟬の日ぐらしなくなどは、にぐりてよむ也」として、蝸説を否定し、折口信夫は「ひぐらしに蟬の蝸がはいっているかどうか。わからない。しかし何かないと淡泊すぎる。¹²」と述べている通り、「蝸」説は積極的な解釈がなされていないのが現状であるが、ここには蝸の鳴き声があると解すべきである。蝸説を取る説を紹介すると、上坂信男は「蝸の哀しい調べに夏の日の終りのそこはかとな悲しみを味わっている歌^(注26)」とし、梅澤正弘は「蝸の物悲しい声の聞こえる時候と一致」していることと、「ゆく螢・秋風・来る雁」から蝸へと「時候の推移との一致」を理由にする^(注27)。

花井滋春は、「蝸と蝸」という歌語の対比を指摘し、二首並列される理由も「漢詩的修辭法に倣った対句的表現^(注28)」としており、賛同したい。岩下均も「一日中悲しみに声をあげて鳴きくらす蝸と、しのび音に身を焦がす蝸^(注29)」という対照関係をみている。

『伊勢物語』は、「やまと歌」の作品として、漢詩への対抗意識、漢詩文からの影響も多く指摘される作品であることはいまでもない。蝸に死者を思い出ししのぶものとしてのイメージを漢詩から受け継いでいるように、散文を挟まずに和歌を二首置くこ

とで、漢詩の対句という表現法を導入したのだとすると、蝸と蝸は対比関係になる。

従来、蝸の解釈に消極的であったのは、蝸は実景として詠まれているのに対し、蝸の描写が物語内にないという点もあるだろう。前述した『源氏物語』幻巻の場面には「蝸の声はなやかなるに」という描写があり、源氏は蝸を「かごとがましき虫」とし、蝸を見て「夜を知る虫」として二首詠んでいる。

蝸は光を放つ虫であり、その螢火が「思ひ」と掛けられ、鳴かずに「思ひ」を燃やすことから恋の歌に詠まれるようになった。蝸は視覚的な虫である。対して、蝸は物悲しい鳴き声が詠まれる聴覚的な虫であるという点も押さえておきたい。

自分のことを密かに思っていた女、そんな女の臨終間際にいきなり想いを告げられた「男」としては、何よりも戸惑いが大きかった。蝸には死者の魂のイメージがあり、鳴かずに身を焦がす夏の虫である。亡き女のように死の間際まで「思ひ」を言わずに身を焦がして恋死に至ったことも、蝸を見て連想される要因であろう。

「六月のつごもり」という夏の秋の転換となる日に、夏と共に逝ってしまった女の魂を蝸に重ねて見送り、秋の鳥である雁に秋の到来を知らせてくれと詠むが、また、秋の虫である蝸の鳴き声

に悲しさを募らせる。この蝸の鳴く声に「男」の心が表象されているのではないか。

七、おわりに

夏の蛸と秋の蝸は、視覚的な虫と聴覚的な虫という点でも対比関係にある。漢詩の対句のように二首並べられている点にも二首の対比や対照関係が見て取れる。和歌だけを解釈すると季節の移り変わりを詠んだ表面的な解釈になりかねないが、物語の背景を汲み取ることによって「レクキエム」なものに変わる。

漢詩的世界観によって基礎をなす蛸を中心にして作り上げた場面を、和歌という形で表現されている点に、『伊勢物語』の挑戦的な表現構造が表れている。蛸と雁を何に当てはめるかという一首の解釈に留まるのではなく、物語全体を見渡して解釈することが求められる。

物語と和歌の関係についての一視点として『伊勢物語』第四十五段を中心に考察した。

和歌の解釈とは本来三十一文字で解決すべき解釈であろうが、物語内の和歌には別要素が加わり、影響を与えていることから、散文部分と隔離するのではなく融合した解釈をしていくべきではないだろうか。

【注】

(注1) 「伊勢物語など」(『堀辰夫全集 第三卷』筑摩書房、一九七七年)。

(注2) 『新訂増補国司史大系 令集解 第四』吉川弘文館、一九七四年)。

(注3) 森本茂『伊勢物語全釈』大学堂書店、一九七三年)。

(注4) 『新訂増補故実叢書 禁秘抄考註 拾芥抄』(吉川弘文館、一九五二年)、「拾芥抄」の「觸穢部」に「一人死ハ三十日 自ニ葬日一計レ之」とある。

(注5) 『観賞日本古典文学第5巻 伊勢物語 大和物語』(角川書店、一九七〇年)。

(注6) 『伊勢物語解釈論』風間書房、二〇〇一年(第一篇第一章)。

(注7) 鈴木日出男「物語歳時記(四)」(『国語通信』第30号、一九八八年九月)。

(注8) 山崎節子「夏虫と蛭―古今集の注釈と実作―」(『女子大文学』第三十号、一九七九年三月)、丹羽博之「平安朝和歌に詠まれた蛭」(『大手前女子大学論集』第二十六号、一九九二年十二月)、本間みず恵「蛭」考(『日本文学研究年誌』第七号、一九九八年三月)による。

(注9) 「螢」(『知っ得古典文学動物誌』、學燈社、二〇〇七年八月)。

(注10) 『コレクション日本歌人選004在原業平』(笠間書院、二〇一一年三月)。

(注11) 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』岩波書店、一九九〇年)。

(注12) 『折口信夫全集 ノート編 第十三巻』一九七〇年)。

(注13) この歌の三句を「あきはなを」四句を「とこよのかりの」にした類歌が一二三番にあり、続く一二三番歌に「おほむかへり」として、村上天皇の返歌「かりがねのくるほどだにもちかければ君がすむさといくかなるらん」がある。

(注14) 『伊勢物語全評釈』右文書院、一九八七年)。

(注15) 藤井貞和「雁」(『岩波現代短歌辞典』岩波書店、一九九九年)。

(注16) 他に肖柏本も和歌を二首並ばない以下のような形になっている。「つれづれとこもりおりけりさてなむよめる暮かたき夏の日くらしなかわれはそのこととなくみなたおちけり」と天福本で最後に置かれる「くれがたき」歌とは五句と位置が異なる。

(注17) 市原愿『伊勢物語塗籠本の研究』(明治書院、一九八七年)、後藤康文「現存本文という陥穽―平安朝文学史の構想に際して―」(『国語と國文學』二〇一一年十一月号)。

(注18) 『伊勢物語注釈稿』竹林舎、二〇〇四年。

(注19) 『伊勢物語論 異化／脱構築』(おうふう、二〇〇五年)、ほかに、浜田弘美「蛍の別れ―『大斎院前の御集』の文芸」(『日本文学誌要』第四十一号、一九八九年九月)や(注10)も時の設定について注目している。

(注20) 菅野禮行校注・訳『新編日本古典文学全集 和漢朗詠集』小学館、一九九九年。『千載佳句』に秋興として、『全唐詩逸』に「常州ニシテ楊給事ニ留与ス 許渾」と収載する。

(注21) 『新編日本古典文学全集 源氏物語④』小学館、一九九六年。
(注22) 新聞一美(『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年、第一部Ⅲの四)はこの句が『和漢朗詠集』卷下「恋」に摘句されていることを指摘し、光源氏の詠む「夜を知る」歌は先に述べた許渾の句が機縁となった「和漢朗詠集の場面」でもあるという。

(注23) 「伊勢物語の藤と螢」(『東洋文学研究』第十七号、一九六九年三月)。

(注24) 「長恨歌と伊勢物語―「夕殿蛍飛思悄然」(『白居易研究年報』11)」、白居易研究会、二〇一〇年)。

(注25) 他にも上野理「伊勢物語の藤と蛍」(『東洋文学研究』第十七

号、一九六九年三月)に「塗籠本の両段を流布本の四十五段に変化させた」と仮定するとき、その触媒は、長恨歌の詩句が考えられる」と関係が指摘されている。

(注26) 『伊勢物語評解』有精堂、一九六八年。
(注27) 「伊勢物語」四五段の構成と成立をめぐって」(『松学舎大
学人文論叢』第18輯、一九八〇年)。

(注28) 『伊勢物語』創作の方法―四十五段の特異性を起点として―
(『國學院大學大学院紀要 文学研究科』第14輯、一九八二年)。
(注29) 「螢」考」(『目白学園女子短期大学国語国文学』第二号、一
九九三年)。

第二章 第十三段 「むさしあふみ」

一、はじめに

『伊勢物語』には第七段から第九段までの有名な「東下り章段」に続き、東国が舞台となる第十段から第十五段の「東国章段」がある。東国が舞台となる点では、物語後半の第百十五段と第百十六段もこれらも含まれるが、従来「後から加えられた」とされている段であり、「陸奥の国」を舞台とし、第十四段・第十五段と共通する。

また、塗籠本では、第百十五段（「おきのゐて」歌を持つ段）は、第十五段の後に位置し、「東国章段」としての配列になっており、第百十六段に相当する段はない。

本論では東国章段の中央に位置し、「陸奥の国」に舞台が移る直前にある第十三段の「むさしあふみ」について、前後の章段関係を踏まえて考察していく。

二、東下りの理由

『伊勢物語』はそれぞれの段が「むかし（まじ）」と始まる。段ごとに完結した形を取るため、独立して読むことも可能である。しかし、初冠に始まり終焉で終わる「男」の一代記といわれるよう

に、各段は他の段との関連をもって配列されており、決して一つの段だけを取り出して解釈できるものではない。東下り章段・東国章段とひとまず分けられるが、連続させて解釈すべきである。諸本により、段の配列は異なるが、適宜比較しつつ、本論では天福本を中心に考察していく。

そもそも「男」が東国まで行ったのはなぜか。

第七段

むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白くたつを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる

浪かな

となむよめりける。

第八段

むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なるあさまのたけに立つけぶりをちこち人の見やは

とがめぬ

兩段とも、「京にありわびて」（第七段）、「京やすみ憂かりけむ」（第八段）と京にいられなくなったことから東を目指すことが書かれている。

京を「ありわび」または、「すみ憂」く感じた理由は、この東下り章段の前の第三く六段に位置する「二条后章段」による悲恋を連想するのが自然である。

「二条后」とは、清和天皇の女御として入内し、後に陽成天皇の生母となる女性である。その二条后が入内する以前の藤原高子であった時に、主人公「男」は「ひじき藻」と歌を贈り懸想する第三段、女が他所に身を隠した後、女のいない屋敷で去年の春を想い女の不在を嘆く第四段、密かに訪ねていた通い路に関守を立てられるが、それを嘆いた和歌により、後に許される第五段、そして、「男」が女を盗み出す第六段がある。第六段は以下のような段である。

むかし、男ありけり。女_のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。芥河といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらず、神さへいといみじ

う鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡縁を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉が何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましもの

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、のただにおはしける時とや。

「男」は逃避行を企て雷が鳴る中、芥川のあたりまで逃げ、女を倉に入れて外で守る。夜が明けるのを待つて開けてみると、倉にいた鬼に食われてしまっていた。高貴な女は草の上に光る露を見たことがなく、「あれは何？」と聞いたことを思い出し、あの

時「露ですよ」と答えてその露のように消えてしまえばよかったと詠む。しかし、最後に女は入内前の二条后であり、鬼に食われたのではなく、後の兄二人が奪い返しに来たのだったと暴露する。

「御兄」は藤原長良を父とする藤原高子の兄二人である。「堀川の大臣」は藤原基経であり、「太郎国経の大納言」である藤原国経の弟であるが、叔父の藤原良房の養子になり、後に摂政関白太政大臣となる人物である。良房には文徳天皇に入内し、染殿后となっている明子が娘にのみである。その明子を母とする清和天皇に高子は入内しているように、高子も良房の政治的権力を握る為の重要な位置にいた女性だったことが分かる。

后となる女を盗んで逃げた「男」は時の権力者を敵に回したのだ、というように、女の身分を明かす部分によって、ただの悲しい恋物語ではなく、「男」に政治的敗北者の影が濃厚に打ち出されるのである。

そして、「男」のモデルとされる在原業平は、阿保親王と伊都内親王という皇族を両親に持つ人物である。しかし、いわゆる弘仁元年（八一〇）の「薬子の変」に父・阿保親王は連坐し、大宰府に十四年も流される。平城上皇の崩御により、ようやく阿保親王は天長元年（八二四）に帰京を許された翌年に業平は誕生している。そのさらに翌年である天長三年（八二六）、阿保親王の上

表により、兄弟らと共に在原姓を賜り、「在原業平」となった。

この薬子の変は、平城上皇の寵愛を受けた藤原薬子が兄の仲成と、上皇の重祚と平城京遷都を謀ったが、挙兵前に発覚し、仲成は射殺、薬子は毒を仰ぎ自殺、平城上皇は出家したという事件である。これにより、北家の藤原冬嗣が蔵人頭となって台頭していく契機となる。この冬嗣の次男にあたるのが、第六段に登場しているものの、背後に存在する時の権力者・藤原良房である。

このように第六段の「男」に業平を重ねて読むならば、因縁的ともいえる政治的敵対関係が垣間見え、続く第七・八段で「京」に居づらいつい理由は、前段の女を失っただけではなく、それが禁忌の恋であり、都に帰れぬ政治性を帯びた事情を仄めかしているのである。

第六段のいわゆる〈後人注〉に「まだいと若うて、後のただにおはしける時とや」とある。入内前の二条后、つまり藤原高子との逃避行に失敗し、居辛くなった京を離れ、東に旅立ったという流れに読める。注意したいのは、実際に在原業平が二条后と恋愛関係にあり、引き裂かれて東国へ下ったということではなく、『伊勢物語』ではそのように読める、ということである。

他にも、「男」と在原業平を重ねてみるならば、官位が十三年停滞したことが指摘される。『続日本後紀』によると嘉祥二年（八

四九年)一月に従五位下に任じられた以降、『日本三代実録』の貞観四年(八六二年)三月に従五位上に叙せられるまで、十三年も官位が停滞していたとされる。

また、業平は父を阿保親王、母を伊都内親王とする生まれである。阿保親王は、父である平城上皇が目論んだ平城京遷都、弘仁元年(八一〇年)の薬子の変に連坐し、太宰府に十四年も流される憂き目にあつた。平城上皇の崩御により、天長元年(八二四年)帰京が許される。『続日本後紀』によると、承和元年(八三四年)二月に遠江国敷智郡古荒田世三町を拝領している。翌月三月には上野太守に、承和九年(八四二年)正月に上総太守となっており、東国との関わりを持つ。

こうした関連から雨海博洋は、東国に「すむべき国」として求めた一つとして、「父との縁深き上総の国とみることができのではあるまいか。九段には、男が駿河から武蔵国に入り、武蔵国については何もふれることなく、いきなり武蔵と上総との境の隅田川に場面が移っているのも、下総から上総への意図があるからである(注2)。」と指摘する。東下りの旅程は、『闕疑抄』で第八段の「浅またけにたつけぶり、いせ尾張の方よりは見えまじきか。昔は煙の過分に立けるものにてこそ有つらめ(注3)。」とあり、実際に旅をしたのか否かも問題とされている。『伊勢物語』という作

品内において、事実か否かを問いただす必要はない。従つて、武蔵国に触れずに上総と下総の境界を流れる隅田川に至ることに、父阿保親王と縁深い上総を忍ぶ在原業平の影をみることもないだろう。「東国」という空間に向かう「男」は(在原業平)の影を負つてはいるものの、業平ではない。阿保親王を通じた東国との縁は、業平の影の一つでしかない。

隅田川に場面を移すことについて、本田恵美に「「住むべき国」を求めて「すみだ河」の辺りを彷徨う東下り(注4)。」との指摘がある。また、「六段との関連で七く九段を読むならば、東下りの旅とは、所謂芥川の段で鬼に一口に食われ露のようにはかなく消えてしまった女を求めての旅、という解釈も可能ではないか。それは、すなわち、東に吾妻を求めての旅であつた。」とも述べている。『古事記』・『日本書紀』には、日本武尊の東征に同行した妻の弟橘媛が海神の怒りを鎮めるために自らを犠牲にして入水する。後に日本武尊が弟橘媛を想い、「吾妻はや」(我が妻よ)と嘆いたことが「東」を「あづま」というようになったという地名起源がある(注5)。日本武尊とは貴種流離譚としての共通点もあるが、「男」は「吾妻」を求めて東へ旅立つ。それは(音)に注目した歌が詠まれる東下りの旅として見逃せない指摘である。

以上を踏まえて、第九段を見てみたい。

三、東下りの核・第九段

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。

道しれる人もなくて、まどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおりて、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蕪かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。

「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国のながいに大きな河ありけり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

『伊勢物語』のある段を取り上げるだけでなく、前後の段を見る場合、未だ避けては通れない問題として、成立論がある。有名な片桐洋一のいわゆる「三段階成立論^(注6)」では、この九段は『古今和歌集』以前の原初形態なる『伊勢物語』から存在したものとされている。論者は「三段階成立論」には賛同しかねる考えである。業平歌かどうか、など違いがあつても、作品として一回的にまとめられた作品であると考えている。冒頭の「むかし」で揃えた表現や、「男」の人生を一代記風の流れにしている点を見過ごしてはならないだろう。

それとは別に、この第九段について言うならば、この第九段を核として東下り章段ができ、東国章段が続いたものだと考えられる。「段階」という時間を隔てたものではなく、素材として先にあったのだ。それは第九段には詠まれた四首の歌の内、最初の「から衣」の歌と四番目の「みやこどり」の歌が『古今和歌集』巻第九(羈旅歌)四一〇・四一一にあることからわかる。

四一〇

あづまの方へ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、
みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、
その河のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりける
を見て、木のかげにおりて、かきつばたといふいつも
じをくのかしらにすゑてたびの心をよまむとてよめる
在原業平朝臣
思ふ

四一一

むさしのくにとしもつふさのくにとの中にあるすみだ河
のほとりにいたりてみやこのいとこひしうおぼえければ、
しばし河のほとりにおりて、思ひやればかぎりなくと
ほくもきにけるかなと思ひわびてながめをるに、わたし
もりはや舟にのれ日くれぬといひければ舟にのりてわた
らむとするに、みな人もわびしくて京におもふ人なく
しもあらず、さるをりにしろきとりのはしとあしとあか
き河のほとりにあそびけり、京には見えぬとりなりけれ
ばみな人見しらず、わたしもりにこれはなにとりぞと

ひければ、これなむみやこどりといひけるをききてよめ
る

名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなし
やと

『伊勢物語』第九段は、『古今和歌集』に二首並んだ和歌を核
となる素材にし、三河の国と武蔵の国と下総の国の間を埋めるも
のとして、駿河の国の歌「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢に
も人にもあはぬなりけり」・「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか
鹿子まだらに雪のふるらむ」を入れたと考えられる^(注)。第九段
に限らず、「現行『伊勢物語』「東下り」の諸章段が、同一作者
の手によって、殆ど一回的に制作されたものである」とする見
方^(注)の河地修の論にあるように、東下り章段はそれぞれ照応
関係にある。河地は歌枕に対する説的性格、第七く九段の冒頭
表現を照応の論拠としている。同様の照応関係は、東国章段でも
いえるのではないだろうか。

四、東下りの先の東国

佐藤裕子は第十段から第十五段の前後関係について、第十一段
は内容的関連性のない地縁的関連のみで位置していると、他

の章段とは別にするものの、「東国章段は、単に地縁的な関連の
みではなく、内容的関連性を求めた配列がなされている^(注)」と
論じている。佐藤の論では、東国章段の中でも、第十一段を除い
た五つ段の関係を対象としているが、少し視界を広げて考察して
みたい。

まず第十段である。

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国に
ある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、
母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母な
む藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむ
こがねによみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよ
しのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴
くなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか
忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

「吾妻」を求めて向かった東で、武蔵国に至った男は、第十段で「武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり」と武蔵国の女に逢う。「母なむ藤原なりける」と母方が藤原氏という展開は、藤原高子の二条后章段を思わせる。「あてなる人」である男を「むこがね」と願う母から和歌が届く。積極的な母親の賛成を得るのである。第六段で「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりける」とあつた時とは逆に障害なく進む。「人の国にても、なほかかることなむやまさりける」という一文は、京での二条后との恋を仄めかしてもある。

第十一段で「友だちども」に手紙を送る話がおかれ、第十二段では「人のむすめ」を盗む。

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて、火つけむとす。女、わびて、武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり
とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

第六段と同じく女を盗み、失敗する話形である。この「人のむすめ」を第十段の娘とみる必要はないだろうが、藤原氏の娘・女を盗むというこれらは「あたかも二条后との恋愛の繰り返し¹⁰⁾」である。続く第十三段は、第十段をもとに解釈されることが多い。第十三段の全文は次の通りである。

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書きて、うはがきに、「むさしあぶみ」と書きてをこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、武蔵鑑さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし
とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鑑かかるをりにや人は死ぬらむ

「武蔵なる男」が対称的な「京なる女」に「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」という何ともどかしい内容の判然としない文を書く。ここで和歌の形は取らず、加えて奇妙なことに「うはがき」に「むさしあぶみ」とのみ書き送るのである。従来、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」の内容については、『勢語臆断^(注1)』

でいうように、第十段で「母なむ藤原なりける」女の婿となったことを指す。

とりわけこの第十三段については、「武蔵鐙」の解釈について問題とされる。「さすが」を鐙に取り付ける留め金具である「刺鉄」として、『愚見抄^{註10}』以降、「さすがに」、「かくる」を「あぶみ」の縁語とする説、「逢ふ身」をかける説^{註13}などがあつた。長井彰は「あぶみ」は「足踏み」の意であり、鞍の両側で乗り手の足を支える馬具である。「あぶみ」は、また、「逢ふ身」を掛け、武蔵国の女と「逢ふ身」となったことを知らせるものである。左右二つに分かれる「鐙」の意と重ねると、武蔵の国の女と「京なる女」とに、それぞれ心の引かれる男の気持ちちが込められていよう^{註14}という。山本登朗は「京の女性を心に「かけて思ふ」、すなはち今でも心に「かけ」て恋しく思っているということとをそれとなく暗示するために足を「かけ」るものである「あぶみ」を持ち出したものとする理解が、もつとも妥当ではないか¹³」と述べる。

信友の随筆『比古婆衣^{註15}』に、この第十三段の「武蔵鐙」について「馬の胸さきをさし廻してものする足踏なるべし」とし、「名義むさしとは胸さしの約まれる言なり」としている。『伊勢物語古意^{註16}』には、『古今和歌六帖』第五「ふみだがへ」二八

五七に「さだめなくあまたにかくるむさしあぶみか」のればかふみはたがふる」の歌を指摘している。武蔵鐙の形状から踏み違ふることをいう。第十三段との関連を考えると、「踏み」と「文」をかけるのと解したくなるが、深読みだろう。『古今和歌六帖』との前後関係は未だ謎のままであり、この歌がどれほど知られていなかも不明である。

「武蔵鐙」の実態について探り、理解しようとする論が多いが、もつと単純に捉えてみてはどうだろうか。「むさしあぶみ」、「武蔵鐙」という表記からでは意味を限定してしまう。まず、「むさしあぶみ」という「男」が書いたとおりでであろう濁音のない仮名だけの状態にして考えてみたい。

五、京なる女

最初に男が「むさしあぶみ」と書き送ったのは「京なる女のもの」とである。男は第九段の東下りの途中でも、京へ向かう修行者に「京に、その人の御もとにとて」と文を書くのである。ここでは「御」とあることに注目し、高貴な女性が想定され、その先には東下りの発端の事件として連想させられる二条後の姿が浮かぶ。ここでは「京なる女のもと」とあるように「御もと」ではない。

男を必ずしも業平と見る必要がないように、女も二条后として見る必要はない。

例えば、『伊勢物語』では、第六十九段で齋宮との恋が描かれ、伊勢を舞台とする段が続くが、これらは「二条后章段」と同じレベルで「齋宮章段」とは呼びがたい。第七十段は「狩の使よりかけけるに、大淀のわたりに宿りて、齋の宮のわらはべにいひかけける」、第七十一段は「伊勢の齋宮に、内の御使にてまゐれりければ、かの宮に、すぎごとひける女」、七十二段「伊勢の国なりける女」、七十三段「そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女」というように、相手が齋宮からずれていくのである。第七十四段で「女をいたう恨みて」と会えないことを恨み、第七十五段で「伊勢の国に率ていきてあらむ」といひければ」と「世にあふことかたき女」を伊勢へ誘う。第二百段と第四百段では尼になった齋宮が登場するが、齋宮との恋が描かれるのは第六十九段のみである。忠実に相手の女を齋宮からずらし、ぼかしていく。会いがたい女としての側面を残像として後段が引き継いでいる。

このような手法が二条后章段から東下り章段へ、また東下り章段から東国章段へというところでも使われているのではないだ

ろうか。つまり、二条后章段の後に続く東下り章段の第九段では「御もと」として高貴な女性を想定させ、二条後の影が色濃い。

しかし、第十三段では「京なる女のもと」である。「御」が外れ敬意が弱まるが、「京の女」という点では第九段の「御もと」と表現された女と共通する。繰り返すが、第十三段の「京なる女」は二条后と解したのではない。二条后からずらされ、ぼかされてきた先にいる「京なる女」なのである。

この女は「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書かれ、上書きに「むさしあふみ」とだけ書かれた文をもらい、男の状況を知る。「むさしあふみ」から「男」が「武蔵」にて「逢ふ身」となったことを察したのだろう。ここには、第九段で男が修行者に託した文に書かれた和歌「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり」に対応しているのではないか。駿河では「夢にも人にもあはぬ」と言っておきながら、男は武蔵で「逢ふ身」となった。

先に述べたように、「むさしあふみ」が詠まれた和歌はあるが、どれほど流通したかも不明である。「武蔵鏡」の特殊な形状から「踏み違ふる」を引き出す説もあるが、武蔵の国の馬具である「鏡」の形状について、「京なる女」が知り得るだろうか。鏡であるから「かける」という言葉くらいはでてくるだろう。「むさ

しあふみ」とのみ上書きにある文、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と三十一文字の和歌にまとめ上げることでもできないくらの男の困惑を、単純に女は「武蔵逢ふ身」の意味で受け取ったのだろう。その解釈の布石として、駿河から贈られた「夢にも人にもあはぬなりけり」が置かれている。

もちろん、この駿河から贈られた和歌を受け取った人物として「京なる女」を特定することもない。ここでの女に求められるのは、教養と物わがりの良さである。というのも、続く第十四段では物わがりの悪い陸奥の国の女が登場するからである。

第十四段は次のようにある。

むかし、男、陸奥の国にすずるにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおほえけむ、せちに思へる心なむありける。さてかの女、

なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、いきて寝にけり。夜ぶかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、京へなんまかるとて、

栗原のあねは(注1)の松の人ならばみやこのつとにいざといはましを。

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

武蔵から陸奥へ舞台を移した男は、「そこなる女」からみやびとはかけ離れた和歌を受け取る。男を「京の人」として見る女には、雅に対する難という構図が露骨に表れている。第十三段の「むさしあふみ」という言葉から男の状態を察した「京なる女」と、第十四段では鳥が鳴いたと嘯き去る男の言葉を信じ、「栗原のあねはの松の人ならば」と人並みの女なら京の土産に誘ったのにと、男の和歌の意味を勘違いして喜ぶ女は対称的である。

男の文の「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」、女の和歌の「問はぬもつらし問ふもうるさし」、男の和歌の「問へばいふ問はねば恨む」の言葉の呼応関係についても多くの指摘がある。久保朝孝は互いの〈心〉を京に残しながら〈身〉が武蔵にある男の乖離を障害として〈身〉と〈心〉意識を指摘する(注2)。第九段でも「身をえうなきものに思ひなして」とあることから、〈心〉を京へ残して〈身〉を東へと向かわせたことがわかる。

第十五段で東国章段は一旦終わる。第十四段で「京へなんまか
る」と言っていることから、東国には遂に「すむべき国」は見つ
けられず、京へ帰るようである。しかし、第十五段も陸奥の国を
舞台とする。

むかし、陸奥の国にて、なでふことなき人の妻に通ひけるに、
あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、
しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべ
く

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を
見ては、いかがはせむは。

「なでふことなき人の妻」という平凡な男の人妻に通う男は、
そんな男の妻になっているのは不思議な女だを見て、「心のおく」
が見たいという和歌を贈り、女は「かぎりなくめでたし」と思う。
しかし、女の「さるさがなきえびす心」をみてどうするのだとい
う段である。

これも〈心〉を京に残して〈身〉だけ東国に彷徨う男と見るの
ならば、女の〈心〉を見たところで、男の〈心〉は京にあるので
はないかということになるか。塚原鉄雄が「栗原章段（第一四

段）では、女性が、男性を理解しえない。理解しえないだけでは
なく、理解しえないことをも理解しえない。そして、忍山章段（第
一五段）では、男性が、女性を理解しえないのである（註10）」とい
うようにここにも対応関係がみられる。

さて、ここまで東国章段をみてきた。東国章段の中であまり他
の段との関連性が指摘されない第十一段について最後に触れた
い。第十一段は次のような段である。

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりい
ひおこせける。

忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふ
まで

位置的には東国章段に置かれながら、「あづまへゆきけるに」、
「道よりいひおこせける」と東下り途中のような状態で、「友だ
ちども」に和歌を詠むという短い段である。東下りは「友とする
人、ひとりふたり」（第八段）、「もとより友とする人、ひとり
ふたり」（第九段）とあるように「友」との旅であったが、京へ
残してきた「友だちども」に対する思いが詠まれる。

同歌が『拾遺和歌集』にある。「たちばなのただもどが人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとて、この女のもとにいひつかはしける」と「たちばなのただもど」が女に詠んだ歌となっており、ここでは恋愛歌であった。雨海博洋は「橘忠幹」が天曆九年（九五五年）に駿河介在任中に賊によって殺された人物であることから、駿河の国という東国との関連、悲惨な事件の被害者となったことで、この歌があわれなものとして「歌語り化」したものとみている^(注20)。

この段は「友だちども」に和歌を「いひおこ」すのであるが、東から京の人へ文を送るといふ点で第十三段と共通する。友への関係が恋愛関係に似たものとして描かれることについては、第二部第二章で述べるが、ここでも「めぐりあふ」までと「あふ」といふ言葉が使われている。遠く離れて逢えない状態であるため、再び逢うまで自分のことを忘れないで欲しいと思うことは自然であろうが、第九段、第十一段と京へ送る文にはすべて「あふ」といふ言葉が含まれている。第九段では夢にも現実にも会えないことを嘆き、第十一段では再会を前提とした「あふ」だが、第十一段の「むさしあふみ」を「逢ふ身」と解する流れはここにもある。

加えていうならば、東国章段としての括りでみると、第十一段は確かに浮いているように感じる。「友だちども」に和歌を詠みおこすだけの短い段である。しかし、第十段で順調に母親の賛成を得て進んでいた人のむすめとの恋が、第十一段を挟んで第十二段になると、娘を盗み武蔵野へ逃げる展開へとなっている。ここにも二条后章段と似た構図がみえる。第五段を参照したい。

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで、わらはべの踏みあけたるついひぢの崩れより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすゑて守らせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝な
なむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。
二条の后に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄人た
ちの守らせたまひけるとぞ。

忍んで通っていた築地の崩れに関守をおかれた男が和歌を詠み、その和歌の効果によって「あるじ許してけり」と一旦は許される。先に引いた第六段では、一転して女を盗み、芥川まで逃げることになる。東国章段では、第十段と第十二段の間に、第十一段がおかれることにより、繰り返して述べてきたような二条后からのずらしとぼかしが行われているのではないだろうか。つまり、第五段と第六段は相手の女が〈後人注〉により、二条后と特定される。女との関係を一旦は許されるものの、女を盗み出そうとし失敗する第十段と第十二段は間に第十一段を挟むことで、「母なむ藤原なりける」女を盗んだという女を固定化しないはずらしが行われる。そして、京にいる友だちへ自分を忘れないでほしいと詠む第十一段は、第十三段への「京の女」への手紙の布石でもある。

(注2)

六、おわりに

第十三段の「むさしあふみ」が第九段で詠まれた「駿河なるうつ山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり」に対応しているのではないかと指摘した。二条后章段／東下り章段／東国章段というように、章段に区切った範囲で読まれることが多いが、

前後の段だけではなく作品全体を見通した形で読むと、対応・比較・反転した表現から他の段との関係がみえてくる。

今回は、第百十五段・第百十六段を含めた考察まで至らなかったが、「陸奥」には初段で引かれた「みちのくのしのぶもぢずりたれゆるに乱れそめにしわれならなくに」と源融の歌がある。第八十一段では、その源融こと「左のおほいまうちぎみ」邸で「かたる翁」が「陸奥の国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たるところなかりけり。」と「陸奥の国」を共有した塩竈を見出す段がある。

『伊勢物語』は成立の問題によって分断された読みがされてきた作品である。しかし、細かく分断するのではなく、初冠から終焉までを描いた作品全体の中で配列の意図を汲みとり、今一度、他段と連繫させた関係に目を向けることで、『伊勢物語』は段内だけでは完結しない新しい構図をみせてくるのである。

【注】

(注1) 天福本第十七段のみ「年ごろおとづれざりける人の」で始まる。池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究(校本篇)』によると、

古本系承久本・大島本系神宮文庫本・塗籠本系不忍文庫本・群書類従本・丹表紙本には「昔としころ」で始まる本もある。

(注2) 雨海博洋『伊勢物語』における「東国物語」の形成基盤(「平安朝文学研究」2巻6号、一九六八年十二月)。

(注3) 堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系 竹取物語・伊勢物語』(岩波書店、一九九七年) 付録の「伊勢物語闕疑抄」(細川幽齋著 文禄五年成立、寛永十九年版本五巻二冊)の翻刻。

(注4) 「いとどしく過ぎゆくかた」の系譜―『伊勢物語』七段から『源氏物語』へ(『古代中世文学論考13』新典社、二〇〇五年二月)。

(注5) 小林正明が「東国の旅程で「なれにし妻」「夢にも人」「わが思ふ人」「をちこち人」など詠出する昔男には「あづまはや」と絶唱したヤマトタケルの神話的原型が残響しているかもしれない。」としている。(『伊勢物語を読む』鈴木日出男編「別冊

国文学 竹取物語伊勢物語必携」學燈社、一九八八年)。

(注6) 『伊勢物語の研究(研究篇)』(明治書院、一九六八年)や『伊勢物語の新研究』(明治書院、二〇〇五年)など。

(注7) 『伊勢物語』の和歌と類似が多く指摘される『古今和歌六帖』第二(山)八三八に「するがなるうつのを山のうつつにも夢にもみぬに人のこひしき」、第一(ゆき)六八七に「時しらぬ山はふじのねいつとてかかこまだらに雪のふるらむ」がある。平井卓郎『古今和歌六帖の研究』(パルトス社、一九九一年、第九章)では、「古今六帖の歌の中には伊勢物語と直接間接に関係あるものが七十一首も存する」とし、「A六帖の歌が伊勢物語から採られたと思はれるものB伊勢物語と六帖の歌とが系統を異にすると思はれるものC伊勢物語の歌と六帖の歌とが無関係であると思はれるものD六帖の歌が年代的にみて最も後になると思はれるもの」と四分類する。この歌についてのは分類例にない。

(注8) 河地修「伊勢物語・東下りの生成」(『伊勢物語論集―成立論・作品論』竹林舎、二〇〇三年)。

(注9) 佐藤裕子「伊勢物語「東国物語」の配列意識」(『国文学研究』78号、一九八二年十月)。

(注10) 渡辺泰宏「伊勢物語章段群論」(『國文學 解釈と教材の研究』第43巻2号、一九八八年二月)。

(注11) 久松潜一監修・築島裕(他)編集『契沖全集 第九巻』岩波書店、一九七四年。「きこゆればはつかしきこえねはくるしと

は、さきにたのむの雁とよめる一段の心、人のむことなれりとみゆれば、京にちきり置きし人に、さる事ある身なれば、音つれ聞えさせむも、思はむずる所はづかしく、さりとして音つれさらんも、くるしとなり。」

(注12) 塙保己一編『続群書類従 第十八輯上』続群書類従完成会、一九二四年。

(注13) 渡辺実『新潮日本古典集成 伊勢物語』(新潮社、一九七六年)には「今もあなた(京の女)をかけて頼む」の意と解く人もあるが、それだと「燈↓懸ける↓かけて頼む」というふう縁語を挟む迂遠さがあり、直接の掛詞「逢ふ」を考えるのが自然だろう」とする。山本登朗「東下り」の物語・その二十三段その他をめぐって」(『伊勢物語論 文体・主題・享受』笠間書院、二〇〇一年)によると、『堯恵加注承久三年本校合伊勢物語』以来、「聞ゆれば恥づかし」を第十段でむこがねとなつたことを指す解釈とあわせて示されたとある。

(注14) 『伊勢物語』一三段における都鄙対立―武藏燈の男の自己分裂」(『解釈』37巻8号、一九九一年八月)。

(注15) 林陸朗編集・校訂『比古婆衣 上』巻七、現代思潮社、一九八二年。

(注16) 『賀茂真淵全集 第16巻』続群書類従完成会、一九八一年。

(注17) 底本は「あれは」で「ね」の旁書がある。通常、武田本をもつて校訂される。

(注18) 『伊勢物語』第二十四段考―殉愛とみやび返し」(『淑徳国文』26号、一九八四年十二月)。

(注19) 「勢語東国と勢語陸奥」(『伊勢物語の章段構成』新典社、一九八八年)。

(注20) 前掲。雨海博洋『伊勢物語』における「東国物語」の形成基盤」(『平安朝文学研究』2巻6号、一九六八年十二月)。

(注21) さらに今後の配列に目を向けるならば、第十段から第十五段までの東国章段の後におかれた第十六段では「紀の有常」と「ねむごろにあひ語らひける」仲である「男」の「友だち」関係が描かれることを第二部第二章で述べる。恋愛章段の間に置かれ、第三十八段では戯れに疑似恋愛歌を贈答しあうような「友だち」の有常登場の伏線ともなっている。

第三章 第九段 「みやこどり」

一、はじめに

東下り章段の最後は『伊勢物語』中でも長い第九段であり、そのクライマックスは、「みやこどり」の登場場面だといえよう。後世にも多く和歌や俳諧に詠まれる題材の鳥であるが、実のところ実態はつきりしない。だが、実態解明ではなく、本論では「名に負う」という表現に注目し、『伊勢物語』における「みやこどり」について考察する。まず、作品内における第九段の位置を確認したい。

二、東下りの旅程

まず、第一部第二章で述べた「男」が東下りをした理由をふまえて、第七、八の「東下り章段」から確認していきたい。

都に戻れぬ事情を抱えた「男」が行く第七段と第八段の旅程と内容である。都を出た「男」たちは「伊勢・尾張のあはひの海づら」（第七段）という伊勢の国と尾張の国の国境を行き、「信濃の国、浅間の嶽」（第八段）を見る。この地が選択されていることについて、長谷川政春は、以下のように述べている。

伊勢の国は畿外であるが、伊勢神宮をもつ特別の地であつ

てみれば、ウチとソトの意識ではこの東下りのモチーフは、都を出立し、畿内を超え、さらに東国の橋・峠・河を越えていく、その境界性にあると言えるのではないか。どの場面も

境界が選ばれ、境界が強調され、境界が意識されている。一種の異郷にも似た東国の時空間は、反都的でなければ意味がない。だから、京にはない「海」が選ばれ、次で「山」であるが、普通の山では九段でも語られているように、京にも比叡山があつて、少しも反都的ではないゆえに、山のうちでも異様な山である活火山の浅間山が選ばれている。この反都的な場が選ばれ、境界が場面として選ばれていることには、東下りが単なる地理上の距離（第八段は地理上から見れば、東下りのコースからはずれている）、都からの隔たりを意味するのではなく、いわば意識上の距離を意味している。^(注1)

「男」が東下りの過程で和歌を詠む地点は、境界である。都からどれほど離れてしまったかということ、都では見ない風景を確認するように選ばれた地なのである。

渡辺実が『伊勢物語』の「みやび」の基調は語源通りに「都振り」であり、その裏側に「常に田舎に対する軽蔑と否定があつた^(注2)」と述べているように、東下りに続き、東国を舞台としたいわゆる東国章段（第一〇～一五段）でこの意識は顕著に表れてい

るが、東へ下るほどに、遠く離れた都を懐古し、望郷の念にかられるだけではなく、自分たちが「都人」であることが浮き彫りになるのである。

「都あるいは都に残してきた人を思い、都から離れてある事を悲しむ心情こそが、「東下り」を一貫して流れている基調であるように思われる」という山本登朗は「彼が離れてゆかねばならない現実の京と、彼によって体现されているが如き理念上の「都」との間には、かくして微妙な相異が見られざるを得ない。^(注①)」としている。つまり、東下りの空間とは都と東国(鄙)を対比あるいは対立させる構造なのだが、その空間で「都」を代表する「男」は都には居られず、都を出てきた人物である。「男」が懐古するのはある種、理想化された「都」であり、現実の京とは微妙な相違が生じるのである。

こうした場面選択意識をもって描かれていることを踏まえて、第九段を見てみたい。第九段は、「東下り章段」の中心核となる最後の段であり、四場面によって構成されている。

むかし、男ありけり。その男、A 身をえうなきものに思ひ
なして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめに
てゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけ

り。道しれる人もなくて、まどひいきけり。

①三河の国八橋といふ所にいたりぬ。B そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。C その沢のほとりの木のかげにおりゐて、かれないひ食ひけり。C その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつなれにしつましあればはるるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、D みな人、かれないひの上に涙おとしてほと
びにけり。

②ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蕪かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることがと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり

③富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれ

り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほとして、なりは塩尻のやうになむありける。

④なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国のなかに E いと大きな河ありけり。それをすみた河といふ。 F その河のほとりにむれあて、思ひやれば、 G がぎりなく遠くも来にけるかな。とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、H 鳴の大きさを、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こそりて泣きにけり。

第九段は以下のような四場面の構成となっていることが分かる。

① 三河の国でかきつばたの歌を詠む。

② 駿河の国で修行者と会い、歌を託す。

③ 駿河の国で富士山の歌を詠む。

④ 武蔵の国と下総の国境にある隅田川で都鳥を見て歌を詠む。

第七・八段で述べられた東下りの理由とは少し異なり、「身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり」という。また、第九段は第七・八段とは異なり、『古今和歌集』の業平歌を①と④に使って構成されている。②・③の和歌の他出及び類歌は『古今和歌六帖』に見られるが、成立時期不詳の歌集であり、『伊勢物語』との前後関係もはっきりしない。第七段の和歌は『後撰和歌集』巻第一九・羈旅歌・一三五二番に、第八段の歌はより時代の下った『新古今和歌集』巻第十・羈旅歌・九〇三番に業平を詠人として収載されているが、『伊勢物語』の成立にも大きく関わる『古今和歌集』の業平歌である意味は大きい。

第九段にある「かきつばた」歌と「みやこどり」の歌は並んで『古今和歌集』巻第九（羈旅歌）四一〇・四一一に収められている。

あづまの方へ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て、木のかげにおりゐて、かきつばたといふいつものをくのかしらにすゑてたびの心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつなれにしましあればはるるきぬるたびをしぞ思ふ

四一一

むさしのくにとしもつふさのくにとの中にあるすみだ河のほとりにいたりてみやこのいとこひしうおぼえければ、しばし河のほとりにおりゐて、思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなと思ひわびてながめをるに、わたしもりはや舟にのれ日くれぬといひければ舟にのりてわたらむとするに、みな人ものわびしくて京におもふ人なくしもあらず、さるをりにしろきとりのはしとあしとあかき河のほとりにあそびけり、京には見えぬとりなりければみな人見しらず、わたしもりにこれはなにとりぞと

ひければ、これなむみやこどりといひけるをききてよめる

名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなしやと

『古今和歌集』の四一〇・四一一番歌の詞書と『伊勢物語』第九段の性質の差について、河地修が、「第九段の物語本文には、流離漂泊の旅という色彩が濃厚であるのに対し、『古今集』の詞書にはそういった要素は皆無である」と述べている通り、『古今和歌集』の詞書は、東に下る理由に触れていない。第九段本文にA～Dまでの破線を付した箇所が『古今和歌集』四一〇番歌詞書との違いであり、E～Iまでの破線を服した箇所は四一一番歌詞書との違いであるが、第九段のこの箇所をわざわざ削除して、四一〇番歌の詞書を書いたとは考えにくく、四一〇・四一一番歌を題材に第九段は作られたと考えられ、②・③の場面は旅程を繋ぐために加えられたという流れが自然である。

また、『古今和歌集』では、詠人を在原業平としているため、『伊勢物語』の「男」の東下りの旅も業平が実際に行ったのかどうかわからない真偽が古来問われるが、神田龍身が「おそらく、「八橋」や「隅田川」で歌を詠んだとする設定にしても、現実に還元

すれば、塩釜の景を庭園にした源融邸のようなどころでの「見立て」の旅だったのではあるまいか。^(註5)と推理しているように、それは大した問題ではない。

東下り章段での歌は、都から離れた境界において都との差異を目にして都を想う和歌を詠むことに主眼を置き、場面が選択されているのであって、実際にその場にいたかどうかは重要ではない。徐々に都から離れていく様子が地名によって、またその風景を描くことによって表現されればいいのであって、実際にその風景を見ていなくても構わないのである。

実在した人物が登場する場合、その出来事が事実なのか否かと気になってしまうものであるが、『伊勢物語』という作品空間内で、「男」は在原業平の歌を詠むことで業平のイメージを負い、読者の想像力を掻き立てることができれば、在原業平と二条后との悲恋は実際にはなくてもよいのである。

では、そうした物語空間に登場する「みやこどり」はどのような役目を負っているのだろうか。

三、「みやこどり」の正体

「白き鳥の、はしとあしと赤き、嶋の大ききなる、水の上遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず」と描

写される「みやこどり」は、呼子鳥・稻背鳥と並び日本史上の三大謎の鳥であるという^(註6)。

「みやこどり」の実態については古来、以下の説がある。

- a チドリ科(チドリ目) ミヤコドリ (Oystercatcher)
- b カモメ科(チドリ目) ユリカモメ (Black-headed Gull)
- c 未詳

aの説は、北野鞠塙(宝暦二年(一七六二)〜天保二年(一八三一))が『都鳥考^(註7)』で挙げており、現在「ミヤコドリ」と呼ばれている鳥であるが、全体が黒い鳥であり、「白き鳥」に合致しない。鞠塙は「しろき」の「し」を「くろき」の「く」の誤写だとする説を唱える。後述するが、ここは「しろき」であるべきである。

熊谷三郎^(註8)は、bのユリカモメ説を唱え、「イリエカモメ」↓「エリカモメ」↓「ユリカモメ」と変化したといい、「江鷗」の表記が適当であるとした。

鳥の姿について「白き鳥の、はしとあしと赤き、嶋の大ききなる」と説明されているおり、この説明の仕方は富士山を「ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける」と表現することに似る。どちらも富士山や「みやこどり」を見たことがない者たちへ、既知のもの

(比叡山や嶋)に喩えて説明しており、これに従い、現在は圧倒的にbのユリカモメ説が有力であるが、いくつか問題点がある。

第一に、この男たち一行が隅田川で「みやこどり」を見たのは、

夏であると考えられる。この前の場面③で富士を見た季節が「五月のつごもり」とあるからだ。渡り鳥であるユリカモメが日本に渡ってくるのは、冬であり現在の九月くらいにならないと見られないはずである。第二に、もし、夏にいたとしても、ユリカモメは夏羽が頭の部分が黒くなる鳥であり、「白き鳥」という表現が適切かどうかという別の問題が出てくるのだ。

「京に見えぬ鳥」であるため、生態がよくわかっていないのだとして詮索しない論^(注9)もあるが、『八雲御抄^(注10)』に「すみたかはならでもたゝ京近川にも有白鳥のはしとあしのあかきなり」とある。現在の京にもユリカモメは姿を見せるが、賀茂川に姿を見せ始めたのは一九七四年以降^(注11)という。

c説の小松英雄は「京の最上流女性のイメージと重ね合わせて創られた虚構の鳥^(注12)」としている。

また、『古今和歌集』四一番歌や『伊勢物語』第九段以前に、『万葉集』巻第二十の伴家持が読んだとされる四四六二番歌にも「みやこどり」は詠まれている。

布奈芸保布^{フナギホフ} 保利江乃可波乃^{ハリエノカハノ} 美奈伎波尔^{ミナキハニ} 伎為都都奈久波^{キキツツナクハ}

舟競ふ 堀江の川の 水際に 来居つつ鳴くは
都鳥かも

舟が先を競って上る堀江の川の水際に来てとまって鳴くのは都鳥であろうか、という歌であるが、「みやこどり」をよく知らない様子であり、この「都鳥」も、どの鳥を指すか定かではない。

この「みやこどり」登場場面に漢詩文との関係を論じたものに、菅野礼行は、『列子』にある話^(注13)から「かもめは、最もふさわしい鳥であった^(注14)」とし、上野理は、「渡守」を「漁父辞」の屈原に対する漁父と考へ^(注15)、渡辺秀夫も「世に数えられぬ無用者、官人としての挫折をあえて容認し、東国へ流離する悲恋の涙もろき男に、漢文学系の知識層に幅広く馴染んださすらいの型、濁世に孤絶する悲憤慷慨の廉潔の流浪人、屈原の姿をとり合わせるところに、一段の面白味、作者の妙手をみるべきであろうか^(注16)」とし、坂本信道も「屈原の流浪を鄙との対比によって相対化する漁父の役割を、『伊勢物語』では修行者と渡し守が担う^(注17)」^(注18)というように漁父辞の投影は支持されている。

このように、「みやこどり」の実態を考察し、典拠となった漢詩文を見ることも重要であるが、今一度『伊勢物語』第九段に立ち戻り、この場面におけるみやこどりについて考えてみたい。こ

ここで最も重要なのは、鳥の名前が「みやこどり」であったことという点である。

四、「名に負ふ」ということ

「名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」、東下りの最後を締めくくるこの歌の解釈は分かれている。「みやこ」という名を持つているなら、みやこ鳥よ、さあおまえにたずねよう。私の愛する人はすこやかに暮らしているかどうかと。(註18)「という現代語訳が通例であるが、竹下教馬は「言問ふ」という動詞には「聞く」とか「質問する」とかいう意味はない(註19)と言い、「ものを言う」「話をする」「呼びかける」といった意味が正しいという。石田穰二も「いざこととはむ」は、「さあ、皆、話しかけてみようではないか」ということとで、別に都鳥にその答えを期待しているわけではない。「都を名に負うているならば、都のことも知っているであろうから、さあ聞いてみよう」という従来の通説とは大きな逕庭を生じ、通説が楽天的ならば、この解は、悲痛な響きを聞き取ることになろう。(註20)「としている。

松田喜好が、第八段の浅間嶽の煙を擬人化と捉え、「都人である」と「を」との一行はこの田舎の信濃の国では実に目立つ存在だ

と捉え、——煙が目立ち過ぎて「をちこち人」に咎められているように、都人である我々もきつと信濃の国の人達から咎められるに違いない——といった解釈を考えてもよいのではないか(註21)と述べているが、第七段でも「うらやましくもかへる浪かな」と打ち返す浪を京に帰れぬ我が身と比較して羨ましいというには同じく擬人化の発想が見えられ、第九段でも「みやこ」という名を持つているだけで都のことを知るはずもない鳥に聞くという同様の発想と言えよう。

そもそも、「みやこどり」の語源は、『松屋筆記(註22)』にある「みなみやくと鳴くがゆゑにみやこ鳥」とする説、林麿臣の「容貌(註23)貴てやか鳥」説(註24)、があるが「みやこ」に本来「都」の意味はなかったようである。たまたま「都」という懐かしい地の〈音〉を持つ名をつけただけで、全く都には関係ない鳥なのだ。「みやこ」という名を持つているのならば、と言いながらも都を知るはずもないことを知ったうえで、さあ話しかけてみよう、というのである。

また、前章で述べたように、「すみ所もとむとて」(第八段)、「あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり」(第九段)と京を離れ、新たな居場所を求めた先は、結局、自分の妻を意味する「あづま」であった。都を離れば離れるほどに、自分の居場所はこ

こではないという思いと「吾妻」への思いが募る。

第七段では海の浪、第八段では山の煙、という共に立つものを擬人化して、帰ることを羨み、「思ひ」を立ち上らせることを見咎められるのではないかと詠むあたりにはおどけた鬱陶気も見られる。第九段では「八橋」の「水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ」という形状を珍しがり、そこで咲いていたかきつばたを折句にして都に残してきた「つま」への想いを吐露する。「みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり」と泣く表現は「みやこどり」歌後の「船こぞりて泣きにけり」に共通するが、乾飯が涙でふやけるといふ諧謔性を含んでおり、第七・八段からのおどけた流れを受けている。

駿河の国で出会った修行者は第七段で詠んだ「うらやましくも」京へ帰る人であった。そして、富士山については、『竹取物語』にも登場し、かなわぬ恋の象徴的な山であるが、河地修が「ここでは、歌枕としてのこの語のイメージにはいっさい触れようとせず、ひたすら実在の「富士山」の描写に終始しようとする^(注24)」と指摘しているように、浅間嶽で詠まれたような「思ひ」がくすぶる煙を立てる山ではなく、夏であっても冠雪した冬のような光景を見せる山を詠んでいる。「時しらぬ山」もまた擬人法だと言えよう。

そして、「すみだ河」で「みやこどり」を見る。この「すみだ河」には「いと大きな河」という説明しかなされないが、先に引用したように「すむべき国もとめ」た先の「すみだ河」という論があるが、「すみだ河」という名も負わされているものがあるのではないか。

『類聚三代格^(注25)』承和二年(八三五)六月二十九日の「太政官符」には「住田川」とあり、第九段で船に乗る渡し場をさすとしてある^(注26)。「すみだ河」の名は、澄みたる川、あるいは川の中州にあった田園から洲田とよばれた説があり、「隅田川」「墨田川」「角太川」「角田川」など表記されたが、江戸末期に「隅田」の表記と「すみだ」の発音に統一され、明治以降に定着したとい^(注27)う。

『伊勢物語』の諸本は仮名で書かれているが、すべて漢字で書かれた「真名本」にのみ「墨田河」と表記されている^(注28)。「すみだ河」は「住み」以外のイメージも喚起しているとしたら、武蔵の国と下つ総の国境であることから国の「隅」であること、そして黒い「墨」のイメージである。

「みやこどり」が、「白き鳥」であることは、黒いはずの「墨田河」にいてもなお、白く、「はしとあしと赤き」という黒に染まらぬ鳥であることが強調されているのではないか。

そして、「その河のほとりにむれゐて」とすみだ河に群れる「都鳥」たちは、八橋で「その沢のほとりの木のかげにおりゐて」や、「船こぞりて泣きにけり」と行動を共にする「男」たちの姿が投影されているとも考えられる。東下りの先に見た「都鳥」は「都人」たる自分たちの姿だったのだ。「すみだ河」に住んでいても、「都鳥」は東という地においてもなお染まることなく白いままである。

「みやこ」と聞いて「男」たちが思い浮かべるのはただ一つ、愛しい人を残してきた「都」である。その「みやこ」という名を負う鳥に、知るはずもないと思いつながら都にいる愛しい人の無事を問うてしまう切なさと同時に、決して都以外には住むこともなじめむこともできぬことを「男」は思い知るのである。

五、おわりに

「みやこどり」の実態が何にせよ、この場面で重要であるのは「みやこ」という名を持つ白い鳥なのだ。「男」が在原業平であり、実際に東下りをしたのか否かという事実確認がここでは重要ではなく、「男」は在原業平のイメージを負う人物であることが重要なのである。

第三〜六段までの二条后章段の悲恋を経て、京を離れ東に下る

第七〜九段を考察した。東下り章段の最後に登場する「みやこどり」の存在は、「男」の都への絶ち難い想いを表出し、いくら自分の住むべき国を求め、居場所を求めても定住しえないことを浮き彫りにした。

「みやこどり」という名前ばかりではなく、その名を負う「白き鳥」が「すみだがわ」という名前の川にいる、「男」が東国に住めないことは東国章段以前に暗示されていたのだ。

【注】

(注1) 「求心性・変性・歌物語—伊勢物語の方法と構造—」(『物語史の風景—伊勢物語・源氏物語とその展開—』(若草書房、一九七七年)。

(注2) 『新潮日本古典集成 伊勢物語』新潮社、一九七六年)。

(注3) 「東下り」の物語・その一—浅間と富士—(『伊勢物語論 文体・主題・享受』笠間書院、二〇〇一年)。

(注4) 『伊勢物語』・東下りの生成(『伊勢物語論集—成立論・作品論—』竹林舎、二〇〇三年)。

(注5) 「貫之の『伊勢物語』体験」(『ミネルヴァ日本評伝選 紀貫之』ミネルヴァ書房、二〇〇九年)。

(注6) 松田道生『平凡社新書171大江戸花鳥風月名所めぐり』(平凡社、二〇〇三年)。

(注7) 早稲田図書館蔵。玉山堂、文化二年(二八一四)跋。

(注8) 『都鳥新考』(亜細亜書房、一九四四年)。

(注9) 森野宗明『放送ライブラリー24 伊勢物語の世界』日本放送出版会、一九七八年)。

(注10) 片桐洋一編『八雲御抄の研究 枝葉部・言語部』(和泉書院、一九九二年)。

(注11) 須川恒監修「ユリカモメ保護基金リーフレット」。

(注12) 『伊勢物語の表現を掘り起こす』(笠間書院、二〇一〇年)。

(注13) 小林信明著『新釈漢文大系22 列子』(明治書院、一九六七年)。
第十一章を引く。

海上之人、有好瀝鳥者。每旦之海上、從瀝鳥遊。鷗鳥之至者、百住而不止。

其父曰、吾聞、瀝鳥皆從汝遊。汝取來。吾玩之。明日之海上、瀝鳥舞而不下也。

故曰、至言去言、至為無為。齊智之所知、則淺矣。

内容は、浜辺に住む男にかもめが好きな人がおり、毎朝かもめと遊び戯れていた。鷗の数は百以上であった。ある日、父がかもめをつかまえてきてくれ、おもちゃにしたいのだからと言った。翌日、浜辺に出てみると舞い上がったまま下りてはこなかった、かもめは人の心を読んでしまったのだという話である。

(注14) 『伊勢物語』東下りの段と『列子』(『国語と国文学』、一九八九年七月)。

(注15) 「伊勢物語「あづまくだり」考」(『文芸と批評』、一九六八年七月)。

(注16) 『伊勢物語と漢詩文』(『一冊の講座伊勢物語』有精堂、一九八三年)。

(注17) 「さすらう官人たちの系譜―屈原・業平・貫之―」(『中古文学』、二〇〇六年)。

(注18) 福井貞助校注訳『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九四年)。

(注19) 「いざよ」と問はむ都鳥―伊勢物語の一考察2」(『学苑』、一九六三年五月)。

(注20) 『伊勢物語注釈稿』(竹林舎、二〇〇四年)。

(注21) 「東下り」関係章段」(雨海博洋・神作光一・中田武司編『歌語り・歌物語事典』(勉誠社、一九九七年)。

(注22) 小山田与清の書いた江戸後期の随筆。明治四一年(一九〇八)刊。松屋久重『国書刊行会刊行書 松屋筆記』(国書刊行会、一九〇八年)。

(注23) 林武臣編纂『日本語原学』(建設社、一九三二年)。

(注24) 『伊勢物語』の「東下り」に関する二、三の問題」(『伊勢物語論 文体・主題・享受』笠間書院、二〇〇一年)。

(注25) 黒板勝美・国史大系編修会編輯『新訂増補国史大系 類聚三代格』吉川弘文館、一九六五年)。

(注26) 『日本歴史地名大系第13巻 東京都の地名』(平凡社、二〇〇二年)。

(注27) 竹内誠編『東京の地名由来辞典』(東京堂出版、二〇〇六年)。
ちなみに、「隅」の字が当用漢字になかったため、区名は「墨田区」としたという。

(注28) 池田亀鑑著『伊勢物語に就きての研究 校本篇』(有精堂、一九五八年)。

第四章 第二十三段「けこ」

一、はじめに

第二十三段は、幼なじみの男女が結婚した後、「男」は他の女のもとに通うようになるが、妻の和歌によって自分を案じる思いに感動し、他の女に通うのをやめ元通りになる話である。

以下、第二十三段に登場する妻を「大和の女」、「男」が新しく通うようになった女を「高安の女」と呼ぶが、「男」が高安の女のもとに通わなくなった理由は「はじめこそ心にくもつくりけ、いまはうちとけて、てづからいゝがひとりて、けこのうつつは物にもりけるを見て、心うがりて、いかずなりにけり」とある。この「けこ」について現在多くの注釈書では「笥子」と漢字を当て、腕のことだとしているが、「家子」説もあり、近年再考を促す論考がみられる。

本章では、『伊勢物語』第二十三段が大和の女と高安の女という二人妻を比較する話であることに注目し、「家子」説を再考してみたい。

二、「笥子」説

第二十三段は以下の通り三場面に分けられる構成である。

A むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにい
で遊びけるをおとなになりにつければ、おとこも女もはぢか
はしてありけれど、おとこはこの女をこそえめとおもふ、女
はこのおとこをおもひつゝおやのあはすれども、きかでな
むありける。さて、このとなりのおとこのもとより、かくな
む、

① つゝあつあつにかけしまるがたけすぎにけらしな
いも見ざるまに

女、返し、

② くらべこしふりわけがみもかたすぎぬきみならずして
たれかあぐへき

などいひ〜いひて、つゝに本意のごとくあひにけり。

B さて年ごふるほどに、女、おやなく、たよりなくなるまに、
にもろともにいふかひなくてあらむやはとて、かうちの
くにたかやすのこほりに、いきかよふ所いできにけり。さ
りけれど、このもとの女、あしとおもへるけしきもなく、
いだしやりければ、おとこと心ありてかゝるにやあらむ
と思ひうたがひて、せんさいの中にかくれあて、かうちへ
いぬるかほにて見れば、この女いとようけさうじて、うち

ながめて、

③ 風ふけばおきつしら浪たつた山夜はにや君がひとりこ
ゆらむ

とよみけるを聞き、かぎりなくなしと思ひて、河内へも
いかずなりにけり。

C まれまれのたかやすに来て見れば、はじめこそ心にくも
つくりけれ、いまはうちとけて、てづからいみがひとりて、

けこのうつは物にもりけるを見て、心うがりて、いかずなり
にけり。さりければ、かの女、やまの方を見やりて、

④ 君があたり見つゝをくらむいこま山くもなかくしそ雨
はふるとも

といひて見いだすに、からうじて、やまと人「来む」といへ
り。よろこびてまつに、たび／＼過ぎぬれば、

⑤ 君こむといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬものこ
ひつゝぞふる

といひけれど、おとこすまずなりにけり。

幼なじみの男女が想い合つて結婚するA、「男」が高安の女の
元に通うようになるが、大和の女が詠む和歌を聞き、高安通いを
やめるといふB、高安の女の後日談であるCの場面に分けられる。

この段は、『古今和歌集』九九四番歌と左注^{注1}によるBを核と
して構成されているといえ^{注2}、『古今和歌集』にはなかった高
安の女を登場させた点が『伊勢物語』独自の展開である。

Bの最後で「河内へもいかずなりにけり」と締めくくるものの、
その後すぐに「まれまれのたかやすに来て見れば」と訪れてお
り、高安の女の様子を見て「心うがりて、いかずなりにけり」と
ある。高安の女からの和歌に対して、「からうじて、やまと人「来
む」といへり」とは伝えるものの、結局「おとこすまずなりにけ
り」と仲が途切れる。

大和の女の和歌で自分への思いを知った「男」が「河内へもい
かずなりにけり」と円満に終わつてもいいものの、高安の女との
歯切れの悪いともいえる後日談が語られるCの部分がつけられ
ているのはなぜなのか。

「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、てづか
らいみがひとりて、けこのうつは物にもりけるを見て、心うがり
て、いかずなりにけり」という高安の女の行為について「けこ」
をどう解釈するかによって、「男」が何を「心うがりて」と通わ
なくなつたのかも変わる。ちなみに、『伊勢物語』中で他に食べ
物が描かれるのは、第九段の「みな人、かれいひのうへになみだ
おとしてほとびにけり」という乾飯でこの第二十三段と合わせて

二例のみの特殊例^{註3}である。

まず、現在の注釈書で多く採られている「筍子」ではどうか。「筍子」は賀茂真淵の『伊勢物語古意』以降主流になった説である。「けこは、或説に家の子にて、家人奴婢の事といへるも理りなきにあらねど、古本に餛子と書、万葉にも、家であれば筍に盛る飲をともしれば、飯餛の器てふ意也けり子は餛わりこ餛子なりの子に同じく、小まきまはとうつはによそへいふ也」という解釈を受け継ぎ、藤井高尚の『伊勢物語新釈』（片桐洋一・山本登朗編『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第13巻、八木書店、二〇〇二年）で「けこ」は筍子にて飯もる器なり」としている。

現代の諸注釈でも、池田亀鑑『伊勢物語精講』（學燈社、一九五五年）、上坂信男『伊勢物語評解』（有精堂出版、一九六九年）、森野宗明『講談社文庫 伊勢物語』（講談社、一九七二年）、渡辺実校注『新潮日本古典集成 伊勢物語』（新潮社、一九七六年）、石田穰二訳注『角川文庫 伊勢物語』（角川書店、一九七九年）、福井貞助校注訳『新編日本古典文学全集 伊勢物語』（小学館、一九九四年）、秋山虔校注『新日本古典文学大系17 伊勢物語』（岩波書店、一九九七年）と多くがこの「筍子」説を採用している。

高安の女が自ら筍子に盛ることも「男」が不快に感じた理由については、高崎正秀は、「思ふに、この女は既に既婚者であり、

家刀自として他にも男があり、少くとも娘分ではなかつたことを暗示してゐるものと認めるより外はない」としている^{註4}。石田穰二は、「この箇所、女が手づから飯匙を執つて飯を盛つたのがなぜ男の不興を買つたのか、ややわかりにくい。食物を盛り分けるのはその家の主婦の権限であり、この女はまだ若く、母親がいたのであろう、それをさしおいて飯匙に手を出したのは、この女の食い意地の張つてゐることを示すのであろう^{註5}」というように、大和の女が「おやなく」とあつたことに対し、高安の女には描かれないが親の存在を背景に見ている。

では、この「けこ」を「家子」で読むとどうなるか。

三、「家子」説

「家子」は『竹取物語』のくらもちの皇子に出された難題である「蓬萊の玉の枝」を作つた工匠が愁訴する言葉に「しかるに、祿いまだ賜はらず。これを賜ひて、わろき家子に賜はせむ」とあるのが初出とされ^{註6}、第二十三段の家子説も筍子説よりも古くからある。

『書陵部本和歌知頭抄』「けことは、家のうちにさだまりたる人かずなり」、『愚見抄』「けこは家子也」、『闕疑抄』「けこのうつはもの、家子と書り」、『拾穂抄』「真名伊勢物語二餛子

之器とあり家子也」^(注7)と古注釈では、『古意』の筥子説以前は家子として解釈されていた^(注8)。

岡崎正継はけこ「餼子」の語誌(中田祝夫他編集『古語大辞典』小学館 一九八三年)で

伊勢物語の例は、一般には「け」を「筥」、「こ」を「籠」あるいは接尾語「子」と解して、飯を盛る器と解しているが、それだと、「けこのうつはもの」は飯を盛る器の器となり、不自然である。色葉字類抄の例は、「人倫」の部に「験者」と並べて載せられ、「家口(けこ)一家ノ者」也」と注せられている。類聚名義抄の餼も元来、食物を贈る意で、食器の意はない。食器をいう語は、たとえば黒川本色葉字類抄・雑物部に、「筥(食器也)ケ」とあるように、「け」であって「けこ」ではない。以上、いずれも一家眷属の(せん)者の意の「けこ(家子)」と見るのが自然で、食器としての「けこ」の存在は疑わしい。なお、第二例「ケコ」には共に平声単点がうたれ、清音である。

と「筥子」説に疑問を投げかけている。確かに、「筥子」が器の意味ならば、「けこにもる」で意味は通じるはずである。「けこのうつはもの」と表現されている点に注意すべきである^(注9)。

竹岡正夫は、「「けこ」(「けご」とも)は家族や家来・召使

と解するのが妥当。ここでは、女が、先の妻のごとく夫を偲ぶ歌を優雅に詠むどころか、一家眷属の者たちの食器に飯を盛り分けたりして、たまたま訪問して来ている夫など眼中にもなく、糠味噌女房にどっぷり浸かってしまっていたのである。これでは貴族の男ならずとも「心憂がりて」足も遠ざかるのも当然だ^(注10)」としている。所帯じみた行為を不快に感じたものとして捉えている。山本登朗は、古注釈やその影響を受けた絵画資料、中世小説「窓の教」を考察し、「男」がどこから高安の女を見ていたか、つまり垣間見をしたのか、高安の女の目の前にいたのか、という点と「けこ」は「筥子」か「家子」なのかという二点の疑問を提示した。これら四通りの組み合わせから、「男」は高安の女の目の前で一家眷属の「家子」の食器に飯を盛っていたという解釈を導き出した^(注11)。

原國人は『蒙求』の説話「孟光荊釵」や、それを基にしたと考えられる『唐物語』第四「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」と照らし合わせながら、「家子」説をとる^(注12)。早乙女利光も、『唐物語』を例に「高安の女は格式張った客用ではなく、親しい家族に使用すべき器に飯を盛って、男に差し出した」と解釈するが、その後、用例調査の結果この説を除外し、新たに家族を意味する「家口」説を唱え「高安の女は両親に飯を盛り分けていた」と考

察する(註13)。

このように、近年「家子」あるいは「家口」というように、「けこ」を「筥子」という器として解さない説が見直されている(註14)。
第二十三段は、この「家子」の意味で解釈すべきではないだろうか。

四、『大和物語』の場合

高安の女の登場理由には大和の女との対比が考えられる。二人の女の対比を顕著にみせるのは、同様の話を持つ『大和物語』第百四十九段である。

むかし、大和の国、葛城の郡にすむ男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、いけばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。かくにぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなくねたく心憂しと思ふを、しの

ぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね」といひければ、わがかく歩きするをねたまで、ことわざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。さて、いでていくと見えて、前裁の中心にかくれて、男や来ると、見れば、はしにいであて、月のいといみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、「人待つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風吹けば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとりこゆるらむ

とよみければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、龍田山こえていく道になむありける。かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる。見るにいと悲しくて、走りいでて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらにいかで、つとゐにけり。かくて月日おほく経て思ひけるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いといみじき

ことなりけるを、かくいかぬを、いかに思ふらむと思ひいでて、ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ、つつましく立てりけり。さてかいまめば、われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、手づから飯もりをりける。いとみじと思ひて、来にけるままに、いかずなりにけり。この男はおほきみなりけり。

大和の女を「顔かたちいと清らなり」と容姿を褒め、経済状況を理由に通い始めた高安の女について、明確に「富みたる女」と述べる。「男」が垣間見た大和の女は「かしらかいつりなどしてをり」と髪を梳かし、高安の女を垣間見ると「いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり」というみすぼらしい着物に大櫛を前髪に挿すという様子であった^(註15)。また、大和の女は「かなまりに水を入れて胸になむすゑたりける」と水を入れた金鉢を胸に当てると熱湯になるという「おもひ」を抱いていたことが分かるが、高安の女は「手づから飯もりをりける」と自らご飯を盛っていた。「かなまり」という金属の碗と飯を盛る器も対照的である。

『伊勢物語』第二十三段でも、Bの冒頭で「さて年ごろふるほ

どに、女、おやなく、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて」と大和の女の親が亡くなり、経済状況が厳しくなったことを理由に高安に通い始める。Bの最後では「河内へもいかずなりにけり」と円満にまとめながら、Cでは、「まれまれかのたかやすに来て見れば」と高安を訪れており、問題としている場面を見て「心うがりて、いかずなりにけり」という。しかし、高安の女の和歌に対し「やまと人「来む」といへり」と期待させる返答し、結局「おとこすまずなりにけり」と閉じる。高安の女の後日談であるCの「男」の態度は煮え切らないといえよう。

そもそも「男」は経済的な理由で高安の女の元へ通い始めたはずだ^(註16)。自分の身を案じてくれている大和の女を愛しいと見直したところで経済状況は変わらない。『伊勢物語』には、貧しく出家する妻に何も贈れない紀有常の第十六段や、貧しい夫の妻となった女が袍を洗う際に破ってしまう第四十一段がある。これらの段に登場する「男」は「ねむごろにあひかたらひけるともだち」(第十六段)や「あてなるおとこ」(第四十一段)として衣を提供する裕福な男である。貧富の対比が見られる段であるが、この第二十三段でも対比と経済状況が物語の展開に大きく作用している。

本論での「けこ」の解釈は「家子」、「男」は目の前で「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」行為を見たと解する。山本登朗の論と同様であるが、「男」が「心うがりて、いかずなりにけり」と感じた理由に、元々通う理由となっていた経済的な状態を加えたい。

つまり、「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」行為は高安の女の経済的な豊かさを象徴する光景であるが、家子の器にまで飯を分配することは、女主人として召使たちの食べる量を限定する吝嗇な一面をみせている(註17)。

また、「おとこ」と心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて」と大和の女に他の男の存在を疑って見ていたところ、一人で夫の身を案じる和歌を詠んだことに対し、高安の女は「家子」に囲まれている。高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」とは、卑俗というより吝嗇といえ、経済的豊かさを頼りに通っていた「男」にとってうちとけて化粧もしなくなつた点に加えて幻滅した瞬間だったのではないか。

その後、高安の女は「男」に二首和歌を贈っているが、なぜ「男」が来なくなつたのか、気付かないような歌である。

五、第二十三段の和歌

「男」が見ていないはずのところ化粧をする大和の女、「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて」とあることから、「男」の目の前で見られていることを承知の上で化粧をしなくなつたと読める高安の女を比較する構図を確認したい(註18)。大和の女が詠む③「かぜふけば」の歌は独詠であり、「男」が聞いていることを知らずに想いを歌にしている(註19)が、大和の女は男と会えぬことを嘆き、訪れを待っていることを歌にして贈る。

第二十三段は「男」の歌は最初に大和の女に求婚する①「つゝあつゝのあつゝにかけしまろがたけすぎにけらしな見ざるまに」のみである。その後、二人の女を見比べる「男」のいう「妹見ざる間に」は意味深である。この求婚を受ける大和の女も②「くらべこしふりわけがみもかたすぎぬきみならずしてたれかあぐべき」の「くらべこし」も「男」と比べた髪長さの指すが、大和の女は高安の女と比べられることになる。

「あつゝ」に関しては、坏美奈子が「幼年時代の《象徴》としての「井筒」と、ずっと「思ひつつ」ある、そのまま変わらずにある、「あつゝ」ある心のありさまを訴える言葉としての「あつゝ」が、この一首の求婚歌のケースではじめて結びついたのでは

ないか。「つつるつのみつつ」をめぐって、「つつつある」、「つつつるる」状態の「みつつ」が想起される可能性は十分ある(注20)。「と述べ、高安の女の歌にも④「君があたり見つゝをくらむいこま山くもなかくしそ雨はふるとも」、⑤「君こむといひし夜ごにすぎぬればたのまぬものこのひつゝぞふる」という表現があることについて、「互いに「思ひつつ」、遠い昔から変わらずに、離れている間も心の様は「みつつ」結ばれていた幼な恋の二人とは対照的で、またあわれだ」と述べている。 坏氏が指摘した「みつつ」の表現はAの部分とCの部分に対照的に見せている。

三部構成として場面が分けられる段であるが、和歌の表現は緊密に連繋し合っている。女を見比べることが「男」の和歌「妹見ざる間に(注21)」に象徴されているが、『万葉集』の類歌(注22)とされる高安の女の歌も④「見つつをらむ」と「男」がいる大和のあたりを見ようとするが雲や雨が障害となる。④「雨はふるとも」の雨は高安の女の涙の象徴であるが、他の和歌に見える水描写も事態の象徴と言えらるだろう。

例えば、③「沖つ白浪」の浪は大和の女と「男」の波瀾の関係であり、①「井筒」は留まっている水、つまり昔からずっとその場にいる大和の女を象徴しているといえまいか。⑤「雨」に象徴される高安の女の涙は流れ落ちるものであり流動性を示してい

ることと対照的である。

また、幼なじみの男女が結婚を描いているAには①「過ぎにけらしな」、②「過ぎぬ」と時間経過を表す「過ぐ」が使われているが、「男」が来ない時間を詠む高安の女のCには、④「雨はふるとも」、⑤「恋つつぞふる」というように、④では「降る」と「経る」が掛けられ、⑤には時間経過のみを表す「経」が使われている。

丁莉は「結局、高安の女が詠んだ二首の歌は「待つ女」をモチーフにする佳作で、「風吹けば」の歌に何ら遜色ないのである」とし、「つまり、高安の女に歌を詠ませたのは、二人の「待つ女」に対する徹底的な対比によって、大和の女の優雅で純粹な愛情をいつそう強調し、一種の理想的な女性像をここで作り上げようとしたからではないか(注23)」と述べる。

第二十三段の女二人は比べられながらも二人とも「待つ女」である。この対比構造は、続く第二十四段の「あらたまの年の三とせをまちわびてたよこよひこそにるまくらすれ」と詠む「待ちわぶる女」との対比へ繋がっていく。

六、おわりに

第二十三段の高安の女の「けこ」を中心に、大和の女と高安の

女の対比を考察した。賀茂真淵の『古意』以来「筍子」と器の意味でとられてきた「けこ」を今一度「家子」として捉え直した。

「男」が高安に通う理由となっていた経済的状态と絡めて、高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」行為について卑俗というより吝嗇を「心憂」く感じたのではないかと論じた。

また、最後になったが、第二十三段を中心に前後章段との関係も見ておきたい。第二十三段を元に創作された謡曲『井筒』は、「男」Ⅱ在原業平とし、女も誰かと特定する注を付ける中世注釈書の姿勢と同じく、「大和の女」ではなく、「かぜふけば」と詠んだ女を「有常の娘」とし「人待つ女」と名乗らせる。第十九段は、『古今和歌集』で業平が有常の娘に通っていたとする詞書をもつ贈答歌で構成されている。第二十段は「やまとにある女」が「いつのまにうつろふ色のつきぬらむきみがさとは春なかるらし」と「うつろふ」ことを詠み、第二十一段は「こと心なかりけり」だった男女が和歌を詠む交わすものの、「をのが世々になりにければ」と破局してしまう。反対に、第二十二段では「はかなくてたえにけるなか」だった男女の復縁が描かれる。

このような男女の時間経過と心の移り変わりを描く章段の中にある第二十三段は本稿で述べた通りである。二人妻の構図で大

和の女との復縁と高安の女との破局が対照的に描かれる。第二十四段では一人の女に二人の男という登場人物の関係構図も第二十三段を反転させたものだが、第二十三段では二人の女がともに「待つ女」であったことに対し、第二十四段の女は「待ちわぶる女」であった。

そして、第二十四段の「かたゐなか」の男女が離れ、女が待ちわびた原因は「おとこ、宮つかへしにとてわかれおしみてゆきけるまゝに三とせこざりければ」という「かたゐなか」から宮仕えするという経済的な理由であった。第二十三段も「ゐなかわたらひしける人の子ども」である。

田舎暮らしと経済的な理由による離別を基盤に第二十三段と第二十四段は描かれている。このことから、第二十三段の「けこ」を「家子」として「男」が高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」行為を経済的理由から不快に思ったという解釈するのが適当だと考えられる。

【注】

(注1) 差異については、次章で考察する。

(注2) 片桐洋一の所謂「三段階成立論」で想定される『古今和歌集』以前の「原型伊勢物語」に第二十三段は存在していないため、

『伊勢物語の研究(研究篇)』明治書院、一九六八年)『古今和歌集』以後成立した段として異論がないことを確認しておく。

(注3) 片桐洋一は「伊勢物語とうつほ物語」(『國文学 解釈と教材の研究』第43巻第2号、一九九八年二月)で『伊勢物語』の中に食事する場面の特殊例として第九段と第二十三段を挙げており、当該箇所を「家子」と表記している。

(注4) 「矛の力」(『國學院雑誌』第五十四巻第一号、一九五三年四月)による。また、秋山虔は「伊勢物語私論—民間伝承との関連についての断章—」(『文学』第二十四巻第十一号、一九五六年十一月)で、この論を「合理的であるといえるのかもしれない」とし、「ここでは高安の女はおとしめられねばならぬ女性なのではない。かえって、愛する男を恋慕して待ちかね、二つの歌をうたいあげる切実ななげきの人妻として形象されている」と

高安の女像を捉え、乗岡憲正はこの指摘を受け、「手づから飯匙とりて……考—「伊勢物語」〈高安の女〉の場合」(『國學院雑誌』第八十四巻第五号、一九八三年五月)で主婦としての高安の女と〈山の神〉信仰という民俗学的見地から飯匙に注目している。

(注5) 『伊勢物語注釈稿』(竹林舎、二〇〇四年)。

(注6) 『日本国語大辞典 第二版』による。また、『日本語源大辞典』(前田富祺監修、二〇〇五年、小学館)によれば、「いへのこ」の漢字表記「家子」の「家」を音読みした語と説かれる。「いへのこ」がふるく「万葉集」にあるのに対して、「けぞ」は「竹取物語」の用例が最も古いとある。家子は『竹取物語』では工匠の弟子と解せるが、妻子や召使を指す。また、「筍子」の初出としては『伊勢物語』の当該箇所が挙げられる。

(注7) 『書陵部本和歌知頭抄』(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院、一九六九年)、『闕疑抄』(『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』岩波書店、一九九七年)、『拾穂抄』(片桐洋一編『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第5巻、八木書店、一九八九年)。

(注8) 絵巻・絵入り本にもこの家子説を享受したものが多く、飯匙を

持つて器に飯を盛る女と「家子」に該当する童が描かれ、その

場面を男が垣間見する構図となっている。こうした構図は「異

本伊勢物語絵巻」、「スペインサーコレクシヨン本伊勢物語絵巻」、

「小野家本伊勢物語絵巻」、「中尾家本伊勢物語絵本」、「東京国

立博物館本住吉如慶筆伊勢物語絵巻」、「嵯峨本第一種伊勢物

語」、「鉄心斎文庫本伊勢物語絵巻」、「大英博物館本伊勢物語絵

巻」にみられる。(羽衣国際大学日本文化研究所編集『伊勢物

語絵巻本大成 資料編』角川学芸出版、二〇〇七年)。

〔注9〕「けこの」部分の校異は、紅梅文庫旧蔵本藤房本「けの」(石

田穰二『伊勢物語注釈稿』による)のみである。『万葉集』巻

第二二四二番歌「有間皇子自傷結^二松枝^一 歌二首」の一首で

ある有名な「いへなれば けにもるいひを くさまくら たび

にしあれば しひのはにもる」(家有者 簡尔盛飯乎 草枕

旅尔之有者 椎之葉尔盛)でも「け」であった。

〔注10〕『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』右文書院、一九八七

年。

〔注11〕「伊勢物語の高安の女」二十三段第三部の二つの問題」(『國

文學』(関西大学国文学会)第八十八号、二〇〇四年二月)

〔注12〕『伊勢物語』二十三段再考」(『中京国文学』第二十五号、

二〇〇六年)。

〔注13〕「『伊勢物語』二十三段考」『けこのうつはものにもりける』

の解釈と和歌の役割」(『文学・語学』第187号、二〇〇七年三

月。「家口」か「家子」か—『伊勢物語』二十三段の新たな

読解のために」(『言語と文芸』126号、二〇一〇年二月)

〔注14〕第二十三段は多くの教科書で採用されている。文部科学省検

定高等学校用教科書(平成二十三年度使用)の国語総合の教科

書(三十点中現代文編を除く二十五種)では、Bまでを載せる

教科書が三点(数研出版社版「国語総合」、明治書院版「高校

生の国語総合」、桐原書店版「国語総合」、第二十三段を全文

掲載し、「笥子」説の脚注をつける教科書が八点(教育出版版

「国語総合 改訂版」、大修館書店版「国語総合 改訂版」、筑

摩書房版「精選国語総合 古典編」改訂版)、「国語総合」改訂

版)、「第一学習出版」高等学校 新訂国語総合 古典編)、「高

等学校 改訂版 国語総合)、「高等学校 改訂版 標準国語総

合)、「高等学校 改訂版 新編国語総合」がある。「家子」説は、

東京書籍版「精選国語総合)、「国語総合 古典編」の二点が脚

注で「家子。家族と使用人を合わせた一族。笥子(飯を盛る器)

とする説もある。」と「笥子」よりやや優勢に説明しているの

みであるが、従来の「笥子」説を抑え、教科書という場に「家子」説が出された意味は大きい。

(注15) 『伊勢物語』では大和の女が「振り分け髪」の和歌を詠むが、

この連想で両者の髪を対比させているのだろう。

(注16) 河地修 『伊勢物語』「筒井筒」章段考——化粧をする女、

あるいは没落貴族のこと——『伊勢物語論集——成立論・作品論——』竹林舎、二〇〇三年)に「夫婦二人の生活の立て直しのための男のやむを得ざる行為」として窮読むべきである」とを指摘している。

(注17) 「家口」説では、高安の女の家族を指し、親を亡くした大和

の女と対照的であるが、親に飯を盛る行為は親孝行と解するのが自然だろう。

(注18) 第一部第二章で第十三段は「むさしあふみ」という言葉で「男」が武蔵で「逢ふ身」となった事態を察知する「京なる女」、第十四段は「男」の歌は自分を想ってくれるものを誤解する陸奥の女がいるが、東下りから東国章段へという一連の流れの中で対比されている構図があることを述べた。

高安の女と第十四段の女の類似は森本茂『伊勢物語論』(大学堂書店、一九七三年)と前述の山本登朗の論にも指摘がある。

(注19) 大和の女の③「かぜふけば」歌について本論ではほとんど触れていないが、第一部第五章で、この和歌が詠まれる場の視覚と聴覚の効果について述べてある。

(注20) 『伊勢物語』二十三段「筒井筒」の主題と構成——「あつつ」の風景と見送る女の心——『新典社研究叢書199 王朝文学論——古典作品の新しい解釈——』新典社、二〇〇九年)。

(注21) 大和の女、高安の女が詠む和歌はそれぞれ二首、合計四首あるが、「君」という言葉が入っており、どれも「男」を指し示している。一方、「男」の和歌は一首のみで大和の女を表す「妹」が詠まれている。

(注22) 『万葉集』三〇四六番歌・卷第十二(寄物陳思)「きみがあたりみつつもをらむ いこまやま くもなたなびき あめはふるとも」

(注23) 「待つ女」のイメージの変容——『伊勢物語とその周縁』風間書房、二〇〇六年)。

第五章 伊勢物語の「音楽」

一、はじめに

『伊勢物語』は音楽描写が少ない。第四十五段と第八十一段に「遊び」、第六十五段に「笛」が登場する程度である。しかし、他作品との関連からみると、第二十三段で女が詠む「風吹けば」の歌は、『古今和歌集』九九四番歌左注において、琴を弾く描写がある。他に、第四十九段を引いたとされる『源氏物語』総角巻において「妹に琴教えたる所」とあるが、現存する『伊勢物語』に琴は登場しない。『伊勢物語』には音楽が多く描かれない理由について考察していく。

二、『伊勢物語』に描かれる音楽・楽器

『伊勢物語』に音楽が登場する場面は第四十五段と八十一段、楽器は第六十五段の「笛」のみである。第一部第一章でも扱った第四十五段では「遊び」が登場する。

むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にものはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれともりをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。蛸たかく飛びあがる。この男、見ふせりて、

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこそ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

「男」は自分を想い亡くなってしまう「人のむすめ」を弔うものとして「遊び」を行う、という解釈が多くされている。この「遊び」については、管弦のあそびとしない説（注）もある。しかし、「遊びをりて」涼しい風が吹き、蛸が飛び上がる情景を見て詠む和歌は娘の魂を蛸に喩えている。管弦の遊びをし、涼しい風が吹いてきたことで手を止めて見ると、蛸が高く飛び上がって

るといふ情景と読める。鎮魂儀礼としての「遊び」として解釈し
ていいだろう。

「遊び」について『竹取物語』では、かぐや姫名づけの後に、
「このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男
はうけきはらず招び集へて、いとかしこく遊ぶ」とあり、かぐや
姫の求婚者たちが竹取の翁の邸宅に集まる場面では、

日暮るるほど、例の集りぬ。あるいは笛を吹き、あるいは
歌をうたひ、あるいは声歌をし、あるいは嘯を吹き、扇を鳴
らしなどするに、翁、いでて、いはく、「かたじけなく、穢
げなる所に、年月を經てものしまたふこと、きはまりたるか
しこまり」と申す。

翁が恐縮する姿と対照的に求婚者たちの貴公子たる振る舞い
として音楽が描かれている。この「遊び」「笛」という表現は『伊
勢物語』にも共通している。第八十一段は宴場面での「遊び」用
例であるが、後述する。

第六十五段の後半部には「笛」が描かれる。

この帝は、顔かたちよくおはしまして、仏の御名を御心に

入れて、御声はいと尊くて申したまふを聞きて、女はいとう
泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲し
きこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほ
どに、帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてけれ
ば、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、蔵にこ
めてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。

あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世を
ば恨みじ

と泣きをれば、この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をい
とおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれにうたひけ
る。かかれば、この女は蔵にこもりながら、それにぞあなる
とは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふ見らむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を
しらずして

と思ひをり。男は、女しあはねば、かくし歩きつつ、人の国
に歩きて、かくうたふ。

いたづらにゆきては来ぬるものゆゑに見まくほしさにい
ざなはなれつつ

水の尾の御時なるべし。大御息所も染殿の後なり。五条の後
とも。

『伊勢物語』中で最も長大で、第二段から第六段までの二条后章段と第七段からの東下り章段の要素も入れ焼き直したような段である。帝の仏名を唱える声の尊さと、「男」の吹く笛と思いをうたう声が対比的に描かれる。「男」が流罪となった一人の国より夜ごとに来つつ「笛を吹きうたう点には、第六段で鬼が登場したような非現実的な異空間性が感じられるが、蔵に籠められた女に届くのは「男」の吹く笛の音とうたう歌のみであることに注目したい。

第四十五段の「遊び」を管弦の遊びと解すると、音楽という聴覚的なものから、風が吹いたことを契機に笛が飛び上がる視覚的な場面に転じていることになる。第六十五段では、蔵に籠められた女に与えられるのは「音」という聴覚情報のみである。「見まくほしさにいざなはれつつ」と「男」がうたうように、見ることはもう叶わない。和歌を詠むのではなく、うたうことにより反復性を表す。「笛」には歌の声歌という面を強調する役割があるだろう(注2)。

以上、第四十五段の「遊び」と第六十五段の「笛」には、それぞれ視覚と聴覚を区別させる役割が担わされているといえる。

三、描かれない楽器「琴」——第二十三段の場合——

他作品との関連から、楽器の存在が透かし見える段に第二十三段と第四十九段がある。どちらも楽器は琴である。第四十九段は『源氏物語』という後世の作品との関連である。第二十三段は『伊勢物語』の成立にも大きく関わる『古今和歌集』との関連である。前章では「けこ」という言葉の解釈を見たが、前章では後半部のCの場面を扱ったが、本章では和歌の効果について、第二十三段の前半部A・Bの場面を中心に考察していきたい。

A むかし、みなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりにつれば、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはずれども、聞かでないむありける。さて、このとなりの男のもとより、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあ

ぐべき

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

B さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁のなにかにかくれて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆら

む

とよみけるを聞きて、かぎりなくなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

C まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筥子のうつはものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨はふるとも

といひて見いだすに、からうじて、大和人、「来む」といへ

り。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬもの恋ひつ

つぞ経る

といひけれど、男、すまらずなりにけり。

Bの場面が第二十三段の中心となっている段であり、このBの部分で女が詠む和歌は、『古今和歌集』にもほぼ同文の左注を伴い収載されている。

『古今和歌集』九九四番歌・卷第十八(雑歌下)題しらず よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

ある人、この歌は、むかしやまとのくになりける人のむすめにある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて家もわるくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくに人をあひしりてかよひつつかれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきも見えでかふちへいくことにをどこの心のごとくにしついでしやりければ、あやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせん

ざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまでことをかきならしつつうちなげきてこの歌をよみてねにければ、これをききてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

『伊勢物語』の成立に大きく関係している『古今和歌集』であるが、この伝承歌の雰囲気をもつ左注から第二十三段はBの部分と核として作られたといえる。九九四番歌の左注と第二十三段の散文部分はほぼ同じであるが、異なる点がある。九九四番歌左注では「月のおもしろかりける夜」と「男」から女の様子がよく見える状態であることが明示されており、「ことをかきならしつつうちなげきて」と琴を弾き嘆いて詠んだ和歌とされている。

一方、第二十三段では、「いとよう化粧じて、うちながめて」と女は琴を弾かず、化粧をしてうち眺めて詠む。化粧にはCにおける高安の女の「はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて」に對比させる意図がみえるが、大きく異なる点は、なぜ琴を弾かないのかということである。

仁平道明は、「身分階層の変化」^(注)を理由に挙げる。つまり、「田舎わたらひしける人の子ども」として井のもとでもに遊ぶ代償に、琴をひく行為をうばわれるのである。」という第二十三

段のAの箇所との対応関係を指摘する。『大和物語』第四百九十九段ではどうだろうか。

『大和物語』第四百九十九段

むかし、大和の国、葛城の郡にすむ男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、いけばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。かくにぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなくねたく心憂しと思ふを、しのぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね」といひければ、わがかく歩きするをねたまで、ことわざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。さて、いでていくと見えて、前栽の中にかくれて、男や来ると、見れば、はしにいであて、月のいとみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、「人

待つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風吹けば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとりこゆ

らむ

とよみければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いと悲しうなりぬ。この今の妻の家は、龍田山こえていく道になむありける。かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて胸になむすゑたりける。あやし、

いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入る。見るにいと悲しくて、走りいでて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらにかで、つとるにけり。かくて月日おほく経て思ひけるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりけるを、かくいかぬを、いかに思ふらむと思ひいでて、ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ、つつましくて立てりけり。さてかいまめば、われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、手づから飯もりをりける。いとみじと思ひて、来にけるままに、いかずなりにけり。この男はおほきみなりけり。

『伊勢物語』第二十三段のAとCの場面を要約し、Bの場面により焦点を当てた展開である。『古今和歌集』九九四番歌と同じく、月の描写がされるが、ここで女は琴を弾くわけでもなく、化粧するでもない。「使ふ人」の存在が『古今和歌集』九九四番歌のような地方官階級の風情を出しており、この「使ふ人」に対して和歌を言うのである。

また、和歌を詠む前の行動ではなく、和歌を「使ふ人」に言った後の行動が『古今和歌集』九九四番歌と『伊勢物語』第二十三段とは異なる。泣いた後に、金碗に胸を付けると水が沸騰し湯になる。「思ひ」と「火」をかけた女の心の内を表したものであり、その様子を体現してみせたものである。「男」は和歌を聞いた段階では、「わがうへを思ふなりけりと思ふに、いと悲しうなりぬ」と自分の身の上を心配してくれることを愛しく思い、金碗の水が沸騰する様子を見て、「つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりける」ことを知り、走り出て行く。

つまり、「男」は女の和歌よりも、和歌に詠まれた「思ひ」を体現した金碗の水が沸騰する様子に動かされたのだ。和歌を聞くという聴覚効果ではなく、視覚効果が強調されている。

四、聴覚効果としての和歌

和歌は書く場合と詠み口にする場合があり、前者は視覚効果、後者は聴覚効果を持つ。「風吹けば」の和歌は、女が「男」が隠れているとも知らず、身を案じて口した独詠である。第二十三段で女が歌を口にするまでの行動は「いとよう化粧じて、うちながめて」であり、「男」が「こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて」と自分のことは棚におき、妻にも別の男の存在を疑いながら隠れて様子を見ている「男」の猜疑心をさらに高めるものである。そうした緊迫感の中で詠まれる和歌は他の女のところへ通う自分の身を案じる祈りともいえるものであった。

化粧をしてうち眺めるという視覚情報から、和歌を口ずさむという聴覚情報への転換は、「風吹けば」という和歌の効果を最大限に演出している。『古今和歌集』九九四番歌は詞書ではなく、左注で説明されているが、「夜ふくるまでことをかきならしつうちなげきてこの歌をよみてねにければ」と琴↓嘆き↓和歌の順番である。琴をかき鳴らす様子も視覚情報ではあるが、それは「音」が介在した聴覚情報である。琴をかき鳴らす様子や嘆く様子から「男」を他の女のもとへ送り出した女の胸の内は十分表現

されており、「男」の身を案じる和歌はその一連の流れにある。つまり、『伊勢物語』第二十三段にみられた視覚情報から聴覚情報へ転じる際の和歌の意外性はないのだ。

『大和物語』第四百十九段は、聴覚効果としての和歌よりも視覚効果が強調されているが、聴覚情報のみで展開される第五百十八段がある。

第五百十八段

大和の国に、男女ありけり、年月かぎりなく思ひてすみけるを、いかがしけむ、女をえてけり。なほもあらず、この家に率て来て、壁をへだててすゑて、わが方にはさらに寄り来ず。いと憂しと思へど、さらにいひもねたまず。秋の夜の長きに、目をさまして聞けば、鹿なむ鳴きける。ものもいはで聞きけり。壁をへだてたる男、「聞きたまふや、西こそ」といひければ、「なにごと」といらへければ、「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。

われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞け

とよみたりければ、かぎりなくめでて、この今の妻をば送りと、もとのごとくなむすみわたりける。

新しい女を得た男が壁を隔てた向こう側の妻に聞こえた鹿の声をどのように聞いたかと問う。壁を隔て視覚情報のない中、会話と女の和歌という聴覚情報だけが物語を進めていく。男はこの和歌に感じ入って新しい女を帰し、元の妻の生活に戻る。会話中に詠まれた和歌としては男の返歌も必要となるところであろうし、「今の妻」との対比もなく、そうした部分は省略されている。女の和歌も嘆きを詠んだものであり、「風吹けば」歌のような相手の身を案じる内容とは異なる。話の構造は似ているが、演出が異なる。

『伊勢物語』第二十三段には視覚から聴覚へと転ずる効果が「風吹けば」という女の和歌に集約する演出となっている。「田舎わたらひ」という階級設定から、琴を弾く様子が相応しくないというためという辻褃合わせの面も確かにあるだろうが、『伊勢物語』第二十三段には敢えて女の独詠に向けて琴を弾くという聴覚情報を排除した演出という面も大きいだろう。

五、『源氏物語』に描かれた楽器「琴」

第二十三段では、『伊勢物語』があえて排除した楽器として琴があつたが、『源氏物語』が引いた『伊勢物語』の中には琴が描き加えられている。第四十九段には以下のように、「琴」は描かれない。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見りて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ

思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひける
かな

この第四十九段を引いた『源氏物語』総角卷の箇所は以下の通りである。時雨が降る日、匂宮が女一宮のもとを訪れると、女一宮は絵を見ており、几帳を隔てて話をする場面である。

またこの御ありさまにさずらふ人世にありなむや、冷泉院

の姫君ばかりこそ、御おぼえのほど、内々の御けはひも心にくく聞こゆれど、うち出でむ方もなく思しわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣りきこゆまじきぞかしなど、まづ思ひ出づるにいとど恋しくて、慰めに、御絵どもあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる女絵どもの、恋する男の住まひなど描きませ、山里のをかしき家居など、心々に世のありさま描きたるを、よそへらるること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひてかしこへ奉らんと思す。在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかと思すに、おし巻寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覽する御髪のうちなびきてこぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが飽かずめでたく、すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかば、と思すに、忍びがたくて、

若草のねみむものとは思はねどむすぼほれたる心地こそ
すれ

御前なりつる人々は、この官をばことに恥ぢきこえて、物の背後に隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやしと思せば、ものもいはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、ざれて憎く思さる。紫の上の、とりわきてこの二ところをばならはしきこえたまひしかば、あまたの御中に、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。(総角巻 三〇三〜三〇四)

匂宮が「よそへらるること多くて」と自らの姿を重ねて見る絵の中に「在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたる」一枚がある。女一官の姿が、『伊勢物語』第四十九段同様「いとをかしげなりける」様子であったのを几帳越しに見た匂宮は、第四十九段歌を引いた和歌を詠む。自らを絵の人物に投影し、絵の中には隔てがない兄妹が描かれるが、匂宮と女一官の間には几帳が置かれ、恋情を吐露する和歌を送られ返歌した妹とは違い、女一官は沈黙する。

『伊勢物語』第四十九段の校異として、古本系の最福寺本には「いとをかしききをしらへけるをみて」、時頼本に「イトヲカシケナルキムヲシラフトテミヲリテ」とある(注4)。片桐洋一は「これらの諸本こそ『源氏物語』の総角の巻の記述によって本文を改

変したと見るべき」とし、「絵に琴が描かれていたに違いない」と述べる。またこの「絵」によって、「うら若みねよげに見ゆる」の「ねよげ」には「根よげ」「寝よげ」に加え、「音よげ」という三重の掛詞を響かせることができると指摘する^(注5)。

琴を教える絵を見て句官が詠んだ「若草のねみむものとは思はねどむすぼほれたる心地こそすれ」の「ねみむ」も「根」「寝」と、「音みむ」という琴の音をみる意味が加わるだろうか。

勝亦志織は「妹に琴を教える兄」に注目し、『うつほ物語』の妹であるあて宮に琴を教えることを口実に近づく兄・源仲澄^(注6)から近親恋愛のイメージがあることを指摘し、「『源氏物語』では、『伊勢物語』・『うつほ物語』の両者を引用することで近親恋愛的な場面をこれみよがしに創り上げているといえないだろうか^(注7)」とする。

この『源氏物語』総角巻では、「在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの」と場面を断定しているが、「人の結ばん」だけで、第四十九段だと容易にわかるはずである。単に『伊勢物語』の引用としてならば、「妹に琴教へたるところの」という一文がなくてもよいのではないか。ここに、妹に琴を教えるという要素が加わることによって、勝亦の指摘の通り、近親恋愛性を高めているといえる。

妹に琴を教えるという行為の近親恋愛性は『うつほ物語』から付与されたのであって、『伊勢物語』にはない要素である。『うつほ物語』に描かれた同腹妹に恋をしながら琴を教える兄という構図が、『伊勢物語』が「絵^(注8)」にされた時に取り込まれ、そうした「絵」を『源氏物語』は句官と女一宮の関係に投影させる小道具としている。この場面が『うつほ物語』を経由して描かれていると考えられ、『伊勢物語』第四十一段に「琴」はやはり必要ない。

『うつほ物語』と『伊勢物語』の音楽描写と和歌の比重についてみてみたい。

六、『うつほ物語』における和歌と音楽

『伊勢物語』は和歌を中心に据え「歌物語」と分類される作品であるが、日本初の長編物語作品と呼ばれる『うつほ物語』は琴という音楽を主題にしている。音楽を中心にした物語では、和歌はどのような位置にあるのか。『うつほ物語』首巻である俊蔭の巻において、俊蔭の娘と若子君（兼雅）が出会う場面を見てみたい。^(注9)

東面の格子一間上げて、琴をみそかに弾く人あり。立ち寄り給へば、入りぬ。「飽かなくにまだきも月の」などのたまひて、簀子の端に居給ひて、「かかる住まひし給ふは、誰ぞ。名告りし給へ」などのたまへど、いらへもせず。内暗なれば、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

立ち寄ると見る見る月の入りぬれば影を頼みし人ぞわびしき

また、

入りぬれば影も残らぬ山の端に宿惑はして嘆く旅人

などのたまひて、かの人の入りにし方に入れば、塗籠あり。

(俊蔭 二六)

琴の音に惹かれて兼雅は俊蔭の娘と出会う。「飽かなくにまだきも月の」は「あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげといれずもあらなむ」と『古今和歌集』八八四番歌(巻第十七雑歌上)あるいは、『伊勢物語』第八十二段で寝所に入ろうとする惟喬親王を引き留めようと詠まれる和歌の引用である。暗い中を月の明かりを頼りに行方を探り、詠む和歌二首目にも「山の端」という表現が使われ、この場面で兼雅の業平幻想が垣間見える。

『伊勢物語』と『うつほ物語』の和歌を比較した藤井貞和氏の

論^(註10)に、地の文と和歌との対応関係が指摘されている。『伊勢物語』は和歌から前文が創り上げられるのに対し、『うつほ物語』は前文部分と作歌部分に類似した言い回しを見、説明された上で歌が詠まれる点で異なるとしている。

『うつほ物語』の柱となる秘琴伝授という音楽以外に、あて宮求婚譚ももう一つの大きな柱となっているが、祭の使巻に、以下のような場面がある。

仲忠、空蟬の身に、かく書きつけて奉る。

「言の葉の露のみ待つうつせみもむなしき物と見るがわびしき

まして、いかならむ」と聞こえたり。あて宮、

「言の葉のはかなき露と思へどもわがたまづさと人もこそ見れ

と思ふになむ、聞こえにくき」と聞こえ給へり。(祭の使 二

〇五)

返事を請う仲忠が空蟬に書きつけて詠む和歌に対して、あて宮は迂闊に手紙にした返事はしにくいと断る歌を詠む。視覚、聴覚というよりは、手紙という存在が物体として残るものであること

を意識しているが、この和歌は会話の一部と化している。

男女の恋歌とは別に、『うつほ物語』に多く描かれる宴の場面には参加者により、次々と和歌が詠まれる。例えば、吹上・上巻の源涼邸、「三月中の十日ばかりに、藤井の宮に、藤の花の賀し給ふ」という場面では、以下のように和歌が詠まれる^(注1)。

例の、物の音ども掻き合はせて、かはらけ度々になりて、君たち、大和歌遊ばす。「藤の花を折りて、松の千歳を知る」といふ題を、国のぬし、

藤の花挿頭せる春を数へてぞ松の齢も知るべかりけるあるじの君、

春雨の匂へる藤に懸かれるを齢ある松のたまかとぞ見る侍従、

藤の花染め来る雨もふりぬれば玉の緒結ぶ松にぞ見えける

少将、

汀なる松に懸かれる藤の花影さへ深く思ほゆるかな

良佐、

円居していづれ久しと藤の花懸かれる松の末の世を見む

国の権の守、

藤の花懸かれる松の深緑一つ色にて染むる春雨

右近将監松方、

紫のいとど乱るる藤の花映れる水を人しむすべは

右近将監近正、

藤の花宿れる水のあはなれば夜の間波の折もこそすれ

右近将監時蔭、

藤の花色の限りに匂ふには春さへ惜しく思ほゆるかな

国の介、

匂ひ来る年は経ぬれど藤の花今日こそ春を聞き始めけれ

まつりごと人種松、

春の色の汀に匂ふ花よりも底の藤こそ花と見えけれ

などで遊び暮らす。(吹上・上 二六〇〜二六一)

次々と詠人と和歌が列挙される。音楽と酒を愉しみ、題に合せて一人ずつ和歌を詠み上げる宴の空間である。和歌を詠み終わった後にまた「遊び暮らす」と述べられ、音楽に縁取られる空間である。『伊勢物語』の源融の河原院の宴場面と比較してみたい。

第八十一段

むかし、左のおほいまうちぎみいまそがりけり。賀茂河の

ほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りてすみた
まひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなる
に、もみぢのちぐきに見ゆるをり、親王たちおはしまさせて、
夜ひと夜、酒飲みし遊びて、夜明けもてゆくほどに、この殿
のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたのおきな、
板敷のしたにはひ歩きて、人にみなよませはててよめる。

塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する船はここによらな
む

となむよみけるは。陸奥の国にいきたりけるに、あやしくお
もしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈
といふ所に似たるところなかりけり。さればなむ、かのおき
な、さらにここをめて、塩竈にいつか来にけむとよめりけ
る。

親王たちが参加しており、河原の院を褒める歌を詠むものの、
それらの和歌は省略されている。飲酒と「遊び」の管弦の音楽が
後景として添えられている。ここでの「遊び」は親王たちの和歌
を省略した代替的な音としての役割であろう。「人にみなよませ
はててよめる」という一文は、一瞬音を止めた状態で「かたのお
きな」が河原の院における塩竈の発見を詠み、陸奥の国経験者と

して「左のおほいまうちぎみ」こと源融と繋がる瞬間の演出であ
る。

第八十一段に続く第八十二段は惟喬親王の元に集う人々の宴
が描かれる。中盤に天の河で惟喬親王が題詠させる場面がある。

御供なる人、酒をもたせて、野より出で来たり。この酒を飲
みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたり
ぬ。親王に馬の頭、大御酒まゐる。親王のたまひける。「交
野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて
盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。
狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来
にけり

親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえしたまはず。
紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじと
ぞ思ふ

惟喬親王が何度も口ずさむものの返歌できないという描写は、
馬の頭の和歌が素晴らしい為だと解されるが、返歌できないほど
の秀歌の存在は宴という場においては、一種場を乱しかねない異

分子ともいえるのではないだろうか。この場面では、紀有常が代わりに返歌することでその場をまとめ収めているともいえる。

第八十一段の源融の河原の院も第八十二段の惟喬親王の渚の院も政治的敗者の集団と位置付けられ、公の宴ではない。どちらも花を愛で、酒を飲みながら和歌を詠み合う空間なのである。公の宴としては、第九十七段が挙げられる。

むかし、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。

四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりけるおきな、

桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふが
に

藤原基経の四十の賀において 寿ぎにしては「散りかひ曇れ」「老い」という不吉な言葉を用いて老いを遠ざける旨を詠んでいる。また、第百一段でも、

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。

その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、かめに花をさせり。そ

の花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなむ、

咲く花の下にかくるる人を多みありしにまさる藤のかけ
かも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。みな人、そしらずなりにけり。

皆の歌が詠み終わる頃にやってきた主・在原行平の「はらから」が藤原氏を揶揄するような挑発的な歌を詠む。ここでも他の参加者の歌を省略されているが、明らかに宴の場を乱す行為である。『うつほ物語』では、参加者の和歌が列挙されそれぞれの思いが込められてはいるが、一首が特別クローズアップされることはない。『うつほ物語』が特別視するのは琴の音であり、和歌は会話や手紙文の一部といえる。

先に引いた俊蔭の娘と兼雅の出会いから後、再会においても、琴の音が契機となる。俊蔭から「幸ひにも災ひにも、極めていみ

じからむ時、弾き鳴らせ(俊蔭)と伝えられた二つの琴の一つ南風の琴を弾き鳴らしていたところ、その音を聞きつけた兼雅は「琴の声と聞こゆれど、多くの物の音合はせたる声にて、内裏に候ふせた風の一つ族なるべし。いざ給へ。近くて聞かむ」と音を辿り俊蔭の娘と再会し、息子の仲忠と対面する。しかし、この場面に和歌はない。

会話によって物語が進められていく『うつほ物語』だが、『伊勢物語』のような和歌を詠む前に和歌の効果を最大限發揮するよくな仕掛けはない。『伊勢物語』にとって中心にしたのは和歌であったが、『うつほ物語』においては琴、特に秘琴の音楽であった。

七、おわりに

『伊勢物語』第二十三段と第四十九段を中心に、『伊勢物語』にあまり描かれない音楽の意味を考察した。和歌を核として展開する『伊勢物語』には、和歌の力を最大限に生かすことが主眼となっている。和歌を詠むという聴覚効果を演出するために、それ以外の音は排除されなければならない。「風吹けば」の歌が、『古

今和歌集』九九四番歌のような伝承歌から第二十三段の三場面にわたる物語になる為に、「風吹けば」歌が物語の中心となるべく演出されている。

化粧してうちながめるといふ行動は「男」の妻にも他に男がいるのではないかという疑いの緊迫感を一気に高めた後の反転、夫の身を案じる思いを詠む和歌に弛緩される。視覚から聴覚に転ずる効果によって女の思いは和歌に集約され表現される。第二十三段で女が琴を弾かない理由にはそうした和歌という聴覚効果を最大限生かす為の演出であった。

第四十九段を引いた『源氏物語』総角巻には琴を教えるという絵が登場するが、これは琴という音楽を中心にした『うつほ物語』で仲澄が同腹妹であるあて宮に琴を教えるという近親恋愛的要素を加えたものだと考えられる。

音楽を主題に長編物語作品として成った『うつほ物語』との和歌の取り扱い方の比較においても、如何に『伊勢物語』が和歌の演出に集約した作品であるかが明らかになった。歌物語と長編物語という二つの形態を代表する作品に占める音楽の位置を見ることにより、『伊勢物語』は詠む和歌の聴覚効果を生かすために、音楽を制御し、和歌の力を發揮できる空間を作り出していることが浮き彫りになったのではないだろうか。

【注】

(注1) 『愚見抄』(堀保己一編『続群書類従 第十八輯上』続群書類従完成会、一九二四年)。「うれへの中にあそぶべきにあらず。程すむをいふべし」、『勢語臆断』(久松潜一監修・築島裕他編集『契沖全集 第九卷』岩波書店、一九七四年)。「これらはよろづのしわざを打やめたるを遊ぶといへる歎」

『古意』(『賀茂真淵全集 第16卷』続群書類従完成会、一九八一年)。「いとま有てをるをも遊ぶと云也、葬禮の事のみ執て、常は公事なきを遊部と云が如し」

(注2) 『闕疑抄』(堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』岩波書店、一九九七年)と『勢語臆断』(前掲)は『古今和歌六帖』三四〇九歌(第五・「ふえ」)「いへばえにふかくかなしきふえ竹のよごゑやたれととふ人もがな」を引く。また、『臆断』には「笛を吹てうたふは、それとしられんとなるへし」とする。

(注3) 仁平道明 『伊勢物語』二十三段と李白「長干行」(『文藝研究』第100集、一九八二年五月)。また、菊地靖彦も『大和物語』における「大和」をめぐって一四九段を発端として――

(『文藝研究』第103集、一九八三年五月)において、同様に「齟齬をせめても小さくしようとする」ためとし、これを引く雨海博洋も「河内の国高安と大和の国葛城―伊勢物語と大和物語」(福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見』風間書房、一九九五年)で地方官階級から行商風情への変化としている。

(注4) 池田龜鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』(大岡山書店、一九五八年)。石田穰『伊勢物語注釈稿』竹林舎、二〇〇四年)は、この二本の「しらぶ」の箇所を問題とし、「最福寺本・時頼本の本文は逆に「をしふ」から「をしらぶ」に転訛した結果を伝えていると考える方がよさそうである。「きんをしふとて」(吉田本書き入れ一本)↓「キムラシラフトテ」(時頼本)↓「きんをしらべけるを」(最福寺本)といった過程は十分に考えられるところである。時頼本の本文の不自然さは転訛した傍書本文をそのまま本文に取り入れた所に発し、最福寺本の本文はその修正と見るのである。」とする。

(注5) 『鑑賞日本の古典 第五卷』角川書店、一九七五年。仲澄があて官に琴を教える場面は全四例ある。

(注6) ①この侍従もあやしき戯れ人にて、よろづの人の、「婿になり給へ」と、をさをさ聞こえ給へども、さもものし給はず、「い

の同じ腹にもやし給ふあて宮に聞こえつかむ」と思せど、あ
るまじきことなれば、ただ、御琴を習はし奉り給ふついでに、
遊びなどし給ひて、こなたにのみなむ、常にものし給ひけ
る。(藤原の君 七八)

②長門、喜びて参りぬ。孫の、たてきといふを呼びて、「姫君
は、いづくにかおはします」。たてき、「侍従の君と、御琴遊
ばす」(藤原の君 九七)

③侍従の君、御琴遊ばすついでに、

人を思ふ心いくらに碎ければ多く忍ぶになほ言はるらむ

例の聞き入れ給はず。……

「ここは、大將殿。あて宮、おはす。侍従の君と、御琴遊ば
す。……」(藤原の君 一〇二)

④「何かは、知り給へれば。まだ小さかりし時、箏の琴習は
しし頃なむ、あやしく、思はぬやうなる気色なむ見えし。……」

(蔵開・上 五一四)

(注) 『物語の(皇女) —もうひとつの王朝物語史』(笠間書院、二

〇一〇年)第一章第二節。

(注) 実際にあった「絵」を前提としているよりは、「琴」と「音」

という聴覚要素を「絵」という視覚要素の中に閉じ込めて描

く点から、『うつほ物語』の引用を『伊勢物語』と同レベルで
表現しようとしないう『源氏物語』の態度が見て取れようか。

(注) 琴をみそかに弾く音に惹かれて立ち寄る場面には、『古今和歌
集』九八五番歌(巻第一八 雑歌下)の影響が指摘される。

ならへまかりける時に、あれたる家に女の琴ひきけるをき
きてよみていれたりける よしみねのむねさだ
わびびとのすむべきやどと見るなへに歎きくははることのね
ぞする

(注) 「和歌と物語—『伊勢物語』そして『宇津保』」(國文學 解
釈と教材の研究)第43巻第2号、一九八八年二月)

(注) この藤井の宮の前には「渚の院」にて「都鳥」歌を詠む場面
があり、『伊勢物語』との関連が認められる。

第二部

『伊勢物語』の実名章段について

第一章 「在原業平」

—主人公「男」との関係—

一、はじめに

第一部では、『伊勢物語』の名前、特に一般名詞の〈音〉の扱いについて述べたが、第二部では、実名、つまり固有名詞について考察する。固有名詞とは唯一存在し、事物の名称を表す一般名詞の対義語となる名詞であり、人名や地名などに使われる。

しかし、固有名詞の定義は難しい。唯一存在する固有の名が「固有名詞」なのだ、唯一とならないことがままある。同じ名を持つものが存在するからであり、一般名詞との境界線が曖昧なものも多い。言語学は文法で説明できない名前の固有名詞を対象とせ

ず、固有名の研究は言語哲学の分野で行われた。

固有名を個々の人や物の単なる「ラベル」と考えたジョン・スチュアート・ミル、「記述の束」と唱えたジョン・サール、固有名を確定記述と同値であり、「記述の省略」としたバートランド・ラッセル、これらの流れを受けた、ソール・クリプキの論は、固有名は指示される個体が存在するすべての〈可能世界〉で同じ個体を表示するとした。これは、固有名が固有の名詞たりえる範囲内において機能するということになるだろう^{注1}。

『伊勢物語』の主人公「男」のモデルは在原業平だとされる。それは、『古今和歌集』で在原業平を詠み人とする和歌三十首を『伊勢物語』では「男」が詠んでいることに起因する。ここでの「男」は一般名詞であるが、業平をモデルにしている、業平のイメージを持った「男」として読むことが避けられない

そのため、古来、『伊勢物語』の「男」は業平とするべきか否かという点が問題になった。つまり、業平は二条の后と駆け落ちをしたのか、東国に下ったのか、斎宮と密通したのかどうか、などである。

業平の史実と照らし合わせ、官位の停滞期に公には出せない裏事情として、二条の后との恋を予想する説をはじめとし、『伊勢物語』には公式記録には載せられない事実が語られていると解釈

されてもいた。

『伊勢物語』の主人公を「在原業平」ではなく、「男」とすることも、事実であるゆえに業平の実名を出せないものと解されていた。

主人公の名前は明かさない、しかし、周囲の人物が誰であるかを明かすのはなぜだろうか。第二部では、人名の固有名について考察していく。

二、「後人注」の存在

『伊勢物語』内に登場する実在人物は、実名を明記される場合と、通称などで表記される場合、名前は語られないが、さらに前後関係から暗示される場合がある。それぞれ地の文と和歌の後、所謂「後人注」と言われる段末文に書かれることがある。「後人注」については、和歌の後、段末という位置にあることから、また、その内容から、後の世の人が書き足した注記であるという見方をする説による。

「後人注」は二条后章段や斎宮章段という禁忌の恋を中心に見られる。地の文では二条后や恬子内親王を暗示する表現はあるも

の、限りなく仄めかす程度である。しかし、「後人注」により「女」が「二条の後」であることや、「斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御娘、惟喬の親王の妹」であるとする。「高子」や「恬子内親王」という実名表記こそしないが、名指しすることに限りなく近い表記である。

例えば、第六十九段とほぼ同じ贈答歌が『古今和歌集』巻第十三（恋歌三）六四五・六四六にある。

業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめ
てか

返し

なりひらの朝臣

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ

『古今和歌集』の詞書には「斎宮なりける人」とあり、更に「よみ人しらず」となっていることから、相手が斎宮とも斎宮に仕える女だとも解釈可能である。業平の歌の方は、「世人さだめよ」

とあり、『伊勢物語』第六十九段では「今宵さだめよ」になっている。以下の通りである。

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使にいけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、一つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩りにいだしたててやり、夕さりはかへりつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたはつきけり。二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ぎねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝て
かさめてか

男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつとは今宵さだ
めよ

とよみやりて、狩にいでぬ。野に歩けど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いととくあはむと思ふに、国の守、齋の宮の頭かけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜、酒飲みしければ、もはらあひごともえせで、明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人しれず血の涙を流せど、えあはず。夜やうやう明けなむとするほどに、女がたよりいだす盃のさらに、歌を書きていだしたり。取りて見れば、

かち人の渡れど濡れぬえしにあれば
と書きて末はなし。その盃のさらに続松の炭して、歌の末を書きつぐ。

またあふ坂の関はこえなむ

とて、明けくれば尾張の国へこえにけり。齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御娘、惟喬の親王の妹。

『古今和歌集』では、齋宮だとも、齋宮に仕える女だとも解釈

可能であったものを、『伊勢物語』は齋宮その人とし、更に、最後に「後人注」で齋宮の血筋を明かし、齋宮が文徳天皇の娘で、惟喬親王と同腹の恬子内親王であると限定する。しかし、恬子内親王という名前までは表記しないことが、余計にスキャンダラスな裏話を暴露されたような印象を増幅させているともいえ、二条后章段でも同様の構成を持つ。段末という部分であることから、元々の本文にはなく、後世になって書き入れられたものであるという説が現われる。

二条後の場合も第三段、第五段、第六段の段末に「後人の注」がある。『伊勢物語古意』には「こは後人の裏書也」と書かれ、折口信夫^(註5)も「以下は、明らかに後人の書き添えが、本文となつたものだ。」と述べる。森本茂^(註6)も「後人の補注とみられる」という。

阿部方行^(註7)は「後人による書き入れ」という最初の着想は『伊勢物語童子問^(註8)』の第六段だと指摘する。

それは、本文と注者を別にみる案也。此一案によれば、すべて業平の事にあらざるを、注文をくわへて、自注分りにみせたるより、先達、悉皆まどひて、むかし男を業平と決する邪説、出来る成るべし。

反対に、後人による書き入れと見ない説もある。『伊勢物語童

子問』以前は書き入れと見ない説が多い。『拾穂抄』は「物語の作者其人を書あらはしたる詞也」、『臆断』は「作者の注也」というように作者の手によるものとしている。

石田穰^(註9)は、第三段の補注において「なお、諸説、「二条の后」以下の文を、後人の注記とするものが多い。しかし、現存本には、これを後人の注記とすべきなんらの縦跡も認めがたい。初段も二段も男の相手の女について、なにがしかの物語的肉付けがあるが、この部分はその肉付けの部分に相当する。これを後人の注記とする説は、『伊勢物語』の第三段としてのこの物語を破壊するに等しいであろう。」と述べ、阿部方行^(註7)が「二条の後物語の注記が後人注であるならば、この一群の章段をよはや二条の後物語と言うことはできない。それには注記の存在が不可欠だからである。注記がなければ、どうしてこの「女」を二条の後高子に特定できるだろうか。それぞれの段の女は誰に引きあてることができない無名な女とみるほかはなく、同一人物とさえ言いえないだろうと思うのである。」と述べるように、「後人注」によって章段はまとまりを成している。

また、第六段は、「まだいと若うて、后のただにおはしける時とや。」という「後人注」で終わるが、「二条の后」が地の文に現われる第七十六段は「男」がはじめて「おきな」と呼ばれる段で

ある。

むかし、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひけるおきな、人の祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ

とて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし。

「後のただにおはしける時」から「二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時」に時が流れ、「男」も「近衛府にさぶらひけるおきな」になったという対比がみられる。そこで「おきな」の詠む和歌は小塩山に鎮座する神も子孫の参拝によって天孫降臨の時のこと、「神代のこと」を思い出すだろうという意味の裏に、「男」と「後のただにおはしける時」の恋を思わせる歌とも解される。第七十六段のこの和歌は『古今和歌集』巻第十七（雑歌上）八七一にもある。

二条のきさきのまだ東宮のみやすんどころと申しける時
におほはらのにまうでたまひける日よめる

なりひらの朝臣

おほはらやをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいづらめ

以上の考察は二条后章段を対象にしているが、初段の成立を『伊勢物語』の成立とみる考え方に基づけると、他の段における「後人注」も同様に、「後人注」は「後人による注記」ではない。

物語の本文であると解釈しているが、和歌よりも前の地の文で実名を明かす場合と、段末で明かす場合とは性格が異なり、後者にはやはり暴露的意図があると考えられるため、本論では便宜上「後人注」と呼び区別することとする。

さて、『伊勢物語』は作品全体を通して、「年ごろおとづれざりける人の」とはじまる第十七段を除く、全てが「むかし」と曖昧な時間設定をしてから段を始めている^{注50}。そうした物語空間に、実在の人物を登場させれば「むかし」という過去の中でもいつ頃の話なのかと想定される。官職名を負わせれば、その人物の人生においていつのことを指すか、更に限定されるだろう。

官職名を伴って登場する人物は、「右大将藤原の常行」（第七十七段、第七十八段）、「左兵衛の督なりける在原の行平」（第一百

段、「左中弁藤原の良近」(第百一段)、「内記にありける藤原の敏行」(第百七段)である。「後人注」では、「太郎国経の大納言」(第六段)と「中納言行平」(第七十九段)がいる。地の文では官職名と氏名が明記されるのに対し、「後人注」では官職名と氏を省いた名のみが表記されている。第六段から確認していきいたい。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに來けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふげにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつゝるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましも
のを

これは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつる

やうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしましければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后のただにおはしましける時とや。

この第六段は「女」が実は二条后であること、鬼に喰われたのではなく兄たちに引き戻されたことを「白玉か」という和歌以降の「後人注」で明かす構図である。「御兄人、堀河の大臣、太郎国経の大納言」と二条後の兄の名をあげるが、兄弟共通の「藤原の」という氏を表記しない。基経は「堀河の大臣」という通称で呼ばれ、国経は「太郎国経の大納言」というように、名前の後に官職名がつけられている。これは『伊勢物語』唯一の例である。ここには「太郎」という、基経よりも官職は上だが、国経が長兄であるということ強調する意図から、官職名よりも先に出されているのではないだろうか。

次に第七十九段は以下の通りである、

むかし、氏のなかに親王生まれたまへりけり。御産屋に、

人人歌よみけり。御祖父がたなりけるおきなによめる。

わが門に千ひろあるかげを植ゑつれば夏冬たれかかくれ

ざるべき

これは貞数の親王、時の人、中將の子となむいひける。兄
の中納言行平の娘の腹なり。

「氏のなかに親王生まれたまへりけり。」と氏族が強調された
書き出しであるが、「在原氏」とは明記せずに「後人注」で行平
の名を明かして「在原氏」を暗示させる効果を狙っているのだろ
う。

山田清市^註は、この部分が為家本、伝肖柏筆本や真名本系統
の大多数にないことから、「先学もひとしく認めているごとく、
あとの付加部分と認めざるを得なくなるようである」とするが、
この「後人注」を抜いた場合に、

当然「うち」や「みこ」や「おきな」に該当するのは、誰
を指すのか不明となってくるのである。仮に「みこ」に勢語
82・83段にみえる「惟喬親王」をあててみても、一向にさし
つかえがなくなるわけである。

もしそうならば、「おきな」もまた「惟喬親王」の生母、「紀
静子」の父、「名虎」があげられてくるのであり、とするなら

ば「うち」は当然、「紀氏」を指すことになってくるわけであ
る。

と、紀氏の中に惟喬親王が誕生した話としても読める可能性を示
唆する。後人による付加部分と見る点には従えないが、こうした
可能性を持った読みを「後人注」は在原氏のものとして限定する
役割を果たしている。

地の文で官職を伴って登場する人物の中でも、藤原常行、藤原
良近はそれぞれ最終官職名で呼ばれている。常行が登場する第七
十七段と第七十八段は常行の兄妹である多賀幾子の法要が舞台
となっているが、多賀幾子が亡くなったのは天安二年十一月十四
日、第七十八段にある「三条の大御幸」は貞観八年三月二十三日
のことで、この日に常行は正四位下に叙せられている。だが、常
行が「右大将」になったのは貞観八年十二月十六日のことであつ
て、史実にある時間とは全く合わない設定がされている。

彼らの名前が明かされる理由には、政治的背景に加え、言葉遊
びという点が考えられる。

三、人名の言葉遊び

固有名について既に言葉遊びが指摘されているものがある。第六段の「紀の有常」について、小笠原恭子が、『有常』に対する『無常』名は有常なのに常ではない、という洒落」と述べ、第三十九段の「源の至」については、岩下均が『作者は「いたる」と「ほたる」の類似をおもしろいと思つて設定だったのかもしれない」と「いたる」と「ほたる」の〈音〉の類似性を指摘している。

これと同様に他の実名登場人物にも指摘できるのではないだろうか。第七十八段の「年ごろよそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず」と言う「常行」には、「常に行く」という名前を持ちながら常には行かない。第七七段の「藤原の敏行」は、「つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし」や、「雨のふりぬべきになむ見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨はふらじ」などと、雨が降っていることを理由になかなか訪れないが、ここには「敏く行く」つまり、早く行くという名前を持ちながら、なかなか行かない。名前とは逆の行動を取る人物である。彼らの名前が明かされる意味の一つに言葉遊び要素を指摘しうる。

第一百一段は、皮肉な和歌を詠む段であるが、その登場人物の名

前も背景を考えると皮肉な言葉遊びとなっている。

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。

その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどさねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、かめに花をさせり。その花のなかにあやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじしたまふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことはしらざりければ、すまひけれど、しひてよませければかくなむ、

咲く花の下にかくるる人を多みありしにまさる藤のかげ
かも

「などかくしもよむ」よいひければ、「おほきおとどの栄花のさかりにみまそがりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」となむいひける。みな人、そしらずなりにけり。

「左兵衛の督なりける在原の行平」とあるが、行平の極官は第七十九段にもある中納言である。行平が「左兵衛の督」であったのは、貞観六年三月八日から貞観十四年八月二十九日の間である。

一方、藤原良近在「左中弁」であったのは、『日本三代実録』の卒伝によると、貞観十六年に任命され、貞観十七日九月九日に卒するまでの間で、左中弁が良近の極官となる。

行平が左兵衛の督であった時期と、良近在左中弁であった時期は重ならない。更に「おほきおとど」を太政大臣藤原良房とする、良房は貞観十四年に没している。このような齟齬が生じることに ついて井川健司^(註10)は、

当物語の筆録者が実在者の官職を示す場合、時間的に二様の記載方を探る。ひとつは、記事時点において、呼ばれて然るべき官職を用いる場合、もうひとつは執筆時点においてよる呼ばれて然るべき官職を用いるばあいである。(中略)筆録者は登場人物を執筆時点の“そう呼ばれて然るべき官職”で呼んだのである。

というが、「然るべき官職」の基準がはっきりしない。寧ろ、物語の舞台となった時間を攪乱するために官職名は使われているようではないだろうか。

行平が良近を客人として招いていることについて、森本茂^(註11)は、「史実に近い内容であろうと思われる」として、「行平の娘に親王が生れたが、すでに良近の娘には親王が生れていて先輩格であったから、行平は娘や親王の将来を考えて、良近を招待したの

であろう。事は極めて政治的であったようだ。」というように、政治性を読み取っているが、「あるじのはらからなる」者が、「もとより歌のことはしらざりければ」と断りを付けて辞退しようとしたのを強要してまで詠まされる和歌には藤原氏批判、あるいは藤原氏に媚びる者への風刺を読み取れる。

「ありしにまさる藤のかげ」については、石田穰二^(註12)が「ありし」を「在氏」にかけて、藤原氏に媚を売り、在原氏を自嘲したとする説、専横を極める藤原氏に対する風刺とする説などがあるが、主客である藤原良近への単なる挨拶の歌と見るべきであろう。

と解釈の可能性を述べる通り、その場の人々もそうした意味を感じ取り、「などかくしもよむ」と聞くが、うまく言い逃れた体裁を取り繕う。藤原氏であり、当日の客人である藤原良近を「上にありける左中弁藤原の良近」というように、行平の上司として登場させていることから、「藤」に喩え、そうした「藤のかげ」の「下にかくるる人」として行平を配置する。

しかし、行平と良近という名が背負う、この場面に描かれていない背景に目を向けるならば、森本が言うように、二人には娘が清和天皇に入内し、親王が誕生していることに注目すべきである。良近の娘には、貞観十五年四月二十一日に貞平親王が誕生し、行

平の娘には、貞観十七年に貞数親王が誕生している繋がりがある。

また、藤原良近は藤原氏ではあるが、北家ではなく式家である。父は藤原吉野であるが、『続日本後記』によると、この吉野は承和九年七月に起きた承和の変で失脚した人物である。大宰員外帥として宮廷内から追放されている。承和十二年に山城国へ移っているが、入京は許されないうままであった^(注13)。その承和の変の密告者となってしまった阿保親王が行平、業平の父であることを考え合わせると、行平と良近には政治的關係が強く見られる。

神尾暢子^(注14)は、この和歌の解釈に関して、

和歌作者は、太政大臣が栄華の盛りにあること―疑問を提示した人物の理解とは反対の詠作意図であると、弁明した。

その弁明で、周囲の人物は、納得した。作者が、「もとより歌のことは知らざ」る人物だったからである。それは、「を―み」構文の正確な解釈に立脚したものである。

行平兄弟の歌才が、平均的であれば、この和歌は藤氏への痛烈な皮肉となる。平均以下の歌才だから、弁解の成立する余地があった。―という物語作者の設定である。

と述べ、「もとより歌のことはしらざりければ」という設定が、和歌解釈を助けているとする。

しかし、原國人^(注15)が以下のように述べている。

だが、この「おほきおとど（＝藤原良房）」という名前は、良近・行平・業平の三人だけに共通する *sahie* であった。だが、この行平はいうまでもなく、良近にも、この業平のことは聞き流すだけの度量はあった。そこには若干の自嘲的な気分の他に、承和の変以来の歳月がお互いの心の中に植え付けた、いたわりあう心があったのである。「そしらずなりにけり」とは、こうした事情をよく心得た筆者の、この詞章を享受者に向けた鋭い皮肉の矢でもあったのである。

良近を「藤」に、その「下にかくるる人」を行平とするよりも、「おほきおとど」藤原良房の栄花に取り替える弁明は、「藤」を良房に「下にかくるる人」を良近、行平と配置する、何も知らない一座の人々にとつては一見穏便なまとめ方かもしれないが、良近と行平にとつては、痛烈な批判、風刺を含んでいるといえるのではないか。一度物語内で回避したかに見える藤原氏批判という政治的な危うさは、かえって増幅されている。

ここで官職名を表記する物語の姿勢についても一度考えてみたい。官職名を付けることにより、政治性は強調される反面、それを偽装することも可能である。登場人物同士の官職にあった時期が重ならないようにしていることには、物語の時間設定を攪乱する働きがみられる。また、登場人物同士の関係を再構成しよ

うとしていくようでもある。

そして、多くこれらの官職名を伴った実名人物が登場する段には、基本的には事実を基にして成っているとみる論がある^(註10)。官職名を記すこと自体に、実際にあったこと、としてのリアリティを演出するための作用も働いているのではないだろうか。そして何よりも官職にある、「官仕へ」している者という従属性を表わすだろう。それは、天皇、そして、政権を握る藤原氏へと向けられるものである。

以上が『伊勢物語』における主人公「男」をとりまく登場人物の固有名についての概論である。他の作品での固有名の扱いかたとして、『伊勢物語』とは反対に多くの人物が登場し、固有名が記される『うつほ物語』を確認しておきたい。

四、名前を明かす物語—『うつほ物語』の場合

人物名を多く記す物語として『うつほ物語』がある。『源氏物語』以前に物語の長編化を試みた作品であり、多くの人物が登場する。ここでは、『うつほ物語』の固有名について考えてみたい。

男性では童名が記されたり、女性でも「徳町」や「さかの^(註11)」

のように名前を明かされる人物がいる。

『うつほ物語』は秘琴伝授というテーマを持ち、あて宮求婚譚に代表されるように婚姻により人間関係を結ぶを持つ作品である。そうした「系譜」を重視する作品であるが、名のみ、または名と官職名のみで、姓が明らかにされない登場人物が少なくない。次に挙げる。

「行忠」(藤原の君 六八)、「元方」(春日詣 一四二)、「兼時」
「惟風」(元松) (春日詣 一四二)、「惟元」(春日詣一四三)、「正光」
「忠実」 「惟房」 「頼明」 (嵯峨の院 一六七)、「義則」 「道忠」
「楠武」 「村公」 「治近」 「直明」 「兼幹」 (嵯峨の院 一七八)、「秀遠」
「遠忠」 (嵯峨の院 一八六)、「種実」 (嵯峨の院 一八七)、「並則」
「行経」 (内侍のかみ 三八七)、「村方」 (内侍のかみ 三九五)、「国時」
(内侍のかみ 四一八)、「時正」 (国譲・下 七七〇)、「兼覧」
(楼の上・下 九二〇)であり、行事の場面に登場することが多い。

その他にも、一度のみ登場する人物に、博士の「中臣門人」(俊隆 九)、左衛門督の「藤原清正」(春日詣 一四〇)、正頼三の君の婿で宰相の「藤原直正」(春日詣 一四二)、蔵人の「藤原仲遠」(春日詣 一四三)、「藤原員親」(嵯峨の院 一五九)、宮内少輔の「源直松」、雅楽召人で左衛門尉の「藤原諸直」(嵯峨の院

一七八)、仲頼の父「源祐成」(嵯峨の院 一九〇)、種松の妻の父「源恒有」(吹上・上 二四三)、権少将「藤原仲正」(内侍のかみ 三九四)、忠雅三男「源仲清」(内侍のかみ 三九五)、中納言従三位兼左兵衛門督「藤原正仲」、中納言中宮大夫従三位「源文正」(内侍のかみ 四三二)、「作物所の預かり」の名かと思われる「志津川仲経」(内侍のかみ 四四〇)、絵解のみで登場する秀才「菅原協足」(沖つ白波 四六二)、左の馬頭「源宗良」(楼の上・上 八七〇)などがある。

また『伊勢物語』と同様に、言葉遊びと思われる登場人物もいる。「さるべき歳老いたる大舎人の神輪大古といふ」(楼の上・上 八七七)のように、年老いた人物名に「大古おほこ」という名前を与えている。

また、涼に対しても、

仲忠、「かれは、誰ぞ」と言ふ。「涼」と、いらへて言ふ。仲忠、「おはせねど、いとよく吹くめり」。「涼」とて、秋風にもなし給ふかな。ここにこそ隠れられたりけれ。ただ今、切に求めさせ給ふめるは」。(内侍のかみ 四〇八)

というように、涼がいなくても今日は涼しい風が吹いていると名前の言葉遊びのような受け答えをしている。ここには涼が吹上の浜出身であることも併せての連想だろう。

涼は嵯峨院の子であるが、「涼」という一文字の名前は、歴史上の嵯峨源氏が源信や源融のように一文字の名であったことと重ね合わせがあるだろう。このように姓だけではなく、名にも血筋や系譜を表す意味が込められている場合がある。

『うつほ物語』で多くの登場人物の固有名が記される理由には長編作品という広がりをもつための手段であったと考えられる。

五、「男」の名前を明かさないう意味

『伊勢物語』では、主人公は「男」とされ、一般名詞としての扱であるが、段が変わり「むかし」と改めて時と場を設定されてもなお、前段と同じ「男」であるかのように語られる場合がある。たとえば、第八十三段の「かの男」などである。

また、「男」の名を「在原業平」だとはしないものの、仄めかす場合もある。第六十三段の「在中将」、第六十四段の「在原なりける男」、第七十九段の「行平のはらから」の「中将」などである。業平とはいわないものの、誰とほぼ特定できるような表現である。

業平の呼称としてよく知られるのは「在五」である。これは、

在原の「在」と、五男の「五」、または五位の「五」を組み合わせたものである^(註18)。

第八十二段には、「右の馬の頭なりける人」について、「時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」というように「忘れた」とされており、このように名前を記さない姿勢から逆に名前が記されていることの意味が問われこととなる。

古注釈^(註19)に、業平が卑官であったためと説明されるころであるが、これは『万葉集』の詠み人知らずは身分の低い者であるため作者が明かされないと解釈されていることと同様である。

また、『伊勢物語』という作品名を初めて提示した作品は『源氏物語』であった。「伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず」(②絵合巻 三八一)であり、「業平が名をや朽すべき」と主張する平内侍に、藤壺は「在五中将の名をばえ朽さじ」と肩を持つ。『源氏物語』には『伊勢物語』＝業平＝在五中将という図式が絵合巻で提示されており、総角巻では「在五が物語」と表現されているが、『伊勢物語』とみなしてよいだろう。

『狭衣物語』では「在五中将の日記」という業平を筆者とみる意図の呼称もある。『伊勢物語』がなぜ「伊勢」なのかは諸説あり、未だ決着を見ない問題の一つであるが、「在五」という業平を特定しうる呼称を冠して呼ばれていた作品であるということ

は大きい。「読者」は主人公「男」について、無名の男として読みながらも、実是在原業平であることを暗黙の了解としている。秘密の共有とでも言うべき効果がある。

実名で登場する人物たちには、血縁関係や政治背景など事実上の立ち位置を背負わされており、名前の〈音〉に言葉遊びの要素を持つ者もいる。

そうした人物たちと交流する「男」には一般名詞としての男ではなく、『伊勢物語』主人公の「男」としての情報が付与されていく。業平の和歌を読むが業平とは呼ばれない「男」。

現在辞書項目で「在原業平」を引いてみても、『伊勢物語』の内容を踏まえて説明しているものが多い。これは、『伊勢物語』主人公「男」は全てが真実としないまでも、ほぼ業平のことであると現代においても享受されているといえるだろう。

在原業平という人物は、『日本三代実録』の卒伝(元慶四年五月二十八日条)のよく知られた一節である「業平體貌閑麗。放縱不拘。略無^二才學^一。善作^二倭歌^一。」だけをとってみても、より詳しく知りたいと思わせる十分な吸引力を持っていた。

業平のイメージと業平の和歌から作られる物語は、業平の名前を伏すことよって、より増幅されていく。人は「見るな」と禁じられれば、見たいという欲求が増すように、名前の明かされない主人

公についても、誰なのかと探求する思いが抑えられないはずである。『伊勢物語』で「男」の名前を決して明かさない理由は、こうしたところにあるのではないか。

六、おわりに

『伊勢物語』は〈名〉に対する意識が強い作品である。〈名〉が使われる表現としては、「名のみ立つ」のように、浮き名を流すという表現が多いが、その他に、「名にしおはば」という句が二度使われている。東下り章段の一つである第九段には、「名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしや」と詠まれている。そして、東に下る第九段と対称的に西の筑紫へ行く第六十一段には、「名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬ着るといふなり」とある。

いずれも和歌において、「〜という名前をもつてをいるのならば」という言葉遊びの発想であり、名前の〈音〉に対する興味が強く表れている。『伊勢物語』は固有名のもつ力、仮名という文字が可能にした〈音〉で繋がる世界で物語を展開したことを、次章以降確認していく。

【注】

(注1) ソールA. クリプキ『名指しと必然性』産業図書、一九八五年。

W. G. ライカン『言語哲学』勁草書房、二〇〇五年。田中克

彦『名前と人間』岩波書店、一九九六年。

(注2) 『折口信夫全集ノート編 第13巻』(折口博士記念古代研究所

編 中央公論社、一九七〇年)。

(注3) 森本茂『伊勢物語全釈』(大学堂書店、一九七五年)。

(注4) 阿部方行「勢語二条の後物語の注記ははたして後人注か―伊勢

物語論序説」(『言語と文芸』第一〇六号、一九九〇年九月)。

(注5) 『伊勢物語古注釈書コレクション』第4巻 伊勢物語童子問』片

桐洋一編、和泉書院、二〇〇三年六月)。

(注6) 石田穰二『新版 伊勢物語』(角川文庫、一九七九年)。

(注7) (注4)に同じ。

(注8) 河地修『伊勢物語』第十七段「注疏稿」(『文学論藻』第八十

二号、二〇〇八年)に、「この十七段を十六段に含めて(ある

いは従属させて)詠むという読み方ももっと検討していい読み

方だろう。」という意見がある。今後考察したい。

(注9) 山田清市『伊勢物語成立論序説』(桜楓社、一九九一年)第一

篇第一章 伊勢物語の構成意識による。

(注10) 井川健司「伊勢物語の実在人物章段・続考―39・77・101段と

史実―」(『平安朝文学研究』復刊第一巻第一号、一九八一年七

月)。

(注11) (注3)に同じ。

(注12) (注6)に同じ。

(注13) 『続日本後紀』承和十二年三月二十五日条。「辛未。有勅。召

大宰員外帥正三位藤原朝臣吉野。還配山城國。但不聴入京。」

(注14) 神尾暢子「伊勢物語の行平章段」(『学大國文』第二十九号、

一九八六年三月)。

(注15) 原國人『伊勢物語 成立とその世界』(笠間書院、一九七四年)

第四章 百一段の場合。

(注16) (注3)、(注10)などによる。

(注17) ただし、「さがの」は「嵯峨野」のような地名を名にした女房

名の可能性もある。

(注18) 在原氏系図を見ても、業平が五男であるかは確認できず、位

という変動性のあるものを呼称とするかは疑問であるが、五位は業

平の極官であるため、いつ頃流布した呼称であるかも問題とな

るだろう。

(注19) 『首聞抄』、『惟清抄』、『闕疑抄』など。

第二章 惟喬親王と紀有常

—「友」と「供」—

二、紀有常と「男」—第一六段・第三十八段における関係—

一、はじめに

『伊勢物語』の主人公「男」は、名前を明記されることはない一方で実名が明記される人物たちが登場する。彼らの多くは実際に存在した人物として特定され、史料から在原業平と何らかの接点を持っていたことが、先行研究によって明らかにされている¹⁾。しかし、「男」²⁾在原業平ではないように、実名で登場する人物も実在の人物自身ではない。彼らは、実名とその実在に付随するイメージを物語に持ち込む。そして、『伊勢物語』という作品の中で、「男」との関係を再構成する。主人公「男」の名前を明かさないう『伊勢物語』中で、実名表記される人物が登場する意味は何か。

本論では、最も多く実名で登場する、紀有常が実際の在原業平とは義理の父と息子という関係であったにもかかわらず、作品内で「友だち」と設定されていることに注目し、『伊勢物語』における「友」・「友だち」について考察する。

紀有常は、第十六段・第三十八段・第八十二段に登場している。初登場である第十六段は、以下の通りである。

むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごとくもあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。年ごろあひ馴れたる妻、やうやう床はなれて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたる所へゆくを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくを、いとあはれと思けれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかういまはとてまかるを、なにごとくもいささかなることとえせで、つかはすこと」と書きて、奥に、

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十とはいひつつ四つはへにけり

かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物まておくりてよめる。

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君をたのみ来ぬらむ

かくいひやりたりければ、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

よろこびにたへで、また、

秋やくるつゆやまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

第十六段の冒頭で「むかし、紀の有常といふ人ありけり」と、まるでこの段の主人公の如く登場する。「男の一代記風」と称される『伊勢物語』だが、「男」以外の人物で「むかし」と語り始められる段はこの段が最初である。「三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のこともあらず」と政治的な立場を失った人物として描かれ、「人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こ

と人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず」と経済力も失っているが、風流さだけは失わないとされている。

しかし、妻が出家することになり、家庭さえも失う。そこに物語主人公である「男」が「ねむごろにあひ語らひける友だち」として登場する。「男」と有常の関係を「友だち」と明確にしているのは第十六段のみである。出家する妻に「なにことも、いさかなることもえせて、つかはすこと」しかできない貧しい有常を援助し、「友だち」は「夜の物」と歌を贈る。

次に有常が登場するのは、第三十八段である。

むかし、紀の有常がりいきたるに、歩いて遅く来けるに、よみてやりける。

君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふら

む

返し、

ならばねば世の人ごとになにをかも恋とはいふと問ひしわれしも

ここでは「男」が有常を尋ねて行ったが、留守で待たされたこ

とから「恋」を知ったと詠む。「紀の有常がり」という表現^(注2)や、改めて「紀の有常」の人物設定がされていないことから、第十六段で「ねむごろにあひ語らひける友だち」とされた二人の親しい関係は継続している。第十六段で、有常の妻は出家しており、「ならばねば」の有常の返歌は自虐的にも読めるが、友情の親しさを恋愛感情に置き換えた男性同士による疑似恋愛ともいえる戯れの和歌である^(注3)。

また、第十六段で「かの友だち」が有常に送った和歌は、『続千載和歌集』巻第十四(恋歌四)一五三九番に収載されている。業平を詠み人とし、「としだにもとをとてよつはへにけるをいくたび人をたのみきぬらん」とある。第十六段では対象が「君」、ここでは「人」であるという異同はあるが、同歌が「恋歌」として採られていることに注目すべきである。

この点について、山田清市は、「勢語第十六段の背景と切り離して、「人を」の集の本文をもって歌を解するならば、恋歌になる要素が極めて高い歌である。ことによると本来恋歌であったものを、友情歌にすりかえた可能性は十分生まれてくる。^(注4)」と述べている。

このような疑似恋愛歌をやりとりする「友だち」関係にある二人、有常最後の登場となる第八十二段では、この二人が惟喬親王

の狩りの「とも」をしている。

三、惟喬親王と紀有常と「男」——第八十二段における関係——

むかし、惟喬親王の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒のみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りてかざしにさして、かみ、ながし、も、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる、世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また、人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき

とて、その木のもとには立ちてかへるに、日暮になりぬ、御供なる人、酒をもたせて野よりいで来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まゐる。親王のたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来にけり

親王、歌をかへすがえす誦じたまうて、返しえしたまはず。

紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、酔ひて入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端逃げて入れずもあらなむ

親王にかはりたてまつりて、紀の有常、

おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も入らじを

この第八十二段では「馬の頭なりける人」について「時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」とされているが、『伊勢物語』が「男」の名前を明かさないので終始一貫した姿勢であり、今更明言する必要はないはずである。わざわざ、時間の経過を理由に忘れたとすることで、逆説的に惟喬親王と紀有常の名前は忘れなかったということを示しているだろう。

ここで、在原業平・紀有常・惟喬親王ら三人の関係を整理しておきたい。業平と有常は、『古今和歌集』(巻十五恋歌五・七八四・七八五)の詞書において義理の親子関係にあつたとみられている。

業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはかへりのみしければ、よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから

返し、

なりひらの朝臣
ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがふる山の風はやみな

「あま雲の」の歌には詠み人が記されておらず、有常の歌とするか、有常の娘の歌とするか解釈が分かれるところであるが、業平が有常の娘に通っていたという点に注目したい。一方、同歌が詠まれる『伊勢物語』第十九段^注までは、「男」と「官仕へしける女の方に、御達なりける人」との贈答歌となっており、有常の娘を介在させない。つまり、『伊勢物語』の有常と「男」は、舅と婿の関係として描かれていないのだ。

また、紀有常と惟喬親王は、叔父と甥の関係であった。惟喬親王の母は三条の町と呼ばれた紀静子であり、有常の妹である。第六十九段の斎宮について、所謂〈後人注〉の「斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬親王の妹」という一文から、「男」と惟喬親王が斎宮という女性を媒介にした関係として描かれるが、これは物語が意図的に結んだ線であって、事実上の業平と有常、有常と惟喬親王を繋ぐ血縁関係は一切排除されている。三人の間を繋ぐ女性が排除されているのである。

事実上の血縁関係と『伊勢物語』内での人間関係を踏まえて、今一度、第八十二段を読むと気になる言葉が浮かび上がる。

四、「狩り」と「やまと歌」

第八十二段で彼らは「狩り」を目的にした集団にもかかわらず、酒と和歌に興じるばかりである。『伊勢物語』における「狩り」とは、初段の「奈良の京春日の里にしるよしして、狩りにいけり」と出かけた先で「いとなまめいたる女はらから」を垣間見する場面や、第六十九段の斎宮に出逢う「狩りの使」など、恋と深くかかわり、恋の隠喩ともいえる言葉^注である。つまり、「狩りはねむごろにもせで」とは、恋をしないという意味を含んでいると考えられる。

また、『伊勢物語』中で「やまとうた」と表現されるのはこの箇所のみであることに注目したい。佐藤裕子^注は、水無瀬・交野と実際に行われた狩りを結びつけ、「やまと歌」と表現される背景には、漢詩をつくる機会となっていた嵯峨天皇の遊獵が意識されていたことを指摘し、「嵯峨天皇の詩会が、遊獵中とはいえ、公的な、政治的な場であったのに対し、八十二段は逆に、惟喬親王と周囲の人々の「狩」を、私的なもの、非政治的なものとして打ち出していると考えられよう」と考察している。

「非政治的なもの」とされていることは、惟喬親王章段として

続く第八十三段と第八十五段にも表れている。「さてものさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで（第八十三段）「や、「おほやけの宮仕へしければ、つねにはえまうでず（第八十五段）」とあり、惟喬親王のお側にもつと長くいたいのだが叶わない理由として、「おほやけのこと」、「おほやけの宮仕へ」と障害と表現されている。すなわち、惟喬親王との関係は公のことではない、私的なものとして描かれているのである。

また、「やまと歌」という言葉が同時代に用いられているのは、『古今和歌集』の仮名序の冒頭、「やまとうたは、人のこころをたねとして、万よろづのことはとぞなれりける」の一文である。「いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける」という、和歌に対しては皆平等であることを謳った精神は、第八十二段でも「その木のもとにおりて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり」にみられる。

「かみ、なか、しも」と身分階級を三つに分け、集団内の上下関係を一旦意識させるものの、「みな歌よみけり」と「やまと歌」を詠むことによって、その上下関係を解消させる。

「その木のもとにおりて」という表現も、諸注釈では「馬から下りた」と解される部分だが、桜の木の下に座り、枝をかざし

に挿すことで視覚的にも高低差をなくし、一同を平面的な位置に置こうとする意図があるのでないだろうか。段末尾で有常が「おしなべて峰もたひらになりなむ」詠むところにも、イメージのレベルで、この平面化意識が表れているだろう。

『伊勢物語』はそれぞれ独立した体裁をとりながら一連の流れをもっている。第八十三段の「例の狩しにおはしますとにも」という「例の」には前段の第八十二段を指している。紀有常についても、第三十八段、第八十二段では登場の度に説明されないのは、第十六段の人物設定を受けているからである。第十六段で「友だち」とされた「紀有常」と「男」の関係はその後もしき続いている。この「友だち」二人が第八十二段で惟喬親王の「御供」をしていることに注目してみたい。

五、「友」と「供」

『日本国語大辞典（第二版）』によれば、「供」は「とも（友人のとも）と同語源」とある。勿論、第八十二段では、惟喬親王が「あるじの親王」であり、有常が「仕うまつれり」など表現されていることから、惟喬親王に対する「男」・有常の関係は「御

「供」とあるように、従者の「とも」であることは明らかである。

しかし、「とも」には、友だちの意味の「友」も響いているのではないか。つまり、「友だち」の「とも」と「御供」の「とも」は同音であることから、「男」と有常と惟喬親王との関係を友人の「とも」に近づけているとは考えられないだろうか。

「友」と「供」の同音性は、第八段と第九段の解釈において、古注釈書で問題視されている。物語中、最初に「とも」の語が登場するのは、第八段である。「ともとする人ひとりふたりしてゆきけり」である。天福本では仮名表記の「とも」だが、「ともとする人」については、『臆断^{注10}』は第九段に漢字で「友」と記されていることから友人として解釈している^{注10}。

一方、『童子問^{注10}』は、「友」と「供」は〈音〉が通うことを指摘し、従者の意味とみている。「男」が東下りをする理由は、この前の第三段から第六段に位置する二条后章段における悲恋を連想させているが、それは政治性を孕む極めて私的な問題である。

「ともなる人」が「男」の友人であるならば、『古意』が指摘するように、彼らには「男」とともに都を出て東国へ住むべき国を求めに行く理由はないはずである。友情の厚さを表現しているというより、ここは惟喬親王と「男」と有常との関係とは逆に、

「友」に近い従者としての「供」の関係であったと考えられる^{注11}。

その他に、『伊勢物語』に「とも」、「ともだち」が用いられるのは、第十一段、第四十六段、第六十六段、第八十八段、第九段である。どのような関係として用いられているか確認しておきたい。

第十一段は、

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。

忘するなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふま

東下りの途中で「男」が「友だちども」に詠む和歌が、『拾遺和歌集』には「たちばなのただもとが人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとして、この女のもとにいひつかはしける」と橘のただもとが女に詠んだ歌となっている。

第十六段の「年だにも」の歌が恋歌として『続千載和歌集』に入っているという例と同様に、この第十一段の歌も詞書きを取り払ってみると、恋愛歌として成立する要素を持っている。

第四十六段には、

むかし、男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経ておこせたる文に、

あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやしたまひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。といへりければ、よみてやる。

目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればおもかげに立つ

というように、「いとうるはしき友」が「かた時もさらずあひ思ひける」存在として描かれる。『愚見抄』（『続群書類従』第十八輯上）では「まことの友だちをいへり。是も女をいへるにや。」としているが、「人の国」へ行く理由は任官によると考えられ、これも男性間の「友」と考えられる。ここでも「世の中の人」が対照的に持ち出され、第三十八段での「世の中の人は恋といふらむ」など一般論と比較する点も共通する。

第六十六段では、

むかし、男、津の国にしる所ありけるに、あにおとと友だちひきめて、難波の方にいきけり。渚を見れば、船どもあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る船

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

というように、ここでは兄弟と並列される存在であり、世の中に對する憂いの感情を共有する者たちとして描かれている。

第八十八段では、

むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集まりて、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

「友だちども」というように、第十一段と同じく友だち集団が登場する。「いとわかきにあらぬ」者たちの集まりの中の一人である男が「老い」についての和歌を詠む構図だが、「いとわかき

「にあらぬ」の表現からこの「友だちども」は年齢が皆変わらな
者たち、同世代の集団であろう。

最後、第百九段では、

むかし、男、友だちの人を失へるがもとにやりける。

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに恋ひむ
とか見し

「友だちの人の失へる」とあり、妻と思われる「人」を亡く
した友人に対して、慰めの歌を贈っている。第十六段で妻が出家
した有常との関係にも似た、妻が不在の場での友人関係が描かれ
る。

以上が『伊勢物語』における「友」、「友だち」が登場する段で
あるが、これらの例から「友・友だち」がどのような存在である
かについて三点挙げられる。①常に一緒にいたい存在であるこ
と、②思いを同じくする者であること、③最後に女性が不在の空
間で男性のみの関係で使われることである。

『日本国語大辞典(第二版)』には、「とも」の語源説として「何
事も諸共にするので、共の義」が挙げられ、「その者・物と同質
で同じ集団を構成する要員をさしている。仲間。つれ。」という

意味もある。

先ほど挙げた『伊勢物語』の「友・友だち」の意味①・②につ
いては「とも」の基本的な意味と重なる。しかし、③女性が不在
の空間で男性のみの関係で使われることについては、辞書的な意
味の範疇にはなく、『伊勢物語』特有の用いられ方といえる^{注120}。

六、男性間における「友」

「友だち」に詠んだとする和歌を、詞書を取り払って見たとき
に、恋愛歌の趣をもっていることは先述の通りだが、『伊勢物語』
での「友」、「友だち」もまた、第三十八段や第四十六段にみら
れるように、女性不在の空間で同性間の疑似恋愛、または同性愛
ともいえる和歌を贈答する存在である。

このような、男性同士の歌のやり取りに恋愛歌の要素をもった
ものとして、『伊勢物語』以前にも『万葉集』巻第十七の同伴家
持と大伴池主との贈答歌が指摘されている^{注121}。二人の膨大な歌
の贈答に同性愛の感情を認める呉哲夫の論は、「同伴」という姓
を持つ家持が、歌を通じて「身分の上下関係を捨象した」と指摘
する^{注124}。しかし、直木孝次郎も上代の「とも」の表記について

は、伴を友の意味に用いた歌は『万葉集』には一首もないことから、「友と伴はまったく通用していない^(注15)」と述べ、辰巳正明は、「交友のありようを支えたのは『文選』贈答の方法^(注16)」と呉の論を批判する。倉又幸良は、こうした男性同士による恋愛表現方法を持つ和歌の流れがあることを受け、『伊勢物語』で「友」の語を持つ章段が物語中に散在していることに注目し、

「友」の章段は、恋する男の一代記を支えるために所々に布置され、特に物語前半においては、男の恋の若さと激しさに対応して、異性愛的一面を抱え込んだのである。「友」の章段は、一代記を支え続けるために、物語前半では異性愛的にならざるをえなかったのではないか。「友」の章段の異性愛的一面には、伊勢物語固有の一代記性を見なければならぬ。^(注17)

このように、男性同士の疑似恋愛歌、同性愛雰囲気について否定的な論もあるが、呉論における歌によって身分の上家関係をなくすという構図の萌芽は認められる。『伊勢物語』において女性不在空間で登場する「友・友だち」には、異性との恋の代替となる役割が求められていたとしても、双方に共通した意識が必要となる。業平と紀有常の義理父子関係が、「男」と有常の「友だち」とされ、有常と惟喬親王の叔父と甥の関係が「御供」と変えられ、

血縁関係を消し去っているところに、精神的連帯感を強調していると考えられる。これには、婚姻による血縁関係で摂関政治を行う藤原氏への強烈な皮肉が透かし見えないだろうか。

七、政治的關係に対する精神的關係「とも」

第十六段で「三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごとくもあらず」と背景設定の中で登場した紀有常は、その「紀有常」という名前政治的落伍者のイメージを付与されている。史料^(注18)見る紀有常は、文徳天皇の時代に次々と叙任されているようにみえる。この背後には有常の妹で「三条の町」と呼ばれていた「静子」が、文徳天皇に寵愛されていたことが影響していると考えられる。

しかし、清和天皇の時代に入ってから、これら叙任も滞りがちとみえ、この原因には静子との間に生まれた惟喬親王と、藤原良房の娘・染殿の后との間の惟仁親王の所謂「位争い」に敗北したからだとされる。『三代実録』の清和天皇即位前紀^(注19)には、三人の兄を超えて清和天皇となる惟仁親王が、わずか生後九ヶ月で立太子したことから巷に「三超の歌」が流行したことを伝えて

いる。『史部王記』や『江談抄』^(注20)に、文徳天皇には惟喬親王に位を譲る意思があつたが、太政大臣の藤原良房に憚り、実現できなかつたこと、後に『大鏡裏書』や『平家物語』、『曾我物語』などに立太子争いがあつたと描かれていく。

片桐洋一^(注21)など、この「位争い」について否定する見方もあ
るが、実際にあつたか否かの論議は別とし、第十六段の冒頭では、
有常が政治的敗北者として造型している。第十六段で「紀有常」
という実名を明かしていることに関して、花井滋春は、「両者が
等質の反俗的且つ反逆精神で結ばれていたことを強調する^(注22)」
とし、神尾暢子は、「権力闘争に対抗させるものとして、友情を
位置づけた^(注23)」と描かないことでより強く政治性を表している
と論じる。

「男」と政治的敗北者としての「紀有常」を「友だち」とし、
血縁関係を見せないことにより、世代差を無くし、疑似恋愛愛的な
和歌のやりとりによって、男性同士の連帯感を強める。「男」に
は二条后章段の悲恋と反藤原氏意識も底流しており、政治的にも
家庭も失つた有常と共有できる要素がある。「あひ語らひける友
だち」同士である二人の關係に「御供」として仕える惟喬親王が
加わることにより、政治的敗北者集団の雰囲気はますます濃厚に
なる。彼らが「やまと歌」によって共有する風流意識の裏側には

藤原氏による摂関政治により、政治の表舞台から退場した哀愁が
漂う。

八、おわりに

惟喬親王に対して「男」と紀有常は主従關係であるが、精神的
連帯感を核とした集まりであることを強調している。「御供」で
あつても、「公の宮仕へ」を対岸においた、極めて私的な關係で
ある。「友だち」關係にある「男」と有常が「御供」をしている
ことに、「友」と「供」という二つの異なる關係を近づけ、惟喬
親王を奉る一方で、「男」と有常の「友だち」關係に取り込むよ
うな連帯感を強めていると考えられる。

「とも」という言葉が持つ、友情關係と主従關係という異なつ
た意味を区別しながら、一方で同化させる意識は第八十二段にあ
る「かみ、なか、しも」と身分差を意識させながら、直後「みな
歌よみけり」と同化させるにも表れている。

勿論、繰り返すが、惟喬親王とは「友」ではなく基本的に「主」
と「供」の主従關係にある。しかし、有常の実名を明かす反面、
婚姻による血縁關係を消し去り、女性を排除した空間でのみ現わ

れる「友だち」として「男」と有常の関係は結ばれ、より精神面を強調した関係を築き上げる。

二人が惟喬親王の「供」となることで、「やまと歌」によって風流な精神的世界を共有する者たちの集合の核となる存在に惟喬親王を置くが、根底には政治的敗北者の連帯感がある。紀有常登場章段は、いわば惟喬親王章段への布石であるといえるが、そこに政治的敗北者としての影と、「紀有常」という、在原業平と惟喬親王の血縁関係を持つ実名が必要であったといえる。

【注】

〔注1〕『伊勢物語』に実名表記登場人物全体について論じたものには、

深町健一郎「『伊勢物語』の実名章段論—業平とのかかわりについて—」（『中古文学論攷』第三号、一九八二年十月）、

河地修「『伊勢物語』の実名章段と和歌」（『文学論藻』第71

号、一九九七年三月）、松田喜好「実名登場章段—伊勢物語

の鑑賞5」（『一冊の講座伊勢物語』有精堂出版、一九八三

年三月）などがある。

〔注2〕石田穰二は、「「がり」は、のもとへ、の意。愛する人同士、あ

るいはごく親しい人に限って使われる。」（『新版伊勢物語』角

川書店、一九七九年）とし、「ここに「紀有常がり」と言った

のは、主人公の男と有常との親密な関係を意識しての言葉づ

かいと見てよいであろう。ゆえに、一六段を踏まえての制作

ということとは動かぬであろう。」（『伊勢物語注釈稿』竹林舎、

二〇〇四年）とする。

〔注3〕渡辺実校注『日本古典文学集成』（新潮社、一九七六年）では「男

は長く待った末に、遅く戻って「来」た有常と会い、翌日に

でも自宅から「やりける」なのである。」という状況とし、

「女と逢った後朝のような格好」としている。

〔注4〕山田清市『伊勢物語成立論序説』（桜楓社、一九九一年）第一篇

第四章による。

〔注5〕返歌の初句に異動があるが、『古今和歌集』と同歌を用いてい

る。むかし、男、官仕へしける女の方に、御達なりける人を

あひしりたりける、ほどもなく離れにけり。同じ所なれば、

女の目には見ゆるものから、男は、あるものかとも思ひたら

ず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるも

のから

とよめりければ、男、返し、

天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみ

なり

とよめりけるは、また男ある人となむいひける。

〔注6〕上野英二「狩と恋—伊勢物語ノート」（『成城国文学』第16号、

二〇〇〇年三月）は「狩は恋であった。ここに『伊勢物語』の

狩の本質がいかなるものであったか、明らかだろう。狩は、女

性を狩ったのだ。」と『伊勢物語』における「狩」と「恋」を

等号で結ぶ。

〔注7〕佐藤裕子「伊勢物語八十二段の生成—「狩」の設定を中心に—」

〔中古文学論攷〕第2号、一九八一年十一月。

〔注8〕『契沖全集第九卷』久松潜一監修・築島裕(他)編集、岩波書店、一九七四年。

此段より下奥州まで下られたる事は、別の段にかけとも皆さきの段の末也。ともとする人は友とする人也。下にある人のいはく。かきつばたといふいつもしをくのかみにすゑてたひの心をよめといひければとあるは、此友の中也。古今集旅部に、兼輔の玉くしげふたみの浦はと云哥の詞書にも、ともに有ける人く哥よみけるつゐて」によめるといふは従者なり。これにはかはれり。

〔注9〕第八段の「ともとする人ひとりふたりして」の一文を持たない塗籠本系では、第九段も仮名表記の「とも」とされている。

〔注10〕『伊勢物語古注釈書コレクション』第四巻『片桐洋一編、和泉書院、二〇〇三年〕。

「友」といふ字をかきたりとても、それは、訓のかよふによりて書事、常の事なれば害なし。もとより、かな書は字義にはよらざる事なりけり。されば、此「とも」は、従者のことと見るべし。「一人二人」とい、つき随ふ者、わづかに一人二人して行ける成べし。(中略)「むかし、男、京やすみうかりけん」と

有に、友をかたらふべき理なく、人に知らせず、しのびてこそ出べければ、「従者とするもの、ひとり二人」にこそ理もかなふべけれ。友と見る、おもはざる説なるべし。

〔注11〕第八十二段では「その木のもとにおりて」と桜の木の下に皆で座るが、第九段でも八つ橋に着き、「その沢のほとりの木のかけにおりて」と木の下に座る点は共通する。

〔注12〕平安時代の用例として他作品では、『古今和歌集』(友一四例、友だち一三例)、『大和物語』(友だち一三例)、『平中物語』(友だち一九例、友だちども一三例、こと友だちども一例)、『うつほ物語』(友一十三例、友だち一六例)、『源氏物語』(友一十例、友だち一二例)の用例を検討した。

〔注13〕一例として、『万葉集』巻第十七の贈答歌を挙げておく。

八月七日夜集ニ于守大伴宿祢家持館一宴歌

あきのたの ほむきみがてり わがせこが ふさたをりける
をみなへしかも (三九六五)

右一首守大伴宿祢家持作

をみなへし さきたるのへを ゆきめぐり きみをおもひい
で たもとほりきぬ (三九六六)

あきのよは あかときさむし しるたへの いもがころもで

きむよしもがも(三九六七)

ほととぎす なきてすぎにし をかびから あきかぜふきぬ
よしもあらなくに(三九六八)

右三首掾大伴宿祢池主作

(注14) 「万葉の「交友」——大伴家持と同性愛——」(『日本文学』第44卷
第1号、一九九五年一月)。

(注15) 「七、八世紀におけるトモの表記について——友と伴を中心に
——」(『萬葉』第154号、一九九五年七月)。

(注16) 「交友論——家持の同性愛批判——」(『日本文学』第44卷第11号、
一九九五年十一月)。

(注17) 『伊勢物語』の「友」の物語——恋の一代記の支え——(「相模女
子大学紀要(人文・社会)」A 63号、二〇〇〇年三月)。

(注18) 『日本三代實録』元慶元年正月二十三日条(『國史大系第四卷』
黑板勝美・國史大系編修會編、吉川弘文館、一九三四年)。

廿三日乙未。從四位下行周防權守紀朝臣有常卒。有常者左
京人。正四位下名虎之子也。性清警有_二儀望_一。少年侍_二奉
仁明天皇_一。承和中權拜_二左兵衛大尉_一。數年右近衛權將監。
兼_二近江權少掾_一。仁壽初遷_二左馬助_一。是年授_二從五位
下_一。爲_二但馬介_一。左馬助如_レ故。俄而右兵衛佐兼讚岐

介。尋授_二從五位上_一。遷_二左近衛少將_一。讚岐介如_レ故。
天安元年自_二左近衛少將_一。遷爲_二伊勢權守_一。同年除_二少
納言_一。兼_二侍從_一。明年遷_二肥後權守_一。貞觀九年爲_二
下野權守_一。秩滿爲_二信濃權守_一。十五年授_二正五位下_一。
十七年爲_二雅樂頭_一。十八年至_二從四位下_一。爲_二周防權
守_一。卒時年六十三。」

『古今和歌集目錄』紀有常(『群書類從 第五輯』塙保己一編、
統群書類從完成會、一九六四年)。

正四位下名虎男。承和十年正月任_二左兵衛大尉_一。
嘉祥三年補_二藏人_一。四月二日任_二左近將監_一。五月十七
日兼_二近江權少掾_一。文德御時。仁壽元年十一月廿六日敘_二
從五位下_一。七月十六日任_二左馬助_一。三年正月十六日任_二
左兵衛佐_一。齊衡元年正月兼_二讚岐介_一。二年正月七日敘_二
從五位上_一。十五日任_二左近少將_一。兼。四年九月廿七日任_二
少納言_一。天安二年二月五日兼_二肥後權守_一。貞觀七年三月
一日任_二刑部權大輔_一。十三年三月二日兼_二信濃權守_一。
十五年正月七日叙_二正五位下_一。十七年正月十三日任_二雅樂
頭_一。十八年正月七日叙_二從四位下_一。元慶元年□月十五
日任_二周防權守_一。

河地修『伊勢物語』の十六段について」（『伊勢物語』―諸相と新見―）一九九五年、風間書房）に、物語中、官職名を記すことなく、いきなり実名で呼び表すのは紀有常と源至、順のみであり、作者から親愛の情の反映であるとしている。

〔注19〕『日本三代実録』清和天皇即位前紀 天安二年八月（『国史大系第四卷』經濟雜誌社、一八九七年）。

天皇。諱惟仁。文德天皇之第四子也。母太皇太后藤原氏。太政大臣贈正一位良房朝臣之女也。嘉祥三年歲在_二庚午_一三月廿五日癸卯。生_二天皇於太政大臣東京一條第_一。十一月廿五日戊戌。立為_二皇太子_一。于_レ時誕育九月也。先_レ是有_二童謡_一。云。大枝乎超天走超天躍止利騰加理超天。我耶護毛留田仁耶。搜阿左理食無志岐耶。雄々伊志岐耶。識者以為。大枝謂_二大兄_一也。是時。文德天皇有_二四皇子_一。第一惟喬親王。第二惟條親王。第三惟彦親王。皇太子是第四皇子也。天意若曰超_二三兄_一而立。故有_二此三超之謡_一焉。

〔注20〕米田雄介・吉岡真之校訂『史料纂集吏部王記』（統群書類従完成会、一九七四年）、『江談抄』第二雜事（一）（『新日本古典文学大系』山根對助・後藤昭雄校注、岩波書店、一九九七年）。

〔注21〕片桐洋一『在原業平・小野小町 天才作家の虚像と実像』（新

典社、一九九一年）によると、「參議以上の人が皆無の紀氏を外戚とする惟喬親王より、最高権力者である右大臣藤原良房を外祖父とする惟仁親王が立太子するのは、当時としては、いわば当然であつて、長子相続が原則となつている後代の常識で事を推し測ることは適當ではない」とある。

〔注22〕『伊勢物語』実名表記攷―有常と惟喬の物語から―」（『國學院大學大学院文学研究科論集』第10号、一九八三年三月）。

〔注23〕「伊勢物語の有常章段」（『伊勢物語の成立と表現』新典社、二〇〇三年）。

第三章 崇子と多賀幾子

—二人の「たかい子」—

一、はじめに

『伊勢物語』の登場人物の女性は「二条の後」、「五条の後」、「染殿の後」というように表現されているが、個人を特定し得る呼称に過ぎず、実名ではない。なかでも「二条の後」は、主人公「男」との恋が語られ、女主人公的役割を担う重要人物であるが、「高子」と呼ばれることはない。女性の名前を明かすことが忌避された時代背景を考慮すれば当然のことである。

では、なぜ第三十九段の「たかい子」と第七十七段・第七十八段の「多賀幾子」の二名は名前を明かされるのか。まず、二名とも死者として登場していることに注目したい。

・むかし、西院の帝と申すみかどおはしましけり。そのみかどのみこ、たかい子と申すいまそがりけり。そのみこうせたまひて、御はぶりの夜、その宮の隣なりける男、御はぶり見むとて、女車にあひ乗りていでたりけり。・・・(第三十九段)

・むかし、田邑の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまそがりけり。それうせたまひて、安祥寺にてみわざしけり。・・・(第七十七段)

・むかし、多賀幾子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。・・・(第七十八段)
ともに帝に近い位置にあった女性が亡くなり、その葬送や四十九日などの法要の場に集まった人々を中心に物語が展開している。しかし、なぜ彼女たちが「たかい子」・「多賀幾子」という特定的人物である必要があるのか。「たかい子」は「西院の帝」である淳和天皇の皇女、「多賀幾子」は「田邑の帝」である文徳天皇の女御である。一人ずつどのような人物であったのか確認していきたい。

二、崇子内親王

「たかい子」の名前が明かされる第三十九段は次の通りである。

・むかし、西院の帝と申すみかどおはしましけり。そのみかどのみこ、たかい子と申すいまそがりけり。そのみこうせたまひて、御はぶりの夜、その宮の隣なりける男、御はぶり見むとて、女車にあひ乗りていでたりけり。いと久しう率てい

でたてまつらず。うち泣きてやみぬべかりけるあひだに、天の下の色好み、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、蛍をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この蛍のともす火にや見ゆらむ、ともし消ちなむずるとて、乗れる男のよめる。

いでていなばかぎりなるべみともし消ち年経ぬるか

泣く声を聞け

かの至、返し、

いとあはれ泣くぞ聞ゆるともし消ちきゆるものともわ

れはしらずな

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。

至は順が祖父なり。みこの本意なし。

まず、「西院の帝と申すみかど」の「みこ、たかい子」とはいかなる人物であったのか。『続日本後記』の承和十五年五月十五日条に、「無品崇子内親王薨。淳和太上天皇之皇女也。母橘氏云々」とある。『皇胤系図』、『日本紀略』、『一代要記』などから、母は「橘船子」であったことが知られる。享年については、『勢語臆断』

では十九歳とされて以来、若くして亡くなった皇女とされている^{注1}。

また、松田喜好は、崇子の母が橘氏であることに注目し、この第三十九段の物語の背景に「承和の変」の存在を透視している^{注2}。承和の変では、橘逸勢と伴健岑が謀反を企てたとされて流刑に処せられ、また、伴健岑が春宮坊の帯刀であったことから、恒貞親王の廃太子にまで発展した。既に天長六年に祖父である橘清野を亡くしていた崇子内親王は、「永名・逸勢兄弟を後見人として頼っていた」とし、また、反対に「崇子を媒介にして永名・逸勢兄弟は春宮恒貞親王に接近したのではなかったか」と松田は推察している。

承和の変の結果、恒貞親王は廃太子となり、事件処理にあたった藤原良房は、自身にとって邪魔な伴氏・橘氏に加えて、嵯峨源氏の勢力をも削ぐことに成功し、さらに藤原愛発や藤原吉野は追放されることにもなった。良房は愛発に代わって大納言に進み、恒貞親王の代わりに良房娘明子腹の道康親王が立太子し、そして後に文徳天皇となる。承和の変、それはその後の良房の将来を決定づける重要な事件としてあった。

ここで伴氏と橘氏だけではなく、嵯峨源氏の勢力までも押さえることができたのは、恒貞親王の母が嵯峨天皇皇女の正子であるこ

とによる。正子内親王は嵯峨天皇の後・橘嘉智子を母とし、淳和天皇の寵愛を受けていた人物であり、この第三十九段に登場する源至と崇子内親王の関係を系図上で繋ぐ人物といえよう。

加えて、承和の変では、業平の父・阿保親王が大きく関わっている。なぜなら、承和の変が発覚したきっかけは、阿保親王が策謀を知り、嘉智子に伝えたことによるからである。母を橘氏とし、若くして亡くなった皇女崇子、その縁者は、承和の変に巻き込まれた政治的敗北者といえる。

第三十九段は「たかい子」の葬送を舞台として、業平を思わせる「その宮の隣なりける男」と、嵯峨源氏である「天の下の色好み、源の至といふ人」とが登場していることから、そのような承和の変を絡めた読みが可能となるといえよう。

次に「田邑の帝と申すみかど」の「女御、多賀幾子」についてはどうか。

三、女御多賀幾子

第七十七段、第七十八段は次のようにある。

むかし、田邑の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すみまそがりけり。それうせたまひて、

安祥寺にてみわざしけり。人々ささげ物奉りけり。奉り集めたる物、千ささげばかりあり。そこばくのささげ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動きいでたるやうになむ見えける。それを、右大将にいまそがりける藤原の常行と申すいまそがりて、講の終るほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせたまふ。右の馬の頭なりけるおきな、目はたがひながらよみける。

山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

とよみたりけるを、いま見れば、よくもあらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。(第七十七段)

むかし、多賀幾子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大将藤原の常行といふ人いまそがりけり。そのみわざにまうでたまひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします、その山科の官に、滝落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるにまうでたまうて、「年ごろよそには仕うまつれど、近くはいまだ仕う

まつらず。こよひはここにさぶらはむ」と申したまふ。親王喜びたまうて、よるのおましの設けさせたまふ。さるに、かの大将、いでてたばかりたまふやう、「官仕へのはじめに、ただなほやはあるべき。三条の大御幸せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石奉れりき。大御幸ののち奉れりしかば、ある人の御曹司の前のみぞにするたりしを、島このみたまふ君なり、この石を奉らむ」とのたまひて、御隨身、舍人して取りにつかはす。いくばくもなくともて来ぬ。この石、聞きしよりは見るはまされり。これをただに奉らばすずるなるべしとて、人々に歌よませたまふ。右の馬の頭なりける人のをなむ、青き苔をきざみて、蒔絵のかたにこの歌をつけて奉りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのな
ければ

となむよめりける。(第七十八段)

『日本文徳天皇実録』によると、嘉祥三年七月九日、多賀幾子は文徳天皇女御となつてゐる。『日本三代実録』の天安二年十一月十四日条が、「從四位下藤原朝臣多可幾子卒。多可幾子者。右大臣從

二位良相之第一女也。少有「雅操」。と藤原良相の娘である」とやその人柄を伝えている。

そして、『伊勢物語』中では明示されていないが、「右大将にいまそがりける藤原の常行」は、この多賀幾子の兄弟である。常行と多賀幾子の父は藤原良相であり、良相は良房の弟である。第七十八段で常行が言う「三条の大御幸せし時」とは、貞観八年三月二十三日に藤原良相邸の西三条に清和天皇が行幸したことを指し、常行と基経は揃つて正四位下に叙せられている^(註)。藤原基経は長良の息子で、二条后となつた高子の兄であるが、明子以外に男子のなかつた良房の養子となり、良房の後継者となっている。常行と基経はこの三条大御幸の時には同じように昇位していたのである。

しかし、この数日後に応天門の変が起きる。応天門の変は、大納言伴善男が応天門の放火を左大臣源信の犯行だと右大臣良相に告げるも、反対に、太政大臣良房によつて善男らが犯人であるとされ流刑になつた事件である。この一件も、良房にとつて好都合なものであり、基経は中納言へ昇進する。事実上失脚した良相と交代するよう、常行は右大将となるが、基経と常行の差は歴然たるものがある。

第七十七・七十八段では、常行の官位表記「右大将」について、神尾暢子は、常行の「極官表記とすれば、大納言が適当」だが、常行の右大将は、右大臣左大将良相の左大将辞任と交替に実現し、異例の参議正四位下での任用であったことから、「常行の大将は、常行個人にも、良相一家にも、特筆すべき任用だったのである^{注5}」と指摘している。常行が右大将となったのは、『日本三代実録』によると、貞観八年十二月十六日であり、貞観十七年二月十七日に薨じるまで、右近衛大将であったため最終官職でもある。しかし、多賀幾子が亡くなった天安二年の時点では、まだ右少将であって、右大将ではなかった。

第七十七段では「右の馬の頭なりけるおきな」、第七十八段では「右の馬の頭なりける人」とあるが、業平が「右の馬の頭」であった時期をみると、貞観七年三月九日から貞観十七年一月十三日の間である。常行が「右大将」であり、業平が「右の馬の頭」であった時期は重なり、天安二年よりも後の貞観八年から十四年の間となる。

また、第七十八段に登場する「山科禪師の親王」については、人康親王があらわれるが、親王の出家は『日本三代実録』によると、貞観元年五月七日で、女御多賀幾子の死後であり、時期が合わない

^{注5}。さらに、中野まゆみは、当時の安祥寺の実態からみて、多賀幾子の盛大な法要が行えるような状況にないため、本来は別の女御の法要だったのではないかと推論している^{注6}。

このように、多賀幾子の死、「三条の大御幸」、官位表記などの日時の特定を可能にする表現がある一方で、それぞれが矛盾するため、ある特定の一時期を確定することはできない。史実的な時間設定を拒むような表記となっている。

四、同音の名前

皇女崇子と女御多賀幾子の背景には、それぞれ承和の変や応天門の変という事件があり、その結果、彼女たちの近親者が政治的に敗北するという憂き目に遭っている。だが、これらの事件の渦中にあるとは言い難い「たかい子」「多賀幾子」の死を物語はなぜ描くのであろうか。

それは名前の〈音〉にあるのではないか。言うまでもなく、「たかいこ」と「たかきこ」の名前は似ている。木之下正雄は形容詞のイ音便化について次のように述べている。

形容詞のイ音便（以下、単に「イ音便」と呼ぶ。）は、地藏十輪経元慶七年（八八三年）にトイコト（敏）とあるそうで

あるが、仮名文学では古今集(九〇五年)のアマネイ子、後撰集のキヨイ子などの人名に見える。これは、イ音便は談話語ではかなり古く発生したのであるが、崩れた言い方として文章では用いられなかった、人名だけは改めようがないのである。そのままに記載された、と解する^(注7)

つまり、「たかいこ」と「たかきこ」は元々同じ名前であったと考えられる^(注8)。「たかいこ」といえば、『伊勢物語』中では「二条の後」と呼ばれる藤原高子も「たかいこ」である。

『日本三代実録』には、改名した「たかいこ」の例が四名みられ、改名の理由はいずれも「中宮」の諱を憚ったため^(注9)、とある。貞観十八年十一月廿九日に清和天皇が、陽成天皇に譲位し、その母である二条后高子は皇太夫人となったことによる。角田文衛は、このことから「高子を別の名に改めた者は、かなりの数に上ったことであろう。従ってこの時分には、藤原高子と名乗る女性には、上流、中流の貴族の間に多数いたものと推断される^(注10)」としている。

「高子」の名乗れるのは二条の後ただ一人。「たかい子」と「多賀幾子」が死者として描かれる理由はこうした背景も踏まえていよう。

第二部第一章で述べたように、「たかい子」「多賀幾子」以外に、『伊勢物語』に実名で登場する人物の名前に言葉遊び的な要素があることは既に指摘されている。

実名が表記される人物の名前の(音)からの連想が問題化されているならば、「たかい子」と「多賀幾子」の名前にも、それぞれが皇女と女御であった点をも含めて、「高い」つまり、高貴な女としての意味を併せ持たせていたと考えられる。

五、第三十九段たかい子登場前後

『伊勢物語』は段毎に「むかし、」と時と登場人物、場所を設定し直す定型から、共通項を持つ章段としてのまとめられ方はあるものの、従来成立論等の問題を絡めた段毎の解釈が主流である。一方で「男」の初冠から終焉までの一代記風であるとも説明される作品でもある。ここでは、作品の配列上、どのように解釈できるかを中心に考察する。

まず、皇女「たかい子」が登場する第三十九段の前後、第三十七段から第四十五段までの物語の流れを概括してみたい。

第三十七段には「色好みなる女」が登場し、「男」に「夕影またぬ花」と詠まれ、「あひ見るまでは解かじとぞ思ふ」と返す。第三

十八段では、「歩いて遅く来ける」紀の有常を待つ「男」の擬似恋愛歌めいた贈歌がある。第三十九段では、皇女「たかい子」の葬儀の夜、「いと久しう率ていでたてまつらず」と出棺されるのを待っていたところ、女車に同乗していた「男」が「天下の色好み源の至」と和歌を贈答する。ここまで「待つ」という状態が共通している。また、第三十九段の「いでていなば」という歌の言葉を引き継ぐように、続く第四十段でも「いでていなばたれか別れのかたからむありしにまさる今日はかなしも」と詠まれる。第四十二段では「いでてこし」、第四十四段では「いでてゆく」と変化しており、表現に関連性が認められる。

また、第三十九段の皇女「たかい子」の死に続き、第四十段では「いやしければ、すまふ力もなし」の女との仲を引き裂かれた「若き男」の死と蘇生が描かれる。段末で「むかしの若人」と「今のおきな」を比較しており、続く第四十一段では「女はらから」の夫が各々「いやしき男」と「あてなる男」として対称的に描かれる。そして、第四十段の「むかしの若人」や第四十一段の「女はらから」という語からは、「いとなまめいたる女はら」に初冠したばかりの「男」が狩衣の裾を切り、歌を送る初段が想起される。男の詠む和歌の引歌を明らかにする手法^{注1）}や、「狩衣の裾をきりて」や、

「うへの衣を張り破りてけり」という衣を破損するという点でも初段と第四十一段とは共通している。

第四十二段では、再び「色好み」の女が登場し、第四十三段では「賀陽の親王」が思いをかけていた女に、「なまめきてありける」と「われのみと思ひける」人の二人の男が配されているが、この構図は第三十九段で、女車を見て、それに男が同乗しているとも知らずに「なまめ」いてきた源至の姿と重なるだろう。

賀陽の親王の寵愛を受けながらも、男の機嫌をとる女は「色好み」とは表現されないものの、一人の女と複数の男という構図は、物語における色好み譚の流れを受けている。さらにいえば、親王が思いをかけていた女に接近する「男」は、第六十五段で「水の尾」つまり清和天皇に入内後も二条の后と関係を持つ「男」のミニチュア版と見ることもできる。

第四十五段では「ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ」と高く飛び上がる蛍が詠まれる。第三十九段では女車に入れられた「蛍」が再び使われるが、ここでは空に上る亡き「人のむすめ」の魂のように描かれている。

以上、第三十九段前後を表現や登場人物の構図に注目し追ってみた。「色好み」をキーワードにした男女関係や、第四十、四十一段

には「いやしい」身分にも言及した表現が続く。「むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさにしなむや。」と閉じられる第四十段からは『伊勢物語』の前半部をまとめる気配がある。

六、第七十七・七十八段多賀幾子登場前後

同様に、女御「多賀幾子」登場の第七十七段前後として、第七十六段から第八十四段までをみてみたい。第七十六段では「男」は「おきな」と呼ばれ、『伊勢物語』全体で転換となる段である。第七十六段で「おきな」が二条の後の御車から禄を賜り、「大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ」と歌を奉るが、この「山」の表現は第七十七段では、人々の捧げ物を「右の馬の頭なるおきな」が「山もさらに堂の前に動きいでたるやうになむ見えける」と見間違え、「おきな」は「山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし」と詠む。第七十八段は「山科禪師の親王」に奉る「おもしろき石」へと転換する。「あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ」と心を見せる手段として捧げ物を奉る由を詠む。

第七十六段の「人々禄たまはる」は、第七十七段では、反対に「人々捧げもの奉りけり」と対称的に描かれ、第七十七段では「歌よむ人々」の様子が描かれ、第七十八段では「人々に歌よませたまふ」、第七十九段では「人々歌よみけり」となる。

また、第七十六段は、二条后との恋を懐古する内容であるが、「神代のこともおもひいづらめ」と詠む背景には、第二段から第六段の男と二条后の恋を想起させる。第七十七段で多賀幾子の法要を「春の別れ」と詠んでいるが、これは、第四段の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」に通じるだろう。

第七十九段は業平の兄、行平の娘腹の定数親王を「氏のなかに親王生まれたまへりけり」と在原氏一族を浮かび上がらせた後、「わが門に千ひろあるかげを植ゑつれば夏冬たれかかくれざるべき」と詠み、続く第八十段には「おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり」というように、藤原氏の隠喩である藤の花を植える。ともに氏族意識が表面化しており、「千ひろある影」や「藤の花」を植えて藤原摂関家を暗示している点でも共通する。

第八十一段では、「左のおほいまうちぎみ」、つまり源融の邸宅が舞台となり、第八十二、八十三、八十五段では惟喬親王のもとに集まる人々が描かる。第七十六段から第七十八段では、人々が歌を

詠むことが描かれてきたが、第八十一段は「酒飲みし遊びて」、第八十二段は「酒をのみ飲みつつやまと歌にかかれりけり」、第八十三、八十五段では「大御酒たまひ」と酒を飲み、集団で和歌を詠んでいる。

そして、集団の構成員は、第八十一段の「左のおほいまうちぎみ」邸では「親王たち」であり、惟喬親王のもとには、第八十二段では「かみ、なか、しも」、第八十五段では「俗なる禪師なる」といった人々となっている。加えて、第八十二段の登場人物は、第七十八段と酷似している。

第八十三段で惟喬親王が出家することや、親王と「右の馬の頭なりける人」と「常」の字を名に持つ者という共通点があり、皇統につくことなく出家した親王を中心に、「政治の表舞台から脱落した者の集合体」である。

唯一の差異は、第七十八段では、「山科禪師の親王」と常行の関係を「官仕へ」関係としているのに対し、第八十三段では、「さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで」とあり、さらに八十五段では、「おほやけの官仕へしければ、つねにはえまうでず」とあるように、惟喬親王に仕えたくとも、「おほやけの官仕へ」ゆえにそれがかなわないとしている。

また、惟喬親王章段中におかれた第八十四段でも「官仕へ」は、死の迫った「宮」である母に会いに行きたくとも行けない障害となっている。

このように前後の段との関連の見えていくと、一連の流れがあり、対称的かつ類似的に相互に関連するよう配列されている。この部分には、第七十六段を契機に「おきな」となることから、『伊勢物語』後半部として過去を懐古し、一族意識を持ちつつ「官仕へ」をする「男」が描かれているといえる。

このように、前後段に共通・反転した要素を拾い上げると、「たかい子」前後には色好み性、「多賀幾子」前後には政治性が浮き上がるのである。色好み性と政治性、それは二条后章段の重要な構成要素であった。

七、「たかい子」の死

「たかい子」と「多賀幾子」の登場する前後を中心に『伊勢物語』全体の流れをみると、『伊勢物語』前半にあたる第三十九段、皇女「たかい子」には、女車の存在から一人の女に対して複数の男が懸想するという色好みの構図が見られ、『伊勢物語』後半になる第十七段、「多賀幾子」には、前段に藤原氏の氏神を祀った大原野神

社に二条の后が参詣する場面を置くことで、話の輪郭がより明確になっている。

これらは、二条后章段の発端である色好みの側面と結末となる政治的側面を分担していよう。天皇との関係が明示され、高貴な女をイメージさせる「たかいこ」——この名前は、以上のような流れを踏まえて見ると、二条の后となった高子の暗示となる。

二条后章段の核となる第三段から第六段は前半部に置かれているが、「男」の一代記風である『伊勢物語』全体を通して「二条后」は第七十六段と第九十五段にも登場する支柱である。色好みと政治性という、物語の大きな主題を担った二条后章段は、鬼に食われるという異界で一応の結末は描くものの、その後も燻り続けている。

第三十九段では、「いでていなばかぎりなるべみともし消ち年経ぬるかど泣く声を聞け」と詠む「男」に、「天の下の色好み源の至が」「いとあはれ泣くぞ聞こゆるともし消ちきゆるものともわれはしらずな」と返すが、至の詠む和歌こそ二条后章段における「男」の心情であり、第七十七段でおきなが詠む「山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし」も、二条后章段にある第四段の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にしで」にある「春の別れ」を思い起こさせる。

「たかい子」と「多賀幾子」という二人の死が描かれる理由は、二条の后高子と関係あるのではないか。

八、おわりに

『伊勢物語』には「高子」という名前も二条後の死も描かれない。史実に則して考えるならば、二条后高子が崩御するのは、延喜十年（九一〇）であり、「男」である在原業平が没した元慶四年（八八〇）より三十年後であるため、「男」の終焉で幕を閉じる『伊勢物語』中には描けなかつたのだろう。「男」との逃亡に失敗した「女」は二条の后として生き残った。「男」にとつての「ただ人」高子は死んだに等しい。藤原摂関家の二条の后と、政治的敗者となった一族の皇女「たかい子」と女御「多賀幾子」は対極的な位置にある。「たかい子」と「多賀幾子」の死を描くことは、二条の后高子の疑似葬送場面ということになる。色好み性と政治性を帯びた中に「たかい子」・「多賀幾子」の死を持ち出し、葬送と法要を行い、二条の后高子の死を疑似的に代行し、再び密かに葬ることであつたのではないだろうか。

しかし、葬り別れを告げるものの、思いは消えず、法要を営み、繰り返す「春の別れ」を思い出すしかない。二条后章段の後半とし

て『伊勢物語』は「たかい子」、「多賀幾子」の名前を必要としたのである。

【注】

〔注1〕 井川健司「伊勢物語の実在人物章段・続考」39・77・101段と

史実―（「平安朝文学研究」復刊第一巻第一号、一九八一年七月）は、「通例によれば親王宣下は二、三才の頃であるから、承

和2年の時点にて崇子二、三才とみなすと、生誕は天長10年

（833）か承和元年（834）、薨去が承和15年（848）であるから享

年は一五、六才であったと推定される。」と計算し、皇女研究会

「皇女総覧（十四）―崇子内親王（淳和天皇皇女）、新子内親王

（仁明天皇皇女）」（「瞿麦」12巻、二〇〇〇年十月）は、「崇子

の生年が父・淳和の即位前後とすれば、内親王の享年は二十歳代であった。」としている。

〔注2〕 「崇子内親王」の登場背景『伊勢物語攷』笠間書院一九八九年

九月）。

〔注3〕 『日本三代実録』貞観八年三月二十三日条

廿三日己亥。鸞輿幸^二右大臣藤原朝臣良相西京第一^一。観^二櫻

花^一。…是日。進^二参議右大弁從四位上兼行播磨権守大江朝

臣音人。参議右近衛権中将兼備前守藤原朝臣常行。参議左近衛

中将兼伊豫守藤原朝臣基経階^一並加^二正四位下^一。

〔注4〕 「伊勢物語の老翁表現」（『学大国文』第二六号、一九八三年二月）。

〔注5〕 『日本三代実録』貞観元年五月七日「四品守彈正尹兼行常陸大守

人康親王入道。」また、「山科禪師の親王」には、業平の叔父に

あたる高岳親王をあてる説もある。

〔注6〕 伊勢物語七七段「安祥寺での多賀幾子法要」存疑―「田邑帝の

女御」は藤原古子か」（『国文学研究』一〇八巻、一九九二年十月）。

〔注7〕 「形容詞イ音便化の条件」（『国語国文』27巻11号、一九五八年

十一月）。

〔注8〕 池田龜鑑『伊勢物語に就きての研究（1）』（校本篇）（有精堂出

版、一九八六年）によると、多賀幾子の校異が特に多く、塗籠

本系では、第七十七段に該当する段がないため、女御「たかき

こ」ではなく、第七十八段に登場する「山科禪師の親王」を表

す「きたのみこ」となっている本文もある。また、天福本系紹

巴本に第七十七段の「女御」が「みこ」となる校異があるが、

これは多賀幾子と第三十九段のたかい子を混同したと考えら

れる。天皇との関わりを強調し、語り出されている。この冒頭

表現も、時を経て名前が混同することを避けるためではないだ

ろうか。

(註9)

①春澄高子(治子)元慶元年二月廿二日甲子。掌侍従從五位上春澄高子。改ニ名治子一。以レ觸ニ中宮諱一也。②安倍高子

(基子)③葛木高子(賀美子)元慶元年閏二月七日己卯。正五

位下安倍朝臣高子改ニ名基子一。外從五位下葛木宿祢高子改

ニ名賀美子一。以レ觸ニ中宮諱一也。④源高子(雅子)元慶

元年閏二月十三日乙酉…從五位下源朝臣高子改ニ名雅子一。

以レ觸ニ中宮諱一也。

(註10)

「あやなくの恋 二条の後 藤原高子」(二条の後藤原高子―業平との恋)幻戯書房、二〇〇三年)。

(註11)

初段の「春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」は、「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくにといふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」と『古今和歌集』卷一四(恋四)七二四番歌の「題しらず 河原の左大臣」の源融の歌を踏まえたものであることを明かす。第四十一段でも、「男」の「むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」の後に「武蔵野の心なるべし。」とあり、『古今和歌集』卷一七

(雑上) 八七六番歌「題しらず 詠人しらず」の「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」を踏まえたことを指す。

第三部『大和物語』について

第一章〈前半〉の終段と物名歌

一、はじめに

『大和物語』は『伊勢物語』と同じく「歌物語」と分類される作品だが、『伊勢物語』が在原業平を思わせる「男」を主人公に据え、一代記風の流れを見せるのに対し、『大和物語』には作品全体を通じての「主人公」が存在しない。『伊勢物語』が在原業平の名前を出さないのに対し、『大和物語』では、多くの登場人物の名前が有名・無名を問わず明かされているという点でも対照的である。

『大和物語』は、通常百七十三段からなる物語で、最初から読み進めていくと、「享子の帝」、つまり宇多天皇を中心とした人間関係や、その時代、延喜から天慶あたりまでを舞台にしていることが分かる。しかし、読み進めるにつれ、そうした時代よりも前の、あるいはいつのことなのか、時代が具体的に設定できない話が現れる。伝説・伝承・説話といった話であり、明らかに前の方とは異なる趣を見せている。

「第一部」と「第二部」、「前篇」・「後篇」など研究者によっても表現は異なるが、構成上作品が二つに分かれるという点では一致し

ている。しかし、どこで線引きするかという点で意見が分かれている。

本論では、〈前半〉と〈後半〉として、『大和物語』の構成を考察していく。『大和物語』と『伊勢物語』の表現や意識の問題とかかわらせて『大和物語』〈前半〉〈後半〉と分ける意義について、また、「歌物語」と呼ばれる作品の形式についても考察してみたい。

二、『伊勢物語』との関係

まず、『大和物語』はその作品名の由来が諸説あり^(注1)、断定できないものの、可能性の一つとして、『伊勢物語』の「伊勢」に対しての「大和」という説があるほど、先行する『伊勢物語』を意識している作品だといえ、その意識は、冒頭の初段にも表れている。『伊勢物語』初段は以下の通りである。

むかし、**男**、**a**初冠して、**b**奈良の京春日の里に、しるよ
しして、狩にいにけり。その里に、**いとなまめいたる女はら**
らすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいと
はしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、**c**着た
りける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺り

の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりし
られず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこととも
や思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれ
ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをな
むしける。

『伊勢物語』の初段は名を明かされない「男」が初冠をして奈良
の京春日の里に行くところから始まる。これに対し、『大和物語』
初段では、「亭子の帝」つまり、宇多天皇が讓位をしようとしてい
る内裏が舞台となる。

亭子の帝、A いまはおりゐさせたまひなむとするころ、B 弘
徽殿の壁に、伊勢の御のC 書きつけける。

わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむことのな
にか悲しき

とありければ、帝、御覽じて、そのかたはらに書きつけさせ
たまうける。

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもな
どか見ざらむ

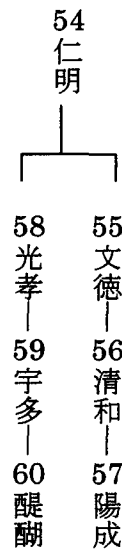
となむありける。

『伊勢物語』では主人公「男」から「いとなまめいたる女はらか
ら」へ歌を狩衣の裾に書きつけて贈るが、『大和物語』では、伊勢
の御という歌人で有名な女性の伊勢が弘徽殿の壁に書きつける。
『大和物語』の初段は、女性からの和歌で始まっているのである。
また、『伊勢物語』では「男」から「女はらから」へ贈った歌と、
その元歌となる源融の歌が示されるだけで、女からは返歌があつた
のかどうかは記されない。初冠の後、女性へ和歌を贈るといふ成人
男性となるべき通過儀礼を行っただけで満足したかのように「かく
いちはやきみやび」と評されている。

一方、『大和物語』の方は伊勢の歌を見た宇多天皇が傍らに返歌
を書きつける。しかし、伊勢がすでに宮中を去っていたとしたら、
この返歌を目にすることができたかはわからない。一見、一対の贈
答歌の形を成しながらも、返歌が届いていない可能性もある。この

問題については、次章で詳細を論じるが、ここでは、形式上は贈った和歌に返歌があるという点において、『伊勢物語』とは対照的であることを指摘したい。

また、『大和物語』は宇多天皇退位から物語を始めているが、これは『伊勢物語』の後を引き継ぐ意味があるのかもしれない。簡潔に皇統を凶にすると左記のようになる。



『伊勢物語』中の登場人物や時代背景を史実に照らし合わせると、舞台は清和天皇の頃を中心にしており、「男」との恋愛が語られる二条の後を母とする陽成天皇は全く登場しない。

しかし、第百十四段に「仁和の帝」つまり、陽成天皇が藤原基経によりわずか一七歳で廃位となり、次に即位した光孝天皇の芹川行幸の話がある。この芹川行幸は仁和二年（八八七）に行われているため、元慶四年（八八〇）に亡くなった業平の物語として読みたい読者には齟齬が生じる段である^{注3}。

文徳・清和・陽成の皇統から、光孝・宇多・醍醐と続いていく皇統への変化という点でも大きな分岐点であり、臣籍降下していたものの、親王宣下を受けて即位した宇多天皇の存在は、その皇統の正

当性という点でも注目されていた。『日本三大実録』や『類聚国史』の編纂や、『寛平御時后宮歌合』などの歌合という文化的側面で正当性を示そうとしたと考えられる。

そうした宇多天皇の退位の話から始める『大和物語』には、『伊勢物語』の「後の時代」という意識が垣間見えるのだが、この点については後述する。

三、第百四十段説・第百四十六段説

『大和物語』の構成の話に戻すと、〈前半〉をどこまでにするか、という説は、百四十段とする説と百四十六段とする説に分かれている。それぞれの説を要約すると以下のようなになる。

百四十段説は高橋正治が「第一部は藤原摂関政治下の現実における人間像の様々な様相を描き、第二部はその昔の純愛に生きる人間の清純な姿」が描かれている^{注3}として、これは『新全集』の頭注にも引き継がれている。

これを受けて、今井源衛は藤原摂関政治下という時代背景の捉え方を疑問視しながら、前半後半部の線引きには賛同している^{注4}。松尾拾は、『大和物語』中の時を表す語を取り出して分類する方法で『伊勢物語』と比較して考察している。百四十一段以降は、『伊

勢物語』と性格が異なることから、百四十一段以降の特異性に注目している(注5)。

柿本奨は百四十一段がいつの世ともしれぬ昔話であり、長文の説話章段であることから、前段との間に格差と変貌を見出しているが、断絶ではなく、主題としてのつながりを認めている(注6)。高橋亨もこうした論に倣い、百四十段までを一区切りとしているが、両者も明確に区分されているのではなく、百四十一段から百四十六段までが媒介的な位置を占めて連続していると説く(注7)。

柳田忠則は、百四十一段百四十二段に指摘される虚構性を作者の構成意図であると解して、百四十段までを前半と捉えている(注8)。また、百四十六段までを前半とする説には、南波浩が、初段から百四十六段あたりまではおおむね「歌語り」から取材したとし、百四十一段から九段ほどは伝説に取材しているものの、その他は違うとしている(注9)。

片桐洋一は百四十六段までが、亭子院讓位から大和物語成立まで五十年余りのことを描いているのに対し、百四十七段以降は「昔・・・ありけり」を多く含み、奈良時代以降かとも思われる話があることから区分している(注10)。

妹尾好信は百四十一段以降に描かれる時代が若干若いことを指

摘しながらも、登場人物名や官職名を記すという原則が崩れていない点から百四十七段以降とは一線を画すとしている(注11)。

雨海博洋は初段が亭子院の讓位から始まり、百四十六段が亭子院の行幸が描かれることから、初めと終わりの対応関係となっていることを根拠としている(注12)。

少数派ではあるが、百四十四段までを〈前半〉とする説がある。藤岡作太郎は、百四十四段の在次の君、在原業平の息子である滋春が、最後辞世の歌を詠む点などが『伊勢物語』の結末に頗る似ていると指摘してこれを前半の終わりとしている(注13)。

〈前半〉を百四十段までと捉える高橋亨が「媒介的な位置を占めて連続している」と表現した通り、〈前半〉(後半)を断絶させるべきではない。しかし、百四十段までを「一区切り」とする説には根拠がやや希薄という印象が否めない。百四十一段を見ると、以下のようにある。

よしいるといひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心もなく、いとよく語らひてゐたりけり。かくてこの男は、ここかしこ人の

国がちにのみ歩きければ、ふたりのみなむるたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、人のとかくいひければ、よみたりける。

夜はにいでて月だに見ずはあふことを知らずがほにもいはましものを

となむ。かかるわざをすれど、もとの妻、いと心よき人なれば、男にもいはでのみありわたりけれども、ほかのたよりより、「かく男すなり」と聞きて、この男思ひたりけれども、心にもいれで、たださるものにておきたりけり。

さて、この男、「女、こと人にもいふ」と聞きて、「その人とわれと、いづれをか思ふ」と問ひければ、女、

花すすき君がかたにぞなびくめる思はぬ山の風は吹けども

となむいひける。

よばふ男もありけり。「世の中心憂し。なほ男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうやう思ひやつきけむ、この男の返りことなどしてやりて、このもとの妻のもとに、文をなむひき結びておこせたりける。見ればかく書けり。

身を憂しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむら

む

となむ、こりずまによみたりける。

かくて、心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしこともあらねば、かの筑紫に親はらからなどありければいきけるを、男も心かはりにければ、とどめでなむやりける。もとの妻なむもろともになりならひにければ、かくていくことを、「いと悲し」と思ひける。

山崎にもろともにいきてなむ、舟に乗せなどしける。男も来たりけり。このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづのことをいひ語らひて、つとめて舟に乗りぬ。いまは男もとの妻と帰りなむとて車に乗りぬ。これもかれも、いと悲しと思ふほどに、舟に乗りたまひぬる人の文をなむもて来たる。かくのみなむありける。

ふたり来し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでもかへすめるかな

といへりければ、男も、もとの妻も、いといたうあはれがり泣きけり。漕ぎいでていぬれば、え返りこともせず。車は舟のゆくを見てえいかず、舟に乗りたる人は、車を見るとおもてをさしいで、漕ぎゆけば、遠くなるままに、顔はいとちひさく

なるまで見おこせければ、いと悲しかりけり。

「よしいゑといひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり」とあり、その二人の妻との話になるのだが、登場人物がほぼ誰とは特定できない状態である。(前半)の第七段にも、登場人物が「男」と「女」とのみ示される無名章段はある。第四百四十一段に(後半)の特徴である、長大化や伝説・説話めいた傾向があることにより、続く百四十二段も「故御息所の御姉、おほいこにあたりたまひける」の話だが、これも実在した人物の誰を想定したのかもわからない。

故御息所の御姉、おほいこにあたりたまひけるなむ、いとらうらうじく、歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける。わかき時に、女親はうせたまひにけり。**まま母**の手にいますかりければ、心にもものかなはぬ時もあり。さてよみたまひける。

ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく嘆かず
もがな

となむよみたまひける。梅の花を折りてまた、

かかる香の秋もかはらずにほひせば春恋してふながめせ
ましや

とよみたまへりける。いとよしづきてをかしくいますかりければ、よばふ人もいとおほかりけれど、返りごともせざりけり。「女といふもの、つひにかくて果てたまふべきにもあらず。ときどきは返りごとしたまへ」と、**親**もまま母もいひければ、せめられてかくなむいひやりける。

思へどもかひなかるべみしのぶればつれなきともや人の
見るらむ

とばかりいひやりて、ものもいはざりけり。かくいひける心ばへは、親など、「男あはせむ」といひけれど、「一生に男せでやみなむ」といふことを、よとともにいひけるもしく、男もせで、二十九にてなむ、うせたまひにける。

継母との関係がうまくいかなかったように描かれている点、未婚のまま亡くなる女性という点は、前段でもとの妻」と「今の妻」の仲がよいとされている点、「今の妻」が夫の他に別に男を作り、筑紫へ帰る点とそれぞれ対照的といえるだろう。

続く第四百十三・百四十四段は在次君登場段である。ここで今一

度、『伊勢物語』との関連を考えてみたい。

第四百十三段

むかし、在中将のみむすこ在次君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭の中納言のみめひにて、五条の御となむいひける。かの在次君のいもうとの、伊勢の守の妻にいますかりけるがもとにいきて、守の召人にてありけるを、この妻の兄の在次君はしのびてすむになむありける。われのみと思ふに、この男のはらからなむ、またあひたるけしきなりける。さりければ、女のもとに、

忘れなむと思ふ心の悲しきは憂きも憂からぬものにぞありける

となむよみたりける。今はみな古ごとになりたることなり。

第四百十四段

この在次君、在中将の東にいきたりけるけにやあらむ、この子どもも、人の国に通ひをなむ、ときどきしける。心あるものにて、人の国のあはれに心ぼそきところどころにては、歌よみて書きつけなどしける。小総の駅といふ所は海辺になむありけ

る。それによみて書きつけたりける。

わたつうみと人や見るらむあふことの名みだをふさに泣きつめつれば

また、箕輪の里といふ駅にて、

いつはとはわかねどたえて秋の夜ぞ身のわびしさは知りまさりける

とよみて書きつけたりける。

かくて、人の国歩きありきて、甲斐の国にいたりて、すみけるほどに、病して死ぬとてよみたりける。

かりそめのゆきかひちとぞ思ひしをいまはかぎりの門出なりける

とよみてなむ死にける。

この在次君のひと所に具して知りたりける人、三河の国よりのぼるとて、この駅どもに宿りて、この歌どもを見て、手も見知りたりければ見つけて、いとあはれと思ひけり。

ここで注目されるのは、第四百十三段が「むかし」と始まることである。『大和物語』の〈後半〉の段として揺るがない第四百七段の生田川伝説として知られる段も「むかし」と始められている。

しかし、第四百十三段の冒頭「むかし」はそれらと異質と捉えるできであろう。それは、ここでの主人公は在中将の息子である。第四百四十四段でも「在中将の東にいきたりけるけにやあらむ」とあり、在中将のパロディとして登場していることが仄めかされているからである。

つまり、それは在中将こと『伊勢物語』の主人公のパロディである。『伊勢物語』は第十七段を除き「むかし」という統一された冒頭を持っている。よって在中将の息子である在次君登場段の「むかし」を（後半）段の冒頭要素と同一に捉えるべきではない。

続く百四十五・百四十六段は両段とも亭子の帝と「うかれめ」（遊女）の話である。

第四百四十五段

亭子の帝、河尻におはしましにけり。うかれめに、**しろ**といふ者ありけり。召しにつかはしたりければ、まゐりてさぶらふ。上達部、殿上人、みこたち、あまたさぶらひたまひければ、しもに遠くさぶらふ。「かくはるかにさぶらふよし、歌つかまつれ」とおほせられければ、すなはちよみてたてまつりける。
浜千鳥とびゆくかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ

見れ

とよみたりければ、いとかしこくめでたまひて、かづけ物たまふ。

命だに心になふものならばなにかわかれの悲しからまし

といふ歌も、この、しろがよみたる歌なりけり。

第四百四十六段

亭子の帝、鳥飼の院におはしましにけり。例のごと、御遊びあり。「このわたりのうかれめども、あまたまゐりてさぶらふなかに、声おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせたまふに、うかれめばらの申すやう、「**大江の玉淵がむすめ**と申す者、めづらしうまゐりて侍り」と申しければ、見せたまふに、さまかたちも清げなりければ、あはれがりたまうて、うへに召しあげたまふ。「そもそもまことか」など問はせたまふに、**鳥飼**といふ題をみなみな人々によませたまひにけり。おほせたまふやう、「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて、まことの子かとおもほさむ」とおほせたまひけり。うけたまはりて、

すなはち、

あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねどたち
のぼりけり

とよむ時に、帝、ののしりあはれがりたまて、御しほたれたまふ。人々もよく酔ひたるほどにて、酔ひ泣きいになくす。帝、御桂ひとかさね、はかまたまふ。「ありとある上達部、みこたち、四位五位、これに物ぬぎてとらせざらむ者は、座より立ちね」とのたまひければ、かたはしより、上下みなかつけたれば、かづきあまりて、ふた間ばかり積みてぞおきたりける。かくて、かへりたまふとて、南院の七郎君といふ人ありけり、それなむ、このうかれめのすむあたりに、家つくりてすむと聞しめして、それになむ、のたまひあづけたる。「かれが申さむこと、院に奏せよ。院よりたまはせむ物も、かの七郎君につかはさむ。すべてかれにわびしきめな見せそ」とおほせたまうければ、つねになむとぶらひかへりみける。

第四百十五段では、亭子の帝が河尻で「しろ」という遊女に和歌を詠ませ、第四百十六段では、亭子の帝が鳥飼の院で「大江の玉淵がむすめ」である遊女に和歌を詠ませる。「大江」ということは、

阿保親王の異母兄弟で在原姓ではなく、大江姓を賜った元主、音人と連なる血筋であり、第四百十三・百四十四段に引き続き、業平の近親者ということになる。

この第四百十六段までを〈前半〉とする説に賛同したい。根拠としては、雨海博洋が指摘するは初段との対応関係に注目したい。初段に登場した亭子の帝が第四百十六段にも登場していることが〈前半〉としての枠になっていると考えられる。また、続く、第四百十七段は長大な生田川伝説であり、中盤には屏風歌を詠み合う場面での「伊勢の御息所」の存在も、〈前半〉と〈後半〉の最初にそれぞれ「伊勢」が登場する対応関係を指摘している。

また、第四百十六段は、亭子の帝に「鳥飼」を題にして和歌を詠むことを要請された「大江の玉淵がむすめ」は自身の存在証明をかけて「あさみどりかひある」という句に「とりかひ」という言葉を入れた物名歌を詠む。亭子の帝は感動し、その後も気にかげ面倒を見る。第四百十六段の話の中心が、物名歌であることを考察してみたい。なぜなら、これは〈前半〉の随所に現れる特徴の一つだと考えられるからである。

四、物名歌

「物名歌」は『万葉集』から詠まれており、『古今和歌集』にも卷十に「物名」の部立がある。また、「隠題歌」という表現は『俊頼髓脳』に初出とされ、題を隠す歌という意識が強い^(註14)。第四十六段の例は「鳥飼」という名を句跨りて詠み込むという点で隠した、隠題歌といえるが、ここでは、より幅広い枠組みで「物名歌」として考え、最初に「物名」を提示した『古今和歌集』を確認したい。

『古今和歌集』の卷第十・物名には、四二二〜四六八番までの四十七首があり、「墨滅歌」にも五首ある。ここでは題に詠み込む物の名が提示され、その名を詠み込んでいる歌が大半である。最初の四二二番歌のように、

うぐひす

藤原としゆきの朝臣

心から花のしづくにそほちつつうぐひすとのみ鳥のなくらむ

という形である。しかし、他に、「物名」の定義を捉えようとするときに型から外れてくる歌が数首ある。まず、折句になっている四三九番である。

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふいつ
もじをくのかしらにおきてよめる づらゆき
をぐら山みねたちならしくしかのへにけむ秋をしる人ぞな
き

折句としては、業平の「かきつばた」の折句が有名であるが、この歌は卷第九「羈旅歌」の四一〇番に採られている。四六八番には沓冠の歌もある。

はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて時のうたよめ
と人のいひければよみける 僧正聖宝

る 花のなかめにあくやとてわけゆけば心ぞともちりぬべらなる

他に、掛詞でしかない四五三番があり、蕨と藁火を掛けている。

わらび

真せいほうし

煙たちもゆとも見えぬ草のはをたれかわらびとなづけそめけ

む

四二三番は題の「ほととぎす」という語を詠み込んでいるが、他の歌が歌の内容とは関係ない歌を詠んでいるのに対し、内容として題の鶯を詠んでいるという点で異なる。

ほととぎす

くべきほどときすぎぬれやまちわびてなくなるこゑの人をとよむる

『古今和歌集』の物名歌は「技法的に掛詞や縁語と近いものである^(註1)」とされるように、隠題歌に限定しない歌が採られている。菊地靖彦が物名歌を導いたものとして漢詩の感じの篇と旁をばらして詩に詠み込む「離合体」や言葉遊びの「雑体詩」の模倣を指し、次のように述べる。

物名歌とは、あらためていえば、言葉を詠みこむのではなくて、文字を読みこむことである。とすれば、そのことがまっとうに果たされるのは、歌が一字一音の、しかも平仮名で表記されるということが確立したときでなければならぬ。そうであつて

はじめて、「かくし詞」としての「物名」の歌に、新鮮な面白味が感じられたのである。『古今集』は歌を平仮名で表記することをはじめて公的に採用した^(註10)。

また、音韻史の視点から、掛詞の清濁を考察した松本宙も「物名の求めたものは「音の一致」ではなく、「文字（かな）の一致」であつた」「文字上の遊戯」と論じている^(註11)。

では、そのような平仮名が可能にした文字の遊戯、物名歌を多く残しているのはどのような歌人であろうか。『古今和歌集』物名歌の歌人はよみ人知らず歌が八首、歌人が分かる三十九首の内、最も多いのは紀貫之の六首（加えて墨滅歌にも二首ある）、紀友則が五首と撰者が続く。他に、在原滋春が三首採られており、壬生忠岑・藤原敏行・清原深養父が二首、あとはそれぞれ一首のみの歌人である。

在原滋春は『大和物語』第百四十四段でも地名を物名歌として三首詠んでおり注目される。忠岑との贈答歌を含む滋春の物名歌三首は次の通りである。

うつせみ

在原しげはる

浪のうつせみればたまぞみだれけるひろはばそでははかなか

らむや(四二四)

返し

壬生忠岑

たもとよりはなれて玉をつつまめやこれなむそれとうつせ見

むかし(四二五)

にがたけ

しげはる

いのちとてつゆをたのむにかたければ物わびしらになくのべ

のむし(四五二)

すみながし

しげはる

春がすみながしかよひぢなかりせば秋くるかりはかへらざら

まし(四六五)

滋春の歌は『古今和歌集』に全部で六首あり、残りは以下の三首である。

巻第七・賀歌・三五五

藤原三善が六十賀によみける

在原しげはる

鶴亀もちとせのちはしらなくにあかぬ心にまかせはててむ

この歌は、ある人、在原のときはるがともいふ

巻第八・離別歌・三七二

ともだちの人のくにへまかりけるによめる

在原しげはる

わかれてはほどをへだつとおもへばやかつ見ながらにかねて

こひしき

巻第十六「哀傷歌」八六二

かひのくににあひしりて侍りける人とぶらはむとてまか

りけるを、みち中にてにはかにやまひをしていまいとま

りにければ、よみて京にもてまかりて母に見せよといひて

人につけ侍りけるうた

在原しげはる

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし、今はかぎりのかどでなり

けり、

八六二番歌は三句と五句に異同があるが、『大和物語』第四百十

四段とほぼ同じ歌であり、「かひ」が詠み込まれている。滋春は他

に『古今和歌六帖』第四・「いはひ」・二二三六番に『古今和歌集』

の三五五番歌と同歌、第二・「こほり」・二二八六番に、

君がためいのちかひへぞわれはゆくつるのこほりのよはひう

るなり

という一首があるのみで、全体の割合から物名歌が多い歌人といえ

る。

また、宇多天皇にも十二題二十四首すべて物名である『宇多院歌合』がある。遠藤寿一が「亭子院歌合は対外的には「私」の行事だったのである」として、君臣和楽、遊宴性高揚という目的の場であったことを説いており^(註10)、興味深い。『大和物語』が宇多天皇讓位を初段に語るということも、讓位後の宇多院の「私」の部分の物語としての意識が感じられるからである。

『万葉集』以来、物の名を詠み込む歌の技法はあつたが、『古今和歌集』において、掛詞との相関関係によつて発達した。とりわけ、〈音〉ではなく、文字の一致が求められるようになる。掛詞が同時に二つの意味を持つのに対して、物名は和歌解釈上の意味を持たず、言葉遊びの側面が重視されることによつて、「隠題歌」という掛詞との弁別を図つたといえようか^(註11)。

この『古今和歌集』以降は『拾遺和歌集』が巻第七に物名の部立を持つが、『大和物語』と関係の深い『後撰和歌集』にはない。この疑問について、佐藤高明は、『後撰和歌集』が①歌合の歌を無視、②物名歌の技術低下と一般化、③歌物語化の風潮、という三点を挙げ、物名歌には贈答が少ないことから、恋歌に重点を置いた『後撰和歌集』では、部立の一つとして設定しなかつたと論じる¹⁰⁾。

では、物名歌は『大和物語』の中で、どのような場面で詠まれていたのか確認していきたい。

五、『大和物語』の物名歌

『大和物語』では、前掲の第四百四十四、百四十六段までの〈前半〉に第二、五十八、七十段がある^(註12)。

第二段

帝、おりみたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、とどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。備前の掾にて橘の良利といひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれたてまつらでさぶらひける。「かかる御歩きしたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これかれ、さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつつ歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日根といふ所におはします夜あり。いと心ぼそうかすかにておはしますことを思ひつつ、いと悲しかりけり。さて、「日根といふことを歌によめ」とお

ほせごとありければ、この良利大徳、

ふるさとの**たびね**の夢に見えつるは恨みやすらむまたと

とはねば

とありけるに、みな人泣きて、えよまずなりにけり。その名を
なむ寛蓮大徳といひて、のちまでさぶらひける。

第五十八段

おなじ兼盛、陸奥の国にて、閑院の三のみこの御むすこにあ
りける人、黒塚といふ所にすみけり。そのむすめどもにおこせ
たりける。

みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまこと
か

といひたりけり。かくて、「そのむすめをえむ」といひければ、
親、「まだいと若くなむある。いまさるべからむをりにを」と
いひければ、京にいくとて、山吹につけて、

花ざかりすぎもやするとかはづなく井手の山吹うしろめ
たしも

といひけり。

かくて、名取の御湯といふことを、恒忠の君の妻よみたりけ

るといふなむ、この黒塚のあるじなりける。

大空の雲のかよひ路見てしかなとりのみゆけばあとほか

もなし

となむよみたりけるを兼盛のおほきみ聞きて、おなじ所を、

塩竈の浦にはあまや絶えにけむなどすなどりの見ゆる時

なき

となむよみける。

さて、この心かけしむすめ、こと男して、京にのぼりたりけ
れば、聞きて、兼盛、「のぼりものしたまふなるを告げたまは
せで」といひたりければ、「井手の山吹うしろめたしも」とい
へりける文を、「これなむ陸奥の国のつと」とておこせたりけ
れば、男、

年を経てぬれわたりつる衣手を今日の涙にくちやしぬら

む

といへりける。

第七十段

おなじ人に、監の命婦、山ももをやりたりければ、

みちのくの安達の山ももるとともにこえばわかれの悲しか

らじを

となむいひける。

さて、堤なる家になむすみける。さて鮎をなむとりてやりける。

賀茂川の瀬にふす鮎のいをとりにて寝でこそあかせ夢に見えつや

かくて、この男、陸奥の国へ下りけるたよりにつけて、あはれなる文どもを書きおこせけるを、「道にて病してなむ死にける」と聞きて、女いとあはれとなむ思ひける。かく聞きてのち、篠塚の駅といふ所より、たよりにつけて、あはれなることども書きたる文をなむもて来たりける。いと悲しくて、これを「いつのぞ」と問ひければ、使の久しくなりてもて来たるになむありける。女、

篠塚のうまやうまやと待ちわびし君はむなしくなりぞしにける

とよみてなむ泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、かうぶりして、蔵人所にをりて、金の使かけて、やがて親のものにいくになむありける。

第七十段での「おなじ人」とは前段に登場する藤原忠文の息子を

指す。第二段では、「日根」、第五十八段では「名取の御湯」、第七十段では「山もも」が詠み込まれている。「日根」と「名取の御湯」は「小総」「箕輪」「甲斐」（第四百四十四段）、「鳥飼」（四百四十六段）と同じく地名だが、「山もも」は植物名である。しかし、地名ではないからといって、物名歌の規範から外れることはない。

物名歌は前述したとおり、和歌解釈上の意味は持たず、言葉遊び的側面が重視される点に特徴がある。これは、隠題歌ともいわれるようになり、『亭子院歌合』の二十四首が題の名を詠み込みながらも（註）、内容は別の事柄を詠んでいるという点が『古今和歌集』の物名歌との違いだろう。

ここで『古今和歌集』と密接な関係を持つ『伊勢物語』の物名歌といわれるものを確認しておきたい。以下の三段である。

『伊勢物語』 第三段

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき薬といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。

『伊勢物語』 第九十八段

むかし、おほきおほいまうちぎみと聞ゆる、おはしけり。仕うまつる男、九月ばかりに、梅の造り枝に燧をつけて奉るとて、わが頼む君がためにと折る花はときしもわかぬものにもぞありける

とよみて奉りたりければ、いとかしこくをかしがりたまひて、使に禄たまへりけり。

『伊勢物語』 第一百八段

むかし、陸奥の国にて、男女すみけり。男、「みやこへいなむ」といふ。この女、いとかなしうて、うまのはなむけをだにせむとて、おきのゐて、みやこしまといふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきはみやこしまへの別れなりけり

『伊勢物語』第三段の歌は、『大和物語』(後半)の第百六十―百六十六段までの「在中将章段」にある第百六十六段でも詠まれる。これは「引敷き物」か「ひじき物」と解するか解釈が割れるところ

であり、「ひじきも」が隠されているというより、掛詞の範囲ともいえる。

第九十八段の和歌は『古今和歌集』第十七・雑歌上・八六六に初句を「限なき」とある類歌で、「ある人のいはく、この歌はさきのおほいまうち君のなり」と藤原良房の歌であるという左注が付いている。第百八段も『古今和歌集』墨滅歌(巻第十・物名・一一〇四)に小野小町歌として残っている。

これら『伊勢物語』の物名歌と『大和物語』の物名歌の違いはどのような点にあるかという点と、『大和物語』の物名歌は句を跨ぎその語を隠す例が多いことにある。第二段の「旅寝」に「日根」という地名を隠す例は句を跨がないが、(音)の清濁の違いがある。そしてこれは(前半)の特徴といえる。

(後半)の第百四十七段以降には物名歌がほばないが、在中将章段の後、百六十七段に一例ある。

男、女の衣を借り着て、今の妻のがりいきて、さらにみえず。

この衣をみな着破りて、かへしをこすとて、それに雉、雁、鴨をくはへてをこす。人の国にいたづらにみえける物どもなりけり。さりける時に女かくいひやりける、

いなやきじ人にならせるかり衣わが身に触ればうきか
もぞつく

高橋正治は「隠題歌が中心となっている点は、副次的段章の性格が強いことを示す(註2と)」というが、〈前半〉の物名歌には句を跨いだり、清濁の違いを超えて物名を詠み込むという特徴があった。この第六六十七段には三つの物名が読み込まれているが、それぞれ二字ということもあるが、句を跨ぐことがなく、「雉」と「着じ」は清濁も一致している。

『大和物語』〈前半〉の物名歌の特徴は、口頭で読み上げただけではどこに物名が入っているかわからないような、隠された「隠題歌」であることだろう。つまり、文字で書かれたものを読むことを前提としているのではないか。

六、おわりに

『大和物語』の構成を知る上で、〈前半〉部分を第四百十六段までとし、その特徴として、雨海博洋が指摘している初段と同様、第四百十六段にも亭子の帝が登場している点に加え、第四百十六段で詠まれる和歌が「鳥飼」という場所の名を隠した物名歌であり、亭

子院に関係が深いものであることを指摘した。

また、『大和物語』〈前半〉の物名歌の特徴は、句を跨いだり、清濁を超えた表記上の一致を重視していることであり、〈後半〉の「歌語り」といわれる口承性よりも、文字で読むものとしての特徴が示されている可能性がある。

しかし、〈前半〉〈後半〉は断絶したものではない。〈後半〉の最初にあたる第四百四十七段には生田川伝説として知られる長大な段であるが、「むかし、津の国にすむ女ありけり」と始まり、その女をめぐる男二人との三角関係の末、皆亡くなるという結末を語る。最期の女の和歌が「すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり」というように「生田川」は名ばかりの「生く」川であることを嘆き、物の名前の〈音〉に対する意識が示されることも見逃せない。

「むかし」の伝説を語った後、「かかることどものむかしあるけるを、絵にみな書きて、故後の宮の人の奉りたりければ、これがうへを、みな人々この人にかはりてよみける」として、絵を見ながらそれぞれ男や女の立場で詠む人々の中に、「伊勢の御息所」がいる。初段で「伊勢の御」といわれていた歌人の伊勢である。彼女の存在は宇多院周辺の〈前半〉世界と伝説・伝承などの昔語りをする〈後

半〕世界との接点となっている。

初段で登場した亭子院と伊勢、そして物名歌の特徴から、『大和物語』は第百四十六段を〔前半〕の終段とする構成になっていると
考えられる。

【注】

(注1) 『大和物語』という作品名の初出は『伊勢物語』の注釈書である

『和歌知頭集』であるとされ、由来については、①大和の国(唐に対しての日本)のこと、あるいは大和の国の言葉で書いた説、

②大和歌を中心とした説、③『伊勢物語』に対して名付けた説、

④大和を都と指す語としての都物語の説、⑤大和の国(奈良県)の記事が多いことによる説、⑥敦慶親王侍女大和が書いた説、

⑦大和の国の代表的な女流歌人伊勢の作説などがある。(雨海博洋「大和物語の特徴」『歌語り・歌物語事典』勉誠社、一九九七年)

(注2) 物語は主人公を「在原業平」としていないため、問題はなく、第

百十四段と同歌を収載する『後撰和歌集』(巻第十五・雑一・

一〇七六・一〇七七)では詠み人を業平の兄である在原行平として

している。第五句のみ異なる『古今和歌六帖』(第二「おきな」

一三九六)でも、行平を詠み人としている。

(注3) 『大和物語』(塙書房、一九六二年)。

(注4) 今井源衛「松の葉にふる白雪の(大和物語評釈・34)」(『國文學』第十卷第五号、一九六五年四月)。

(注5) 松尾拾「大和物語文体試論」(『語文』第二十四輯、一九六六年六月)。

(注6) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院、一九八一年)。

(注7) 大曾根章介他編集『研究資料日本古典文学第1巻 物語文学』明治書院、一九八三年。

(注8) 『大和物語』—小考前半と後半の分け方—(『解釈』第三二巻第九号、一九八六年九月)。

(注9) 『日本古典全書 大和物語』朝日新聞社、一九六一年。

(注10) 『鑑賞日本古典文学第五巻 伊勢物語・大和物語』角川書店、一九七五年。

(注11) 『大和物語』第2部の成立試論—章段追加成長過程の想定—

(『広島大学文学部紀要』第四十四号、一九八四年二月)。

(注12) 『歌語りと説話』新典社、一九九六年。

(注13) 『国文学全史 平安朝篇』平凡社、一九七一年。

(注14) 人見恭司「物名歌概念の変遷について—「隠題」という語を通して」(『国文学研究』第九十五集、一九八八年六月)。

(注15) 人見恭司『古今集』物名歌についての考察」(『中古文学論攷』第五号、一九八四年十月)。

(注16) 「物名」の特色と構造 古今和歌集の部立」(『一冊の講座古今和歌集』有精堂、一九八七年)。

(注17) 松本 宙「音韻史から見た物名歌」(『宮城教育大学国語国文』13・14号、一九八四年五月)

(注18) 「亭子院歌合に見る場の表現」(『湘南文学』第二十一号、一九八七年三月)。また中島和歌子が主催者である宇多院の歌がある可能性を指摘している。「宇多院物名歌合」について「本院左大臣家歌合」「近江御息所歌合」にふれつつ「札幌国語研究」第9号、二〇〇四年七月。

(注19) 佐藤高明「後撰集の物名歌逸脱について―物名歌に関する一考察―」(『国語と国文学』第三十五卷第九号、一九五八年七月)、前掲(14)による。

(注20) 後藤康文「地名の物名歌―『大和物語』第二段余説―」(『大和物語研究』第一号、二〇〇〇年九月)に第六十九段の歌の可能性を指摘している。

忠文が陸奥の国の將軍になりて下りける時、それがむすこなりける人を、監の命婦、しのびてあひ語らひけり。うまのはなむけに、めとりくくりの狩衣・桂・幣などやりたり

ける、かのえたる男、

宵々に恋しさまさる狩ごろも心づくしのものにぞあ

りける

とよみたりければ、女めでて泣きけり。

「陸奥」であるのに「筑紫」という地名が隠された洒落だとするが、こうした言語遊戯については、『大和物語』の範疇においては他の段に用例もなく、物名歌とし難いため外した。

(注21) ただし、六番目の「樺桜花」は「かにはさくらのはな」であり、題と一致しない。

樺桜花 左

貫之

はるがすみたちみつをみてにはかにはさくらのはなとおも

ひけるかな (一一)

右勝

忠岑

はるかにはさくらのはなとみゆれどもいりてのそきはひろくぞありける (一二)

(注22) 『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九四年)の頭注による。

第二章『大和物語』の贈答歌と

和歌の省筆について

一、はじめに

『大和物語』の位置づけを概観してみると、文学史上は『伊勢物語』と同じ「歌物語」と分類される一方で、益田勝実によって用いられた用語である「歌語り」といわれる作品である。

『伊勢物語』は在原業平を思わせる「男」という主人公を持ち、定家本系統では、第一七段を除くすべての段が「むかし」とはじまる統一性を持っている。『平中物語』も「おなじ男」として平中を主人公にする流れを持っている。これに対し、『大和物語』は部分的に同一登場人物によるまとめ、表現や状況の連想による前後段の関連性が見られるものの、作品を通じての統一性は一見乏しいように見える。

『伊勢物語』は一人の男の初冠から終焉までを描くのに対し、『大和物語』はサロンを中心に和歌が詠まれた状況やいきさつを語るものがほとんどである。こうした傾向が、「ゴシップ的」と

みなされ、『大和物語』の文学性は低く評価されてきた。

しかし、『大和物語』の贈答歌の方法と構造を見ることによつて、『大和物語』が物語として生成する様子と示し、再評価したい。

二、初段の贈答

『大和物語』の初段は宇多天皇と伊勢の御との和歌のやり取りが描かれている。

亭子の帝、いまはおりゐさせたまひなるところ、弘徽殿の壁に、**伊勢の御**の書きつけける。

わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむことのなら
にか悲しき

とありければ、帝、御覽じて、そのかたはらに書きつけさせ
たまうける。

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもな
どか見ざらむ
となむありける。

「亭子の帝」つまり、宇多天皇が「いまはおりゐさせたまひなむとするころ」に、伊勢が「弘徽殿の壁」に書きつけた和歌に対し、宇多天皇は傍らに返歌を書きつけている^{注1}。この宇多天皇からの返歌は伊勢に伝わったのだろうか。

弘徽殿の壁という固定された場所に書きつけられた贈答歌である。伊勢が宇多天皇退位に伴い、宮中を既に去った後の返歌だとしたら、伊勢は返歌を目にすることができないのではないだろうか。他に同歌を収載する歌集を確認しておこう。

『寛平御集』十六・十七

おりさせたまはむとてのころ、弘徽殿のかべに、伊勢が
かきつけたりける

わかるれどあひもおもはぬももしきを見ざらむ事やなにか
なしき

後に御覽じて、かべにかかせたまける

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなごか
見ざらむ

亭子のみかどのおりさせたまはむとせさせたまひし時の

秋

白露のおきてかかれるももしきのうつろふあきのことぞかな
しき

わかるれどあひもおもはぬももしきを見ざらんことのかなにか
かなしき

と、こき殿のかべにかきたるを、みかど御覽じて、かた
はらに

みひとつにあらぬばかりぞおしなべてゆきかへりてもなごか
みざらん

『後撰和歌集』卷第十九（離別）一三三二・一三三三

亭子のみかどおりゐたまうける秋、弘徽殿のかべにかき
つけける 伊勢

わかるれどあひをしまぬももしきを見ざらん事やなにか
なしき

みかど御覽じて御返し

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなごか
みざらん

ていじのみかど

わかるれどあひもおもはぬ百敷をみざらんことやなにかかな

しき

語句の異同、『伊勢集』では伊勢の歌が一首多いことや、『古今和歌六帖』では「わかるれど」歌が亭子の帝の歌となっている違いはある。『後撰和歌集』は返歌を壁に書いたとしていないが、伊勢に届いたかどうか不確かである。

歌の内容の解釈も揺れている。特に、亭子の帝の歌は「帝は私一人ではないのだから、同様に考えて、今後も宮中にたちかえつて暮らすよかろう^(注2)」というように、宇多天皇の譲位後も宮中に残り仕えることを勧めるような説、また、「私一人にとつては今まで通りではないということだけなのだから、そなたはこれから同様に行き来して内裏をみるのがどうしてなかつたか^(注3)」(悲しむにはあたらぬことだ^(注4))というように、宮中という空間自体には出入りできることをいう説がある。

また、伊勢は女房を代表して詠んでいるとみるか、伊勢が亭子の帝との間に子を産んでいることを考慮し、単なる女房の立場からではないと解釈することもできる。吉田達は「あなたには、私

との間に生まれた子どもがあるではないか、そのことを忘れてはならない^(注5)」と伊勢を論じ、慰める心意があるというが状況はつきりしない。

森本茂に「御代がわりして宮中を去るのは、私一人だけではない(お前たちも去る)のだから、(別の居所に移る今後も)これまでと同様に私のもとに出入りして、私に逢えないことはないのだ。」という説^(注6)がある。この説は、伊勢が「百敷」を空間としてだけではなく、宇多天皇の喩として詠んでいるとでき、伊勢と宇多天皇の関係を踏まえると、最も合う解釈ではないだろうか。

しかし、肝心の贈り主に返歌が伝わったか否かという疑問は解けない。物語の読者の視点からは贈った歌に対して答える和歌が詠まれ、贈答歌は一对になっているが、最初に和歌を贈った人物には届いていないからである。

このように、相手に伝わったかどうかかわからない「贈答歌」は通常の形態とは異なるといえる。どのような形態を「贈答歌」とするか、本論では、久保木哲夫の「とにかく特定の受け手がある場合はすべて贈答歌とみるべき^(注7)。」という枠組みに従い、他作品の同様の場面をみておきたい。

三、届かない返歌

『うつほ物語』の蔵開・下巻に屋敷を去る女性たちの歌がある。

かかるほどに、花盛り興あるに、おとど、大将に、「一条の、
人気もなかなるを、『いかに住みなしたる』と、行きて見む。
いざ給べ」とて、もろともにおはして、まず、北のおとどに
入りて見給へば、居給ひし所に、かの君の御手にて、

妹背川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな
とあるを「あはれ」と見給ひて、西の対の更衣の御方を見給
へば、居給ひし所の柱に、

近かりし雲の下り居て見るべき風吹く塵と惑ふ身はなぞ
とありけるに、「院に候ひしを、率てまかでにしぞかし。あな
いとほし」と見給ひて、同じ一の対を見給へば、

故郷に多くの歳を待ちわびて渡り川にも訪はじとやする
とあれば、まして、「あはれ、いづくへならむ。いかで、これ
が返り言せむ」と思はず。東の二の対に入りて見給へば、その
対の前に、さまざまの竹あたる柱に、

来ぬ人を待ちわたりつる我なくて籬の竹に誰を払はむ

とあるを、『いにしへの』と言ひし所」と思して、一の対に
入りて見給へば、居給ひし柱寄せに、

来つつ見し宿にぞ影も頼まれし我だに知らぬ方へ行くか
な

と草に書きたり。おとど、「この人いづちならむ。母官の御も
とに、はた、あらざめり」とのたまへば、大将、「仲忠なむ、
二条の院に渡し奉りて侍る。今、かしこの、広うなりぬばか
なれば、そこにかのものし給ぶが、遊びする人なくて、さう
ざうしくし給へば、迎へ侍らむ」と申し給ふ。おとど、「恥づ
かしく、若く、よかりし人として、よからぬこともあらぬもの
を」。大将、「いと目安くて、労ある人にこそものし給ひけれ。
とかく、あべきことは、皆ものして侍り」。おとど、「あない
とほしや」とのたまふ。

かくて、おとど、巡りて見給ひて、昔は、方々に、「我も、
我も」と、けうらを尽くして住みしものを、今日は、掻い払
ひて、人もなし。花は、色々に咲き乱れたり。かすかに見給
ふに、あはれに思さるれば、うち泣きて、

花だにも昔の色は変はらぬを待つ時過ぎし人ぞ散りぬる
とのたまへば、大将、「これにも」とて、

年を経てまつをも散らす宿なれば春なる梅の嘆かるるか

な

と申し給へば、「あな思ひ隈なきや」とのたまひて、御修理す
べきことなどのたまひて、帰りに給ひぬ。(蔵開・下 六一三〜
六一四)

兼雅と仲忠が兼雅の妻妾たちが去った一条殿を訪れると、それ
ぞれいたところに兼雅に宛てた歌を書き残している。兼雅と仲忠
は以前と異なり、人も物も一掃された邸内を見て和歌を詠み合う。
女性たちへの直接の返歌ではないが、読者の視点からは屋敷と一
体化した女性たちの歌に一括して返歌しているように見える。

『源氏物語』真木柱巻にも髭黒邸を出ていく真木柱が和歌を残
す有名な場面がある。

ただ今も渡りたまはなんと待ちきこえたまへど、かく暮れな
むに、まさに動きたまひなんや。常に寄りみたまふ東面の柱
を人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、檜皮色の紙の
重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割れたるはさまに、筭
の先して押し入れたまふ。

今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘る

な

えも書きやらで泣きたまう。母君「いでや」とて、
馴れきとは思ひいづとも何により、立ちろまるべき真木
の柱ぞ

御前なる人々もさまざまに悲しく、さしも思はぬ木草のもと
さへ恋しからんことと目とどめて、鼻すすりあへり。

木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中將のおもと、
「浅けれど石間の水はすみはてて宿もる君やかけはなるべ
き

思ひかけざりしことなり。かくて忘れたてまつらんことよ」
と言へば、木工、

「ともかくも石間の水の結ばほれかけとむべくも思ほえ
ぬ世を

いでや」とてうち泣く。御車引き出でかへり見るも、または
いかでかは見むとはかなき心地す。梢をも目とどめて隠るる
までぞかへり見たまひける。君が住むゆゑにはあらで、ここ
ら年経たまへる御住み処の、いかでか偲びどころなくはあら
む。(①真木柱巻 三七三〜三七四)

真木柱の「今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを

忘るな」に続き、母である北の方や女房たちが和歌を詠み合う。真木柱が「真木の柱」に詠みかけることは家、つまり、父である髭黒へ贈る歌であるが、同じく屋敷を去る北の方が答える形で詠んでいるのである。その後の女房たちは、同じく去る中将の君と髭黒付であるため残る木工の君の贈答歌が去る者と残る者のやり取りになっている。

これらは、屋敷を去る者たちが残す和歌であるが、『大和物語』初段のように、贈り主に返歌が届いていない贈答歌として、他に『源氏物語』の光源氏と空蟬との例がある。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯いぞぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習いのやうに書きすさびたまふ。

空蟬の身をかへて木のものになほ人がらのなつかしきかな
と書きたまへるを懐にひき入れて持たり。かの人もいかに思ふらんといとほしけれど、かたがた思ほしかへして御ことつけもなし。かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見あたまへり。

小君、かしこに行きたれば、姉君待ちつけていみじくた

まふ。「あさましかりしに、とあく紛らはしても、人の思ひけむこと避りどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きをかついかに思ほすらん」とて、恥づかしめたまふ。左右に苦しく思へど、かの御手習とり出でたり。さすがに取りて見たまふ。かのもぬけを、いかに伊勢をの海人のしほなれてやなど思ふもただならず、いとよろずに乱れて。西の君も、もの恥づかしき心地して渡りたまひにけり。また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめてゐたり。小君の渡り歩くにつけても胸のみふたがれど、御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心にもあはれなるべし。つれなき人もさこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならば、ととり返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬる袖かな
かな
(①空蟬巻 一二九〜一三二)

源氏が書いた和歌「空蟬の身をかへて木のものになほ人がらのなつかしきかな」を小君から渡され空蟬は、そつと「空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬる袖かな」を詠む。これはもちろん、源氏には届けられず、空蟬の独泳の状態であるが、

源氏の和歌に応じた形となっている。

このように、空間や時間をずらした和歌のやりとりは、物語作品には珍しくないが、こうした手法の萌芽が『大和物語』の随所にみられる。贈答歌のうち、贈った贈歌のみ、答えた返歌のみを記す体裁が多くとられている。〈前半〉の贈答歌を例に考えてみたい。

四、揃わない贈答歌

『大和物語』の〈前半〉つまり、第四百四十六段までを見ても、贈歌・返歌のみの段が多くみられる。贈られた歌とそれに対しての返歌が両方書かれ、両者に届いている形式の贈答歌の段の方が少ない。

まず、返歌できなかったことが示されている例として第二段を挙げる。

帝、おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。備前の椽にて橘の良利といひける人、内におはしましける時、殿上

にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御とも

に、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれたてまつらでさぶらひける。

「かかる御歩きたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これかれ、さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつつ歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日根といふ所におはします夜あり。いと心ほそうかすかにておはしますことを思ひつつ、いと悲しかりけり。さて、「日根といふことを歌によめ」とおほせごとありければ、この良利大徳

ふるさとのたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたとはねば

とありけるに、みな人泣きて、えよますなりにけり。その名をなむ寛蓮大徳といひて、のちまでさぶらひける。

第二段の「帝」は、初段に続き「宇多院」であり、その仏道修行の供をしている橘良利が「日根」という地名を詠み込んだ和歌に対し、皆泣いてしまい、返歌できなかったとする。名前の表記も変わり後に「寛蓮大徳」という徳の高い僧になったことを示し、そうした人物の詠み上げた和歌だったからこそ、人々を涙させた

のだと和歌の良さも強調している。第四十一段でも同様の展開をみせている。

源大納言の君の御もとに、としこはつねにまゐりけり。曹司してすむ時もありけり。をかしき人にて、よろづのことをつねにいひかはしたまひけり。つれづれなる日、このおとど、としこ、またこのむすめ、姉にあたるあやつこといひてありけり。母に似て、心もをかしかりけり。また、このおとどのもとに、よぶこといふ人ありけり。それもものあはれ知りて、いと心をかしき人なりけり。これ四人つどひて、よろづの物語りし、世の中のはかなきこと、世間のことあはれなるいひひて、かのおとどのよみたまひける。

いひつつも世ははかなきをかたみにはあはれといかで君に見えまし

とよみたまひければ、たれもたれも、返しはせて、集りてよよとなむ泣きける。あやしかりけるものどもにこそはありけれ。

「源大納言の君」、源清隆が詠む和歌に誰も返歌できず、泣いてしまったこと、無常感という趣を理解して珍しいことを述

べる。

このように、泣いてしまつて誰も返歌できない、という流れは『伊勢物語』第九段でも、「かきつばた」の折句のあとに「みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり」、都鳥の歌のあとにも「船こぞりて泣きにけり」という人々の反応が示されるものに似ている。

だが、同じ歌が詠まれても『大和物語』には返歌がないが、他の歌集には返歌がある場合がある。第五十七段と『後撰和歌集』である。

近江の介平の中興が、むすめをいといたうかしづきけるを、親なくなりてのち、とかくはふれて、人の国にはかなき所にすみけるを、あはれがりて、兼盛がよみておこせたりける。

をちこちの人目まれなる山里に家居せむとはおもひきや

君

とよみてなむおこせたりければ、見て返りこともせで、よよとぞ泣きける。女もいみじくうある人なりけり。

落ちぶれ地方にいた平中興の娘が、平兼盛からの和歌をみて返歌もせず泣いたとある。しかし、この贈られた和歌「をちこちの

人目まれなる山里に家居せむとはおもひきや君」に『後撰和歌集』では返歌がある。

卷第十六(雑二) 一一七二・一一七三

むかしおなじ所に宮づかへし侍りける女をの、をとこにつきて人のくにおちみたりけるをききつけて、心ありける

る人なれば、いひつかはしける

をちこちの人めまれなる山里に家るせんとは思ひきや君

返し

身をうしと人しれぬ世を尋ねこし雲のやへ立つ山にやあらぬ

『大和物語』第五十七段とは違い、『後撰和歌集』では女は泣くどころか、今さら都へ帰りたいとは思わない、と強気の返歌をしている。もちろん、名前が伏され「女」と「心ありける人」となっていることよって、「をちこちの」歌は共に都へ帰らないかと誘う恋愛要素が強くなるため、女がそれを拒絶したともよめるだろう。

『大和物語』の二人は父親同士が従兄弟であるという関係であるが、取り払って男女とするなら、『伊勢物語』の第六十・六十二段にも似る。地方で落ちぶれた女に昔の男が歌を読み、女は返

歌できないという型である。

高橋正治は新全集の頭注で「この話が物語化されたときに、返歌がつけられ、『後撰集』に入れられたのであろう」と述べ、渡辺泰宏は「後撰集は歌物語的であるとはいうものの、返歌を創作して付加することまでは考えがたい。したがって、この部分は大和物語の方の創作だろう」と考えている。

本論において重要なのは、どちらが先かと決めることなく、この後で渡辺が指摘する、「大和物語の生成の方法とは、登場人物を重視し、またその場面の効果を増すためには、歌をも捨て、その登場人物やその結果などにおいて文章が費やされるのである(注7)」という点である。

『伊勢物語』が和歌に焦点を絞り、場面を構成しているのに対し、『大和物語』は歌が詠まれた場面や状況に焦点を当てているのだ。そして、『大和物語』を説明するときによく用いられる「ゴシップ的」と言われる要因の一つが登場人物の特に固有名の扱いである。

既に、渡瀬茂が『伊勢物語』の「主人公の匿名への固執は確認できる。それは『大和物語』が示す固有名詞への固執とは対照的な現象なのである。「同じ男」と主人公を設定する『平中物語』を中間において、『大和物語』と『伊勢物語』は固有名詞の扱い

に関して対照的であった。(註⁸)と論じている通り、『大和物語』は登場人物の固有名を隠そうとしないのだ。

たとえば、それ『大和物語』で「としこ」と「増喜君」との和歌のやりとりに表れている。

第二百二十二段

としこが、志賀にまうでたりけるに、**増喜君**といふ法師ありけり。それは比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。それ、このとしこ、まうでたる日、志賀にまうであひにけり。橋殿に局をしてあて、よろづのことをいひかはしけり。いまは、としこ、かへりなむとしけり。それに、増喜のもとより、

あひ見てはわかるることのなかりせばかつがつものは思はざらまし

返し、としこ、

いかなればかつがつものを思ふらむなごりもなくぞわれは悲しき

となむありける。ことばもいとおほくなむありける。

百二十三段

おなじ**増喜君**、やれる人のもとは知らず、かうよめりけり。

草の葉にかかれるつゆの身なればや心うごくに涙おつらむ

増喜君から贈られた和歌にとしこが返歌をしているが、この増喜君の「あひ見ては」歌は『後撰和歌集』ではよみ人しらず歌となっている。

卷第十一(恋三) 七二八

あひかたらひける人、これもかれもつつむこと有りて、はなれぬべく侍りければ、つかはしける

よみひとしらず

あひみてもわかるる事のなかりせばかつがつ物はおもはざらまし

『後撰和歌集』では初句が異なるが、よみ人しらずの歌が『大和物語』では贈答歌になっている。先述した『大和物語』第五十七段と『後撰和歌集』一一七二・一一七三歌とは逆の現象である。

この女性「としこ」は歴史上ではほぼ無名と言っている存在であるが、『大和物語』中には女房として最も多い十章段に登場している重要人物である。その「としこ」と僧との恋愛歌と解釈で

きる贈答歌を伝えており、続く第二百二十三段では「おなじ増喜君」が「やれる人のもととは知らず」と贈り先を不明にしたまま詠む和歌が記されている。段が変わっても「おなじ」人物を登場させ、僧には禁じられた恋心を詠み贈ったという展開に、贈り先にはとしこを想像せずにいられない。

「やれる人のもととは知らず」は、物語の語り手が贈った先は知らないとわざとぼかした表現ともみえる。ここでは、「おなじ」として、同一登場人物によって、話を延ばし続けていこうとする意志が表れている。贈り先を明示しないことによって、読者の想像力をそそる効果があるが、この第二百二十三段は前段から連続しており、この段だけで完結した独立性を持っていない。

また、「としこ」登場段は年代や内容を異にする話が『大和物語』中に分散配置されているが、まとまった章段をなしている女性登場人物に右近がいる。第八十一段から第八十五段である。

第八十一段

季繩の少将のむすめ右近、故後の宮にさぶらひけるころ、故権中納言の君おはしける、頼めたまふことなどありけるを、宮にまゐること絶えて、里にありけるに、さらにとひたまはざりけり。内わたりの人來たりけるに、「いかにぞ、まゐりた

まふや」と問ひければ、「つねにさぶらひたまふ」といひければ、御文奉りける。

忘れじと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいに
けむ

となむありける。

第八十二段

おなじ女のもとに、さらに音もせで、雉をなむおこせたまへりける。返りごとに、

栗駒の山に朝たつ雉よりもかりにはあはじと思ひしもの
を

となむいひやりける。

第八十三段

おなじ女、内の曹司にすみける時、しのびて通ひたまふ人ありけり。頭なりければ、殿上につねにありけり。雨の降る夜、曹司の葺のつらに立ち寄りたまへりけるも知らず、雨のもりければ、むしろをひきかへすとて、

思ふ人雨と降りくるものならばわがもる床はかへさざら
まし

となむうちいひければ、あはれと聞きて、ふとはひ入りたまひにけり。

第八十四段

おなじ女、男の「忘れじ」とよろづのことをかけてちかひけれど、忘れにけるのちにいひやりける。

忘らるる身をば思はずちかひてし人のいのちの惜しくもあるかな

返しは、え聞かず。

第八十五段

おなじ右近、「桃園の宰相の君なむすみたまふ」などいひののしりけれど、虚言なりければ、かの君によりて奉りけり。

よし思へ海人のひろはぬうつせ貝むなしき名をば立つべしや君

となむありける。

第八十一段で「季繩の少将のむすめ右近」と紹介された後は、

「おなじ女」とされ、最後第八十五段では「おなじ右近」と表現されている。『伊勢物語』が内容的に前後関係に流れを持っていても各段を「むかし」と改め独立性を持たせようとしているのに対して、段の連続性を求める『大和物語』の特徴が分かる。

第八十四段は小倉百人一首にもある右近の有名な和歌であり、『古今和歌六帖』では紀貫之の歌とされているものの、『拾遺抄』

『拾遺和歌集』^(注)には右近の和歌として収められている。これらには詞書がないため、どのような状態の和歌か不明だが、『大和物語』では、「返しは、え聞かず」とあることから、男に贈った贈答歌であったことがわかる。

詠歌事情について「いひやりける」というように伝聞過去の助動詞「けり」を使用しながら、最後に「え聞かず」と言い切ることは、単純に返事がなかった、伝わっていないかつたと解するより、右近が詠んだように、相手の男が「忘れじ」という「ちかひ」を破ったことで命を落としたためとも想像できるような解釈の幅をもたせている。

先述したように、『大和物語』は贈る歌とそれに対する返歌が対になることが少ないが、贈った和歌には返歌があるできものだという見解を示している段がある。第三段である。

故源大納言、宰相におはしける時、京極の御息所、亭子院の御賀つかうまつりたまふとて、「かかることなむせむと思ふ。ささげ物ひと枝ふた枝せさせてたまへ」と聞こえたまひければ、鬚籠をあまたせさせたまうて、**としこ**にいろいろに染めさせたまひけり。敷物の織物ども、いろいろに染め、縊り、組み、なにかとみなあづけてせさせたまひけり。その物ども

を九月つごもりに、みな急ぎはててけり。さてその十月ついでに、この物急ぎたまひける人のもとにおこせたりける。ちぢの色にいそしぎし秋はすぎにけりいまは時雨になにを染めまし

その物急ぎたまひける時は、まもなく、これよりもかれよりも、いひかはしたまひけるを、それよりのちは、そのこととやなかりけむ、消息もいはで、十二月つごもりになりければ、としこ、

かたかけの舟にや乗れる白浪のさわぐ時のみ思ひいづる

君

となむいへりけるを、その返しをもせで、年こえにけり。

さて、二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家^{いへ}にありけるを折りて、

あをやぎの糸うち^{いと}はへてのどかなる春日しもこそ思ひいでけれ

とてなむやりたまへりければ、いとなくめでて、のちま^{ちま}でなむ語りける。

「故源大納言」つまり、源清隆が義兄弟の妻にあたる「としこ」に六条院六十の祝いの品を依頼するが、急かす時だけ連絡をし、

九月末に出来上がってからは、音沙汰がなかったため、十月一日に歌を贈るが返事はない。十二月末にも再び歌を贈るが、返事がないまま年が改まり、やっと二月に遅れたことを逆手にとったような返歌が届く。

相手からの来るべき返歌がなく、その返歌がない過程を示すことによつて、話は九月から二月までの五カ月を描いている。時間差はあるものの、相手から返歌があるまでを中心にした段であり、清隆からの返歌はとしこからの和歌の言葉の内容や表現に対応していない。

久保木哲夫は贈答歌の「型」について、「1返歌は贈歌の内容を受け、それを表現の中にもりこむこと」と「2返歌は贈歌の言わんとすることに對して、一般的にはあまりすなおな対応の仕方をとらない」という二点を挙げている^(註10)。この型を使つて見ること、言葉が対応していなければ、もともと贈答歌ではなかったのではないかと推測ができる。

例えば、『伊勢物語』の第二十五段である。

むかし、男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野にささわけし朝の袖よりもあはで寝る夜ぞひちま

さりける

色好みなる女、返し、

みるめなきわが身をうらとしらねばや離れなで海人の足
たゆく来る

この「色好みなる女」の返歌は「男」の歌の表現を盛り込んでいない。これは、『古今和歌集』卷第十三（恋歌三）にある六二二番の業平歌と続く六二三番の小野小町歌の配列のままに作られたと考えられる段である。

贈答の型をみることによって、そうした物語生成過程が垣間見られるが、『大和物語』にはこうした問題例がみられないことから、「最も歌語りに近く、幼い段階にある」、「まだまだゴシップの世界から完全に脱却しきれていないという面をもっている。」と言われる。

しかし、これは『伊勢物語』の贈答歌とは違った方法を持っているのであって、一概に「歌物語」の形に到達できていない「歌語り」のゴシップとすべきではない。『大和物語』は『大和物語』の方法で贈答歌を伝えている。その特徴に和歌の省筆がある。

五、和歌の省筆

田村隆は「省筆の叙法は大きく「作り物語的省筆」と「歌物語的省筆」の二類に分けることができる。散文を綴る上で、くだけたらしい叙述を避けるのが「作り物語的省筆」、歌の列挙を留めるのが「歌物語的省筆」とひとまず定義しておく」として、『大和物語』を「歌物語的省筆」とする。また、勅撰集に省筆の例がないことから、「私性の有無」を省筆の特徴としている^{〔註1〕}。

『大和物語』には、返歌を省略した例が十三例（第八・二十九・三十六・四十五・六十五・七十八・八十一・八十四・九十五・百十三・百二十・百二十四・百三十五段）ある。

岡山美樹はこうした省筆十三例の内、約三分の一にあたる四章段が三条右大臣に関係する章段に集中していること、堤中納言に関係する章段も三章段あることから、「兼輔・定方」グループにこうした省筆の文体が使われており、源公忠に関する章段、及び、宇多天皇に関連する章段には、省略の草子地は見られないと指摘した^{〔註2〕}。

本論では省筆の十三例を「忘れにけり」とする例と、「え聞かず」とする例とそれ以外の表現に分けてみたい。まず、「忘れに

けり」とするのは第八段である。

監の命婦のもとに、中務の宮おはしまし通ひけるを、「方のふたがれば、今宵はえなむまうでぬ」とのたまへりければ、その御返りごとに、

あふことの方はさのみぞふたがらむひと夜めぐりの君となれば

とありければ、方ふたがりたりけれど、おはしましてなむおほとのごもりにける。かくてまた、久しく音もしたまはざりけるに、「嗟峨院に狩すとてなむ、久しう消息なども物せざりける。いかにおぼつかなく思ひつらむ」など、のたまへりける御返に、

大沢の池の水くき絶えぬともなにか恨みむさかのつらさ

は

御返し、これにやおとりけむ、人忘れにけり。

ここで注目したいのは「人忘れにけり」とある点である。この歌は『元良親王集』一三〇・一三二番歌にもある。

げんの命婦にかたふたがりたればとのたまへりければ、

女

あふことのかたはさのみはふたがらむひとよめぐりのきみとみつれば

ときこえたりければ、さしておはしたりけり、又、ひさしくおはせで、さかの院にかりしにとてなどのたまへりければ、女

おほさはいけのみづくきたえぬともさかのつらさをなにかうらみむ

御返事もいかがありけん、わすれにけり。あふみのすけながきがむすめども、かたちよくこころたかしとききたてまつかはしける

ここでは、同様の表現があるものの、『大和物語』のように返歌が記されていない理由を「これにやおとりけむ」とはしていない。

『伊勢物語』第八十一段に「右の馬の頭なりける人」について「時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」と時間経過を理由に名前を忘れたとする表現はあるが、和歌を忘れたとすることはない。第百三段でも「男」の和歌に「さる歌のきたなげさよ」とけなす表現はしている、この和歌を忘れることなく

伝えている。

『大和物語』には他に返歌を省筆する例として、第二十九段には、

故式部卿の宮に、三条の右の大臣、こと上達部など類して
まゐりたまうて、暮うち、御遊びなどしたまひて、夜ふけぬ
れば、これかれ酔ひたまひて、物語し、かづけ物などせらる。
をみなへしをかざしたまひて、右の大臣、

をみなへし折る手にかかる白露はむかしの今日にあらぬ
涙か

となむありける。こと人々のおほかれど、よからぬは忘れ
にけり。

というように、他の上達部の人々の和歌も多いが、よくない歌は
忘れたとしている。第二百十段では、

おほきおとどは、大臣になりたまひて年ごろおはするに、
枇杷の大臣はえなりたまはでありわたりけるを、つひに大臣
になりたまひにける御よろこびに、おほきおとど梅を折りて
かざしたまひて、

おそくとくつゐに咲ける梅の花たが植ゑおきし種にか
あるらむ

とありけり。その日のことどもを歌など書きて、齋宮に奉
りたまふとて、三条の右の大殿の女御、やがてこれに書きつ
けたまひける。

いかでかく年きりもせぬ種もがな荒れゆく庭のかげと頼
まむ

とありけり。その御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。

かくて願ひたまひけるかひありて、左の大臣の中納言わた
りすみたまひければ、種みな広ごりたまひて、かげおほくな
りにけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見に来む年きりもせずといふ種は生ひぬと
か聞く

とされ、齋宮からの返歌があつたが、忘れてしまったとし、第七
十八段でも、

監の命婦、朝拝の威儀の命婦にていでたりけるを、弾正の親
王見たまひて、にはかにまどひ懸想したまひけり。御文あり
ける御返りごとに、

うちつけにまどふ心と聞くからになぐさめやすくおもほゆるかな

親王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり。

というように、彈正の親王の和歌は忘れたとして記されない。

このように「忘れにけり」とすることで、返歌はあったが、その歌は良くないものだったので記憶に残らなかったとして逆に覚えていた和歌を褒めると受け取れる。同時に、特定の人物の良くない歌を残すことができず、忘れてしまったととぼけているのだ。

人物の固有名詞を積極的に出し、ゴシップ的といわれる『大和物語』ならではの理由として、良くない歌を出し、残すことを差し控えるため、忘れたとするのではないか。

ここには、伝える側の人間が歌の上手下手に関心を持っており伝えることと伝えないことの情報を操作している。こうした判断が入ること、先に挙げた岡山美樹の指摘のように、人物によって対応の違いがみられるという点から、〈語り手〉の存在が考えられる。

次に「え聞かず」表現の段を確認すると、第三十六段では、

伊勢の国に、さきの齋宮のおはしましける時に、堤の中納言、
勅使にて下りたまひて、

くれ竹のよよのみやこと聞くからに君はちとせのうたが
ひもなし

御返しは聞かず。かの齋宮のおはします所は、たけのみやことなむいひける。

齋宮からの返歌は聞いていないとし、第六十五段では、

南院の五郎、三河の守にてありける、承香殿にありける伊予の御を懸想しけり。「来む」といひければ、「御息所の御もとに、内へなむまある」といひおこせたりければ、

玉だれの内とかくるはいとどしくかげを見せじと思ふなりけり

といへりけり。また、

嘆きのみしげきみ山のほととぎす木かくれるても首をのみぞなく

などいひけり。かくて来たりけるを、「いまはかへりね」とやらひければ、

死ねとてやとりもあへずはやらはるるいといきがたき心

地こそすれ

返し、をかしかりけれど、え聞かず。

また、雪の降る夜来たりけるを、ものはいひて、「夜ふけぬ。

かへりたまひね」といひければ、かへりけるほどに、雪のい
みじき降りければ、えいかでかへりけるほどに、戸をさして
あけざりければ、

われはさは雪降る空に消えねとやたちかへれどもあけぬ

板戸は

となむいひてゐたりける。「かく歌もよみ、あはれにいひあた
れば、いかにせましと思ひて、のぞきて見れば、顔こそなほ
いとにくげなりしか」となむ語りしとか。

伊予の御からの返歌はおもしろかつたが、今は聞けない、とい
う。他に、第二百二十四段では、

本院の北の方の、まだ帥の大納言の妻にしていますかりける
をりに、平中がよみて聞こえける。

春の野にみどりにはへるさねかづらわが君さねと頼むい
かにぞ

といへりけり。かくいひいひて、あひ契ることありけり。

そののち、左の大臣の北の方にて、ののしりたまひける時、

よみておこせたりける。

ゆくすゑの宿世も知らずわがむかし契りしことはおもほ

ゆや君

となむいひける。その返し、それよりまへまへも、歌はい
とおほかりけれど、え聞かず。

「本院の北の方」、つまり、藤原時平の妻で在原棟梁の娘である
人物と平中の贈答歌が多かつたらしいが、聞くことができないと
して、平中の和歌のみを記している。

このように、贈答歌であるとしながらも、片方だけしか聞いて
いないとすることで、相手の和歌を知りたかつたが、聞けなかつ
たという意味を示していることが分かる。

第三百三十五段では、

三条の右の大臣のむすめ、堤の中納言にあひはじめたまひけ
るあひだは、内蔵の助にて、内の殿上をなむしたまひける。

女はあはむの心やなかりけむ、心もゆかずなむいますかりけ
る。男も官仕へしたまうければ、えつねにはいませざりける

ころ、女、

たき物のくゆる心はありしかどひとりはたえて寝られざりけり

返し、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。

「堤中納言」、つまり、藤原兼輔の歌であるから、上手であつたろうが、聞くことができなかつたので、書かないという事情を示している。

「忘れにけり」「え聞かず」以外の例として、第八十段では、

宇多院の花おもしろかりけるころ、南院の君達とこれかれ集りて、歌よみなどしけり。右京の大夫宗子、

来て見れど心もゆかずふるさとのむかしながらの花は散れども

こと人のもありけらし。

他の人の歌もあつたらしいという程度に止め、第九十五段では

おなじ右のおほいどのの御息所、帝おはしまさずなりてのち、式部卿の官なむすみたてまつりたまうけるを、いかがありけむ、おはしまさざりけるころ、齋官の御もとより、御文

奉りたまへりけるに、御息所、宮のおはしまさぬことなど聞こえたまひて、奥に、

白山に降りにしゆきのあとたえていまはこしぢの人も通はず

となむありける。御返りあれど、本になしとあり。

「おなじ右のおほいどのの御息所」とは、前段第九十四段を受けている表現で、三条右大臣定方の娘である。彼女が齋宮柔子内親王に贈った和歌である。この和歌に対して、齋宮からの返歌はあつたのだが、「本」つまり、書写した元の本には「なし」とあるという。

返歌の存在は認めながらも、元の本には「なし」となっているという指摘は、第四十五段の例に共通する。

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内に奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしめすらむなど、いとかしこく思ひなげきたまひけり。さて、帝によりて奉りたまひける。

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返しありけれど、人え知らず。

返歌があつたことは知っているが、伝達経路でその内容が失われたことをいう例である。

これは、歌の内容よりも、歌のやりとりがあつたということに注目しているともいえる。第百十三段には「返しは知らず」と言い切る表現が一例ある。

兵衛の尉、離れてのち、臨時の祭の舞人にさされていきけり。
この女ども物見にいでたり。さて帰りてよみてやりける。

むかし着てなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそに見しかな

かくて、兵衛の尉、山吹につけておこせたりける。

もろともに井手の里こそ恋しけれひとりをり憂き山吹の花

となむ。返しは知らず。

かくて、これは、女、通ひける時に、

大空もただならぬかな神無月われのみしたにしぐると思へば

これも、おなじ人、

あふことのなみのみ下草みがくれてしづ心なくねこそなかるれ

この例と比較すると、「忘れにけり」には対象としている人物と近い距離が感じられる。また、第百十三段には「かくて」が二度使われている。これは物語を長編化するときに『うつほ物語』が多用した接続詞である。ここからも『大和物語』には物語を長く引き延ばしていこうとする姿勢があるといえるだろう。

六、おわりに

『大和物語』には和歌を省筆することだけを取り上げても、〈語り手〉の存在、また長編化を志す表現などが垣間見える。最後にやや長い『和泉式部日記』の冒頭を見てみたい。「日記文学」作品とされながらも、「和泉式部物語」とする本があり、和泉式部を「女」と三人称で叙述する方法などが特徴で物語に近い作品と位置づけられている(注1)。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草のあをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとにひとのけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。

あはれにももののおぼゆるほどに來れば、「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを」など言はすれば、童「そのこととさぶらはで、なれなれしきさまにやと、つつましうさぶらぶうちに、日ごろは山寺にまかり歩きてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ」と語る。「いとよきことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ」など言えは、「しかおはしませど、いとけぢかくおはしまして、『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参りはべり』と申しさぶらひつれば、『これもて参りて、いかが見たまふとてたてまつらせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞こえさせむもかたはり

たくて、「なにかは、あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はあかなきことをも」と思ひて、

薰る香によそふるよりはほとどきす聞かばやおなじ声や
したると

と聞こえさせたり。

まだ、端におはしましてけるに、この童かくれのかたに気色ばみけるけはひを、御覽じつけて、「いかに」と問はせたまふに、御文を差し出でたれば、御覽じて、

おなじ枝に鳴きつつをりしほとどぎす声は変はらぬもの
と知らずや

と書かせたまひて、賜ふとて、「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせたまひぬ。

もて來たれば、をかしと見れど、つねはとて御返り聞こえさせず。

この冒頭部分では、和泉式部のもとに帥宮教道親王から和歌が届けられる出会いが描かれている。帥宮の言葉に「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とあり、文の使いをしている小舎人童に口止めしている。

『大和物語』の「忘れにけり」や「え聞かず」という背後には

このような事情が想像できるのではないか。また、和泉式部の「つねはとて御返り聞こえさせず」と返歌をしなかったと書くことには、たとえば、『大和物語』第三段の「その返しをもせで」というように話を引き延ばし、続けていこうとする姿勢に通じるのではないだろうか。

すでに、長谷川政春に「物語が次々と場面を作り展開してゆく、いわば遠心性を本質と抱え込んでいたことは、『大和物語』によっても読み取れるのに対して、『伊勢物語』は求心的な物語である^(註14)」と指摘しており、雨海博洋が「文学的素材の組み合わせが『大和物語』の前篇歌語りの短章段から、後篇の短編小説的物語性をもった長文段へと内的展開を導くことになり、やがては本格的物語文学へ発展していく出発点ともなる。物語文学の史的展開上重要な問題性を持つていといえよう^(註15)」と指摘しているように、『大和物語』は「歌物語」以前のゴシップ語りにとどまる幼い作品ではない。物語を長編化していく萌芽をもっているといえる。

【注】

(注1) 壁に直接書いたのではなく、紙に和歌を書いて貼り付けた、という解釈が一般的である。『源氏物語』真木柱巻での真木柱が髭黒邸を去るときに、和歌を詠む方法に倣つての解釈と思われるが、本文には書かれていない情報を加えて状況を限定する必要はないだろう。

(注2) 阿部俊子 今井源衛校注『日本古典文学大系 9 竹取物語 伊勢物語 大和物語』岩波書店、一九五七年。

(注3) 今井源衛『大和物語評釈』学燈社、一九六一年(後に、笠間書院 一九九〇〜二〇〇〇年)。同様の説に、工藤重矩「大和物語初段の解釈」(『中古文学』第三十号、一九八二年十月)など。

(注4) 『大和物語』初段を考える―宇多Ⅱ「伊勢の御」所生子二人説を背景として―(『国語と国文学』第58巻第12号、一九八一年十二月)。

(注5) 『大和物語の考証的研究』和泉書院、一九九〇年(第六章 大和物語の解釈 第一節 身ひとつにはあらぬばかりを)。

(注6) 『折の文学 平安和歌文学論』笠間書院、二〇〇七年。

(注7) 『歌語りと歌物語』桜楓社、一九七六年。

(注8) 「固有名詞と歌物語」(『日本文学』第46号第5号、一九九七年)。

(注9) 『古今和歌六帖』第五「ちかふ」二九六七歌、『拾遺抄』巻第八・恋下・七十四首・三五二、『拾遺和歌集』巻第一四・恋四・八七〇。

(注10) 「贈答歌の方法をめぐって―歌物語の場合―」(『国文学論考』第15号、一九七九年三月)。

(注11) 「省筆論―源氏物語の叙法―」(『文学』第4巻第6号、二〇〇三年一二月)。

(注12) 『大和物語の研究』桜楓社、一九九三年。また、前掲(6)で久保木哲夫はこうした点から最大のゴシップ層として兼輔・定方グループを中心とした歌語り圏を想定している。

(注13) 山口仲美は『源氏物語』などと比較し、『和泉式部日記』が「女」の三人称叙述であることから、「物語」を意図した作品であったことを指摘する。『和泉式部日記』作者の意図―「物語」をめざして―(『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五年)。

(注14) 「求心性・変成・歌物語―伊勢物語の方法と構造―」(『物語史の風景』若草書房、一九九七年)。

(注15) 雨海博洋『歌語りと歌物語』(桜楓社、一九七六年)。

第三章 『伊勢物語』と『大和物語』

一、はじめに

『伊勢物語』という作品名の初出は前述したように、『源氏物語』絵合巻である。一方、『大和物語』という作品名の初出は『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語知頭抄』である。特定の主人公を持たないという点からも、『伊勢物語』あるいは「業平幻想」といわれるような他作品へのそれとわかる引用はほとんどない。『伊勢物語』が『在五が物語』などという別名を持っていることがわかるのも主人公として業平を思わせる「男」が設定されているからである。もし『大和物語』に別名があったとしても、わからなかったのではないだろうか。

『伊勢物語』と『大和物語』は「歌物語」として並び称せられるが、『大和物語』が今日まで伝わったのは、その初出状態にみられるように、『伊勢物語』と同形態の作品として名前を記されてきたことが大きいだろう。『大和物語』にとっては、『伊勢物語』という有名作品によって残すことができた作品名であり、

本章ではこれまでの章を踏まえて、『伊勢物語』と『大和物語』

の和歌と物語の関係、固有名の扱い方についてまとめたい。

二、和歌と散文

「歌物語」という作品内で和歌を読む場合、和歌集の中に置かれたものとは異なる趣を持つ。当然ながら、物語の中ではどのような状態で詠まれたか、その後どうなったかという展開まで語られることがあるように、散文がつきものである。

そして、散文がもたらす情報によって、詠み人や状況が定められる。もともと詠み人知らずであっても、歌物語では誰がどのように詠んだかと説明される。

歌物語は和歌の持つ解釈の可能性の幅を狭め、限定する。

『伊勢物語』第六十段を例に考えてみたい。

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとり

て、いだしたりけるに、さかななりける橘をとりて、

さつき待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香
ぞする

といひけるにぞ思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける。

ここで「男」が再会した元妻に詠む和歌は『古今和歌集』一三九番歌（巻第三・夏）の題知らず、詠み人知らずの和歌である。純粹にこの和歌だけを読めば、季節がめぐり初夏になると、香りによつてふと昔の恋人のことを懐かしく思い出すという、花橘の香りと初夏という時期から爽やかな雰囲気がある歌と感ずるだろう。

『伊勢物語』は「男」が自分の元を去つたかつての妻を前に詠む皮肉な話となっている。和歌が「花橘」と花を詠んでいるが、和歌の契機となった、「さかななりける橘」という実であるから、同じ橘を詠んでも季節にずれが生じている。古歌を使つてこの段を作つたためにできた齟齬とされることが多いが、これは宮仕えに忙しかった「男」を待てなかつた女への痛烈な皮肉になる。「さつき待つ」という言葉を入れたためである。五月を待つていた花橘はいまや「さかななりける橘」と実っている、そんな時間

経過を詠んでいても解釈できる。

第六十二段にも、同様の状態で和歌が詠まれる。

むかし、年ごろ訪れざりける女、心かしくやあらざりけむ、はかなき人の言につきて、人の国なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで来て、もの食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、おこせたりけり。男、「われをばしらずや」とて、

いにしへのにほひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな

といふを、いとほづかしと思ひて、いらへもせでるたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるるに、目も見えず、ものもいはれず」といふ。

これやこのわれにあふみをのがれつつ年月経れどまさりがほなき

といひて、衣ぬぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。いづちいぬらんともしらず。

元妻との再会で、第六十二段の「男」は第六十段の「男」よりも女を追い詰め「いにしへのにほひはいづら」と詠む。ここでは

桜花であるが、第六十段と対になるだろう。

『大和物語』は古歌をどう物語にするか。〈後半〉の第百五十五段を見てみたい。

むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔かたち、いとうつくしげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかかりて、夜昼いとわびしく、病になりておぼえければ、「せちに聞えさすべきことなむある」といひわたりければ、「あやし。なにごとぞ」といひていでたりけるを、さる心まうけして、ゆくりもなくかき抱きて、馬にのせて、陸奥の国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げていにけり。安積の郡、安積山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出て物などは求めて来つつ食はせて、年月を経てありへけり。この男いぬれば、ただひとり物も食はず山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやう

になりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らずありけるに、ひはかに見れば、いとおそろしげなりけるを、いとほかしと思ひけり。さてよみたりける。

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものか
は

とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物などもとめてもて来て、死にてふせりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見てかへり来て、これを思ひ死にに、かたはらにふせりて死にけり。世の古ごとなむありける。

『伊勢物語』第六段・第十二段と同趣の女を盗んで逃げる話であるが、この和歌はよく知られたものであり、そのような状況で詠まれた和歌としては伝わっていない。『古今和歌集』仮名序にも次のようにある。

あさか山のことばはうねめのたはぶれよりよみてかづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさまじかりければ、うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり、こ

れにぞおほきみの心とけにける、
（あさか山かげさへ見ゆる
山の井のあさくは人をおもふものは）
このふたうたはう
たのちちははのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

ここで「なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさ
くやこのはな」と併せて手習い歌の基礎として挙げられている。

四・五句に異同があるが『万葉集』三八二九番歌（巻第十六・
有由縁并雑歌）に収められている。

安積香山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国

あさかやま かげさへみゆる やまのみの あさきころを
わがおもはななくに

右歌伝云、葛城王道_二于陸奥国_一之時国司・承緩怠異甚

於_レ時王意不_レ悦怒色頭_レ面、雖_レ設_二飲饌_一不_二肯宴樂_一、

於_レ是有_二前采女_一、風流娘子、左手捧_レ觴右手持_レ水擊_二

之王膝_一而詠_二此歌_一、尔乃王意解悅樂飲終日

和物語』では前段第百五十四段にも男が女を盗む話がある。

大和の国なりける人のむすめ、いと清らにてありけるを、
京より来たりける男のかいまみて見けるに、いとをかしげな
りければ、盗みてかき抱きて馬にうちのせて逃げていにけり。
いとあさましようおそろしう思ひけり。日暮れて、龍田山に宿
りぬ。草のなかにあふりをときききて、女を抱きてふせり。
女、おそろしと思ふことかぎりなし。わびしと思ひて、男の
ものいへど、いらへもせで泣きければ、男、

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたの山にをりはへて
なく

女、返し、

龍田川岩根をさしてゆく水のゆくへも知らぬわがごとや
なく

とよみて死にけり。いとあさましようてなむ、男抱きもちて泣
きけり。

『万葉集』では、采女であった女性が不機嫌な葛城王を宥める
歌であった。よく知られたこの歌を使って『大和物語』では、男
に盗まれた女が安積山で亡くなるという話に仕立てている。『大

ここで男が詠む歌は『古今和歌集』九九五番歌（巻第十八・雑
歌下）に詠み人知らずとして収められている。どちらにも「安積山」
と「龍田山」という歌枕の地を舞台に別の物語にしている。

歌物語は歌が詠まれた状況を語るものであった。そして、事実であつたか否かは問わないものであつた。

『伊勢物語』は詠み人知らず歌を「男」の歌へと組み込み、『大和物語』に至っては、「安積山」のような有名な和歌であつても挑戦的に別の物語を語り、第一部第四章で見たように、『伊勢物語』で知られた「風ふけば」歌の詠まれた状況にアレンジを加える。

小野芳子は、『大和物語』第六十段から第六十六段までの「在中将章段」を『伊勢物語』・『古今和歌集』の表現を比較した論で、『大和物語』述作者が目指しているのは、歌や章段を読みかえるおもしろさであり、その意味で虚構的な物語構成なのである。^(註1)と述べているが、在中将章段に限らずいえることだろう。

『伊勢物語』も『大和物語』も、和歌集の詞書ではなく、散文という物語の中に和歌を置くことよつて、詠まれた状況を変化させる。それは和歌の多様な可能性を持った解釈をある一定方向に定めることでもある。しかし、一方で状況が詳らかなり、物語の一場面と捉えることで、深い意味合いを帯びてくるともいえる。

三十一文字のみの世界と散文と共生する世界は異なるが、和歌

がその形を崩さない限り、どちらの視点で読むこともできる。

そして、『伊勢物語』も『大和物語』も和歌のみに限らず、言葉の〈音〉に注目していた作品であつた。

三、名前と〈音〉

第一部では『伊勢物語』の和歌だけではなく、散文部分において、言葉の〈音〉に注目した解釈を試みた。また、『伊勢物語』の主人公「男」の名前が明かされないこと、周辺の名前が明かされるの登場人物の〈音〉に意味があることについては、第二部第一章で述べたが、『大和物語』についてはどうだろうか。

『大和物語』で名前が記される人物は、『伊勢物語』のように言葉遊びの要素を持つ者が見当たらない。

また、「亭子の帝」や「三条の右の大臣」、「堤の中納言」など男性は有名な人物が多いが、女性で最も多く登場するのは「としこ」という「右馬の允藤原の千兼といふ人の妻（第十三段）」である。実在した人物のようであるが、『大和物語』の外では有名な人物ではない。他に「監の命婦」や「右近」という女性たちが登場する。

【注】

(注¹) 『大和物語』在中将章段及び周辺章段を読み直す」(『國語國文研究』第131号、二〇〇七年三月)。

(注²) 「歌語りの場―古今・後撰、そして大和物語―」(『物語史の風景』若草書房、一九九七年)。

終論

本論は「歌物語」として、『伊勢物語』と『大和物語』を対象に考察した。

第一部は『伊勢物語』の和歌と〈音〉について注目した。

第一章では、第四十五段で主人公「男」が詠む二首の和歌の解釈に、どこまで散文の表現、状況設定を反映するかを考察した。

第二章では、第十三段の「むさしあふみ」という言葉について、手紙を受け取った女が理解した背景に、東下り章段に連繋した東国章段であるという関係を踏まえ、第十三段内のみで考えるべきではないことを述べた。

第三章には第二章からさかのぼる形になるが、東下り章段の最後に登場する「みやこどり」について論じた。鳥の実態よりも、「すみだ河」という場所に白い「みやこどり」がいることを重視し、「みやこどり」が名前に負わされた意味を説いた。

第四章では、第二十三段の「けこ」という言葉に注目した。多くは器を意味する「筥子」の漢字があてられるが、「男」が高安の女に通うことになった理由を根拠に、「家子」の可能性を論じた。

第五章でも、前章で対象にした第二十三段を中心にしながら、『伊勢物語』で音楽演奏場面が少ないことを論じ、『伊勢物語』が聴覚効果としての詠まれた和歌の〈音〉を重視していたことを述べた。

第二部では、『伊勢物語』の実名章段について考察した。

第一章では、主人公の「男」の名前が明かさな理由とその他の登場人物の固有名に言葉遊びが指摘されることについて述べた。

第二章では、『伊勢物語』中、最も多く三度実名で登場する、紀有常が実際の在原業平とは義理の父と息子という関係であったにもかかわらず、作品内で「友だち」と設定されていることに注目し、『伊勢物語』における「友」・「友だち」について考察した。「友だち」と設定される「男」と有常が惟喬親王という文徳天皇の第一親王でありながら、帝位につけなかった人物の供をする意味に、「友」と「供」という対極にある人間関係を表す言葉を同じ〈音〉であることによってイメージレベルで繋がる力があることを指摘した。そこには、「やまと歌」によって風流な精神的な世界を共有する者たちの集合としながらも、その核となる存在に惟喬親王を置くことで、根底には政治的敗北者の連帯感が存在する。

第三章では、第三十九段で「たかい子」、第七十七、七十八段で「多賀幾子」という高貴な女性の死を描く意味を考察した。この二人の女性の名前の〈音〉が二条後の名前である「高子」と同じであることを指摘し、第三十九段前後には二条后章段の発端である色好みの側面と、第七十七、七十八段前後には、二条后章段の結末となる政治的側面を分担していることを確認した。二条后章段は、第六段で女が鬼に食われるという異界で一応の結末は描くものの、実際は兄たちに取り返されてしまう悲恋に終わる。この二条后を密かに葬るため、同じ〈音〉の名前の女性の死が描かれていると論じた。

第三部では、『大和物語』を中心に考察した。

第一章では、『大和物語』の作品構成上、どこまでを〈前半〉とすべきかについて、「物名歌」の存在に注目し、第四百四十六段までと設定した。物名歌という言葉の〈音〉を和歌に組み込む技法が仮名で書かれたものを前提基盤としていることから、口承段階の「歌語り」的と言われる『大和物語』の表記言語性を主張した。

第二章では、『大和物語』の贈答歌について考察した。贈答歌でありながら、対になって記される段が少ないことから、和歌の省筆がおこなわれており、和歌が存在したことのみを伝え、内容

を忘れた、あるいは聞いていない、などとして書かないことの意味に、物語の〈語り手〉というべき、何を伝え、何を伏せるかという情報の取捨選択を行う存在が垣間見える点を指摘した。

第三章では、これまで考察した『伊勢物語』と『大和物語』についてをまとめ、どちらも〈音〉を表す仮名により可能になった言語遊戯を駆使していると論じた。

従来、「歌語り」という文字で記す以前の口承で、つまり〈音〉のみで、和歌と和歌にまつわる物語を伝えていたとされ、当然形を持つて保存不可能な状態のものであった。

「歌物語」とは、そうした「歌語り」を記述した作品形態と解されるが、本論で考察したように、『伊勢物語』も『大和物語』も語るような世界、つまり言葉の〈音〉を重視した物語であり、〈音〉を表記する仮名によって可能にあったものである。

在原業平を思わせる「男」を主人公にして展開した『伊勢物語』、さまざまな人物を登場させて人間関係を展開した『大和物語』は、「和歌」を核において散文によって物語を作り上げた。

『大和物語』の〈後半〉にはその散文部分は拡大化し、のちの「説話」に繋がる表現方法を提示している。

「歌物語」は〈音〉を表す仮名を手に入れたことによって表現された世界を表している。